

特集◆車と私

インタビュー●アパレル業界の実態

●あーっ、腹が立つ!

投稿誌

読んで書いて、みんなで作る

288



ウェル・エイジング・コミュニティ

# 宝塚エデンの園

平成12年10月全体開設

〒665-0025 宝塚市ゆずり葉台3-1-1

☎0797-76-3800

22年の経験をもとに新しい時代の有料老人ホームを目指して

入居者募集中!!

1人入居入園金

2,810~6,820万円

(2人入居は1,400万円追加)



宝塚エデンの園は、  
社会福祉法人聖隷福祉事業団が  
設置運営する介護付終身利用型の  
有料老人ホームです

昭和54年開設の有料老人ホーム「宝塚エデンの園」は、一層の健康管理・介護体制の強化、共用施設の充実等を目的に大規模な増築工事を行い、昨年10月に全体開設致しました。今回の増築により、359戸の一般居室、50戸の介護居室、温水プールやマシンジム等を持つ疾病予防運動センター、多目的ホール、ビデオシアター等の共用施設を備えた、新しい時代の有料老人ホームとして生まれ変わりました。是非一度宝塚エデンの園にお越し下さい。

●お問い合わせ、資料請求および見学、体験入居のお申込みは

エデンの園入居者募集センター 宝塚事務所

はなの いろうご

フリーダイヤル



0120-87-1165

月～金曜日

9:00～17:00



「わいふ」を読む

「わいふ」に書く

あなたの人生が開ける

30 27 24 22 18 16 13 10

4

わいふ

読んで書いて  
みんなでつくる

288号

## 目次

デザイン／宮塚真由美  
題字／石渡希和子  
表紙イラスト／箕輪絵衣子

イラスト／ 荒田ゆり子  
イシノフミ 小沢恵子  
カステラネンコ 栗田笑  
弘法堂建二 小林正子  
佐藤瑞江子 田沼千恵  
西宮さき 橋本美智子 渡辺美帆

わが家の歴史写真  
禍を転じて福と為す  
東京都青梅市 福島みさをさん  
写真提供・文／福島みさを

### 特集 車と私

愛してるよっ 伊藤琴子  
車がくれた出逢い 砂原富美子  
憧れのHONDAシティ 鈴木紀美枝  
クルマとは「音楽も聴ける大八車」である 重松めぐみ  
私と車のつきあい 新井純子  
教習所通い 江戸千恵  
車よ今日もありがとう 吉田淑子  
私らしさを取り戻すとき ゴル

120

116

104

103

96

95

88

85

ズバリ一言  
永田道子・末摘花・木村澄子・吹野あゆ子  
岩田和子・岡博之・斉藤さよみ

コミック これが子供の生きる道 20 栗田笑

フリートーク  
松本とみよ・鈴木由美子・大沢陽子・匿名  
和田美代子・青島典子

報告・古稀を祝うパーティ

嫌疑 連載3 野村浩子

おすすめの一冊 田中喜美子

今これに夢中  
浅田節子・十河温子・高松恭子・笠原静枝

私の意見・あなたの意見  
後藤晶・井上暁子

読んでよかった

布施幸子

エッセイスト・クラブ

桜井淳子・布施幸子・高橋安子

榎 雅子・匿名・福島みさを

一筆両断 20 西田淑子

家族のスケッチ

加藤智恵子・浅川涼子・三田サキ・森 恵子

中松ミナ子・匿名

あなたへスマッシュ

後藤 晶・鈴木紀美枝

連載 5

リラの花 桜の花

浅野素女

インタビュー

アパレル業界の実態

アスカ企画・和田麻子さん

インタビューアー・田中喜美子

ブック情報

あーっ、腹が立つ！

須賀まり子

子育てフォーラム

鈴木貴子・野田めぐみ・杉田みほ

●NMSのページ●

コミック 毎日が平日 海砂

情報コーナー

私もひとり

小山佳世子・伊藤琴子・太田啓子・トト安田

鴨川典子・後藤 晶・須賀まり子・花岡京子

石井しのぶ・野田めぐみ

スタッフから わいふインフォメーション 147

募集します 投稿のきまり 149 150 148

編集だより 152

お友達にわいふを 61 バックナンバー 87

# 禍を転じて福と為す

写真提供・文／福島みさを



東京都青梅市

福島みさをさん

自宅から真向いの愛宕山に大雪の降った朝、詩を作りました。  
夫の作った詩を私が書き、軸装にしてもらいました。(夫巖と私)



わが家とその大黒柱



姑のクメ



おけいこに行く 20歳



女学校の級会で 70歳

私は二十三歳で一度見合いをしただけで、相手の家のことも家族のことも分からぬまま、福島家に嫁いで来た。夫から奉書に筆で書いた「家風と心得」を渡され「必ず守ります」と言った。

今八十歳になって、「よくこんなに素直に勤めて来たものよ」と純真無垢だったあの頃が懐かしく思われた。

嫁して三か月で夫は出征し一年三か月留守を守った。

帰還して父からの材木店を継いだのが、敗戦後の商いは厳しく昭和三十年倒産してしまい、工場を閉鎖した。このままでは家族を養うことも出来ない、家屋敷、畑、山を担保に借入金でガソリンスタンドを始めた。

見通しは間違っではないなかったが、苦心して成果が上がって来た五年後、親会社に赤子の手を捻るやり方で取り上げられ、何も彼も失い路頭に迷う羽目に陥った。

捨てる神あれば拾う神もあり、父の紹介で吉祥寺に杜宅つき、二人の勤め口も手配して下さった恩人に出合い、お陰



橋田寿賀子先生とホテルオークラで対談

「主婦業に熱意」はふえりませんが、  
 熱意に値する主婦はいらぬではないか。  
 今田寿賀子の橋田さんは、自分の姑はそ  
 の熱意に値すると、お手紙をくれた。  
 世に嫁姑のトラブルは絶えることがない。  
 福島家は例外中の例外なため、おに  
 ぎのケチももらさぬ。陰になりひなたに  
 なりて舅姑につくす。嫁・その兄様を感謝  
 して見守る小姑。日本の古い大家族の、よき  
 名残を仕えらるゝみことな人間関係である。

非ハ、ムレ、ムレ  
 非ハ、ムレ、ムレ  
 信、得、た、い、は  
 取、得、た、い、は  
 取、得、た、い、は  
 橋田 寿賀子  
 八四日



九五歳のお祝い

で十年間昼夜はたらいた。墓穴で取られた家  
 も買い戻すことが出来、舅は自分の建て  
 た家で亡くなり、葬式を出した。親不孝  
 の償いと思う。三人の子供は田舎では受  
 けられない教育を受け、就職するまでに  
 なり、性質の良い人間に成長した。

姑一人になったので夫と二人田舎へ帰  
 った。私は呉服屋に再就職した。五年後  
 のある日、難しい人間関係に堪えきれず  
 早退して美容院に行き、雑誌の中に「橋  
 田寿賀子先生に手紙を出す」という募集  
 を見付け、姑のことを書いて出した。間  
 もなく先生から「対談」のお話が来て、  
 ホテルオークラで対談、「主婦と生活」  
 に写真共八ページも掲載され親孝行が出  
 来た。

夫は五十代で胃の三分の一と十二指腸  
 を手術、後遺症で苦しんでいた。十三年  
 後に胆嚢炎でまた手術、まる二か月入院、  
 その後腸閉塞になり小腸を一、八メート  
 ル切り取り、九死に一生を得た。その時  
 に以前癒着していた部分も取れたので、  
 考え方によれば「禍を転じて福と為す」  
 なのかもしれない。



昭和58年、娘、妹、私3人でお茶に通い初め、嬉しい時も辛い時もお茶の席に座ることにこやかに過ごせた日々。姑を99歳で送るまで介護に疲れた私をいやして下さった大久保宗有、宗瑛先生。80歳になった今も、休みながら高齢者の茶道教室に行っております。

(青梅茶道会茶会)



家族そろって



孫の彩と謙、娘幸代  
自宅の庭、夫手作りのみかげ石の石段の踊り場



自宅の縁側で

# 超初心者のための パソコン通信講座「クラブネット」

電話でしっかりサポートだから安心です。



只今  
「わいふ」読者  
受講料10%OFF  
キャンペーン  
実施中!

クラブネットなら目的に応じて選べる特別お得なセットコースを設定。受講料はお手頃な月々7,500円から。必要な方には最新のパソコンセットを大型電気店に負けない価格でご提供。パソコン機材も受講料も、分割払いができますから安心です。

「手順に従って進めるだけで

パソコンができるようになる!」

クラブネットでは、

コンピュータの専門用語を極力使わずに

パソコンが全く初めての方にも

分かり易いテキストを作り上げました。

「パソコンはどれも苦手」という人にこそ

チャレンジして欲しい。

それがクラブネットの通信講座です。

3、4カ月後にはきつとあなたも

パソコンを使いこなしてしまいます。

今こそ勇気を出して始めてみませんか?

クラブネットが最後までお手伝いします。

只今、「わいふ」読者一割引キャンペーン中!

クラブネット通信講座を受講してできるようになること

●文章を書く ●案内状やお手紙、年賀状等を作る ●簡単な

表やグラフを作る ●インターネットを使って、情報を集め

たり買い物をする ●電子メールのやりとりで、友だちやサ

ークルとの交流をはかる など、くらくらく学習で、「中級程

■お問い合わせ・資料請求は

## Club Net

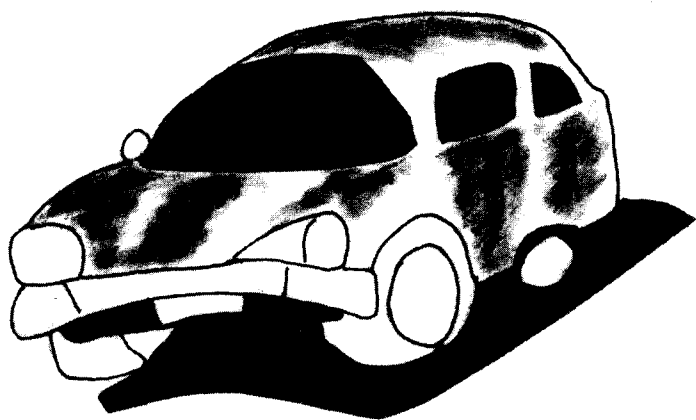
初心者のためのパソコン操作通信講座 クラブネット

〒104-0045 東京都中央区築地2-4-10  
株式会社アイデックス  
「クラブネット事業部・わいふ係」

TEL 03-3544-4500 FAX 03-5565-1066

# 特集

## 車と私



# 愛してるよっ

アメリカ リトルロック市  
**伊藤琴子**

私の住むアメリカは車社会である。が、大都市に行けば一部を除いて、バス、地下鉄、電車等の公共機関を利用

できるし、タクシーなどもたくさん走っている。民主主義で「平等」をモットーとしているお国ながら、貧富の差が大きく、国民の誰でもが車をもてるわけではない。が、皆運転免許証を取る。身分証明書として使われるからである。私もアメリカに來た当初は、パスポートを身分証明に使っていたんだけど、田舎のお店の人などは、パスポートを一度も見ることがなく、また何の為にそれが使われるのかもわからず、いちいち日本の外務大臣が、判押したとか説明するのも面倒になって、

車の免許をとることにした。わが二十歳の時のことである。

道路事情が悪く、高いお金を払って自動車学校に通わなくてはいけない日本と違い、アメリカの免許は超簡単で安い。私はまず、法規の本を読んで筆記試験を受けた。一発でパスし、仮免をもらう。大学のど広い駐車場で免許所持者に隣に座ってもらい、練習をした。その次は、フツの道、そして高速道路、車庫入れ、その他を練習し、実地試験。これも一発でパス。は、したが、やっぱりこーゆうふうにかなりアバウトなやり方で、免許が取れたことに對してかなり不安はあった。日本ですっかり免許を取った人は、高いお

金と厳しい教習のおかげで私よりいろいろ御存知なのよね。免許のグッチャルイヴィトン感覚ってとこかしら。

私は大学院はキャンパスで寮に暮らしていたので、講義に出るのも、食料品を買いに行くのにも車は全く必要なかったため、ずーっとペーパードライバーだった（注・ペーパードライバーは和製英語で、アメリカ人に言っても通じない）。

そして、卒業を九月に控えた私は、父と母がわざわざ卒業式に出席するため日本から来るというのと、ウィットンバーグ大学に就職が決まっていたので、新車を買った。今から十三年前、昭和六十二年のことである。いすゞアイマーク、日本では確か「ジェミニ」という銘柄だったと思う。

その当時、TVで「ジョーリスズ」というキャラクターがこの車のコマースタルをしていて、私の車は「イギリスのエリザベス女王御用達」とかの代物だった。ブルーのメタリック色、セダン、4ドア。4ドアにしたのは、将

来結婚して、子どもを乗せるにはドアが二つよりも、後ろに二つで四つあった方が便利じゃろう、と、思ったからだ（が、とらぬ狸の皮算用に終わっている）。

オハイオの冬は寒い。市の雪かき車が朝みんな出勤する前に、家、お店、学校、官庁、と道路の雪をとり除き、塩をまいていく。別に、お清めの塩というわけではなく、塩は雪をとかし、車が走りやすくなるのである。厳寒の時

には、車のドアを開け、中に入り、座るとシートが氷のようになっていて、コートを着ていても冷やっとなしてゐる。吐く息が窓ガラスに結晶となりこびりつく。おおお、寒い。寒い。エンジンジンをかけ、二、三分待ち、やっと出発となる。夏にあんなに暑くなるのに、冬こんなに寒くなるのは許せん、と、思っていた。北部の方では、道路に除雪用にまく塩で、車体の下半分がさびついてしまい、ボロボロになって、

車を買う換える必要がでてくる。

私は、車を買った次の年にテニユア（終身在職権）をあげてもよいというアーカンソー大学リトルロック校に移ることになった。ウィッテンバーグ大学とは、一年だけの客員教授の身の上だったからである。

アーカンソーは一年の半分が夏である。大阪と同じ緯度なのに、砂漠のように温度の上がる真夏を除き、とてもいい気候が続く。雪の降る日は年に一度か二度。大雪だと官庁、学校等がすべて閉鎖になる。私はおうちにおいて、お給料が入ってくる雪の日が好きだけど、車もさびなくてよいのだ。

私のアイマークは、ちゃんとオイルを交換したり、定期的に「検診」してもらったり、故障もなく、事故もなく、ありがたかった。三年目になって、日本人の男子学生が「先生、車は三年ごとぐらい買い換えた方がいいですよ。高く中古で売れるし」云々と、言った。車に詳しい彼は、なんだかんだと私に説明をし、私は、じゃ次のモデルのア



イマークを買いおうと決心をし、ディーラーに電話をした。感じのいい若い男が出た。

私は、「新車を買いたい」と言えばどんなディーラーも喜んで、見に来て欲しいとか、こういうのをすすめます、とか言うのかと思っていた。アメリカ人の女友達は、「女だとバカにされて高く売りつけてくるから、買いに行く時は、男。それも自分の父親とかいう感じの男と一緒にいき、値段交渉した方がいい」云々、と、言っていた。

いすゞのディーラーの男は言った。

「車、何年目ですか？」

「三年目」私は答えた。

「たった三年。レイディ（女性のこと）をここではレイディとか呼ぶ」、あなたの車の会社のいすゞはトラックを作っているような優秀な会社です。三年目でどこが悪いのですか？」

「いいえ、よく走ります」

「じゃ、別に問題ないんなら買い替える必要はありませんよ。十年位は乗っ

て下さい」

なんと良心的というか、商売っ気のないディーラー。私はそう思ったのだけど、十年はもつ、その優秀な車を選んだということが嬉しく思われた。

ま、優れた車ではあるが、遠く離れて住む私の父親にとって、五年を過ぎたあたりからちよつと心配になってきた。新車を買う足しにね、とか言って、父は五千ドルを二、三回送ってくれた。夜運転中、どこか人気がないハイウェイとかで故障したら、娘の身の安全が気にかかるではないか。

私は父の気持ちがとても嬉しかったし、五十万円単位で送られてくるお金も有難かった。だって、海外旅行に使ったんだもん。父と母が卒業式から九年目にアーカンソーを訪ねた時、空港で彼らを迎えたのは、以前と同じアイマークだったのである。お久しぶり。

母に言わせれば、私は横領、詐欺の類ではあるんだけど（ごめん）、車の部品は徐々に新しいのに替えているし、タイヤもローテーションしたり、

新品を買ったりして、一応スムーズに走るので、ま、いいか、ということになった。「あなたのような消費者ばかりだと、日本の車産業はつぶれる」と親類がトヨタに勤める母は言った。

私の弟はそういう母の同じ腹から産まれてきたのだが、学生時代からホンダに乗り、それもボタンを押すとス、ス、スーッと、頭の上の天井が開き、カッコイイ、スポーツタイプの2ドアに乗っていた（生意気！）。そして、二、三年ごとにホンダ、ニッサン、フォルクスワーゲン、ホンダ、と、スター気どりで車を買って換えている。都会のサラリーマンに一体、どこに金があるのでせう？（私は年金小金持ちの父を疑っているのだが）。あなたの五つ歳上のお姉様は今だにアイマークに乗っているよ。しつこいぐらい乗っているよ。

二千年になってから、私の車は十マイルを突破した。計量器が九九九九、九が五つ並んだ時は感激した。スロットマシンと一緒に、同じ類が並

ぶとなんとなく嬉しくなってしまうの  
よね。新車で買ってから、満十三年、  
よく走ったと思う。そう友人のケイに  
話したら、ケイが以前乗っていたニッ  
サンの車はなんと百万マイル走ったそ  
うな。オーマイ!! びっくりしたよね。  
で、ケイはその車が駄目になった時、  
再びニッサンの新車を買った。近くに  
住むミシエルは、五年前クライスラー  
のバンを買う前はすばるの車に十三年  
乗っていたし、うちの学科長はトヨタ  
を同じく十三年間乗っていた。私は、  
いすゞを一年でも、二年でも長く乗り  
たいと思っている。

以前、三年目で買い換えをすすめた  
日本人の男子学生が言ったことを思い  
出す。

「先生、ものにも気持ちについていうか、  
そういうのがあってね。こっちが大事  
に使う、大切にしていあげよう、いつ  
までももち続けたい。そう思って使っ  
てあげると、こたえてくれるんだよ。  
生き延びるのは人間だけじゃないんだ  
よね」

ものでも人でも、大切にやる心、気  
持ちというのが、長続きさせる秘訣か  
もしれない。私は「高齢者」となった  
車に、「さあつ、今日もがんばってい

こうね」と呼びかけ、「今日も一日安  
全運転をお願いします」と祈り、一日  
の仕事が始めるのである。大切な私の  
アイマークちゃん。愛してるよっ。

## 車がくれた出逢い

熊本県八代郡

砂原富美子（44歳）

私は二十三歳の時OLをやめ実家に  
帰った。父が商売をしていたため、配  
達には車が必要だ。

病気がちな父の代理としてメーカー

から専属の配達員が来てくれていた。

「おまえが免許を取って、家業を継い  
でくれたらなあ」

父の頼みを叶えてあげたくて、自動  
車学校へ入学した私だったが、生まれ  
つきの運動オンチ。自信なんて全然な  
かった。

十月の初めに入学したのに、免許証  
を手にしたのは翌年の二月だった。途  
中で何度かやめたくなったが、父の喜  
ぶ顔がみたくて頑張ることにした。

たくさんの時間と多くの費用を使  
い、手に入れた免許証は、私の宝物に  
なった。

四人姉妹の中で免許を持っているの  
は私一人。それも一番の運動オンチと  
きている。

免許取得の報告をすると、父は「そ

うか取れたか」と喜んでくれた。

父と一緒に配達できる日を楽しみにしていたが、父の病気は日増しに悪化していき、やがて入院。そして手術となったが、時すでに遅しで、五十九歳で他界した。

小さな調味料専門店を営んでいた父は、娘に婿をとらせて家業を継がせるつもりだったのかもしれない。

父と共に働いてきた母にとって、娘に同じ苦勞をさせるのはつらいらしく、父の死と共に店を閉店することになった。私に残された仕事は、未収金を回収することだった。

もっと早く免許を取って、父の仕事を手伝っておけば良かったと後悔した。

でも父のことがなかったら、私は免許を取ることもなかったし、こういう動機であれ、ハンドルを握り運転できることは大きな喜びになった。

ある日、車のエンジンが異常音をたてているのに気づいた男性から声をかけられた。

それが出逢いの始まりだった。彼は車の整備士で、兄弟で車の販売、修理、点検、車検をするモータースを経営していた。

あのまま運転していたら、私はこの世に存在していなかったかもしれない。運転オンチに加え、車にはまるで無関心な私に、専属の車のドクターがついたのは、幸運だったと思う。

一か月の交際の後、とんとんと話は進み三か月後には結婚。芸能人もびくりのスピード結婚だった。夫にしてみれば危なくて放っておけないので、早く結婚して車に乗らなくてもいいように、夫の車の助手席に乗せるためだったらしい。

子供が生まれ、育児に追われ車のことは全然頭になかったが、友人が子供を連れて車で遊びに来た時は、かわいいチャイルドシートや、車だと買物も楽よという言葉に心が揺れた。

「車の運転したいな」

夫に相談すると、

「もう何年も乗ってないだろう、危な

いぞ」

と心配顔でいう。

それでも注意するからと頼みこむと、軽自動車を仕事場からもってきてくれた。

夫が助手席に乗って、指導してくれただけでなんとか運転できた。

しばらくすると、夫が忘れた弁当を届けたり、片道二時間かかる場所へもドライブできるようになった。子供が保育園に通う頃には近くの会社で事務のパートとして勤めるために、車で通勤した。

夫も安心して、遠出しても心配しなくなった時、私は人身事故を起こした。

クリスマスが近づいた商店街は、人で混雑していた。冬の夕暮れは、あつという間に暗くなる。駐車場から路上に出た私は、ライトをつけた。狭い路上に突然何かが飛びこんできた。

ガシャン!! 何かがぶつかった。

ブレーキをすぐにふんだ。長い時間に思えた。ドアからはじき出されるように車外にでると、自転車のタイヤが

カラカラと回っていた。そして人のうめき声!!

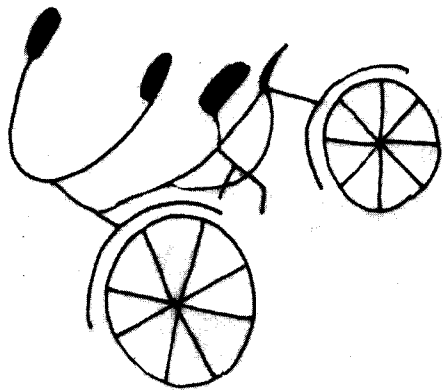
頭の中が真白になった。心臓がこわれそうなくらい早く動いている。

「大丈夫ですか」

女性が倒れていた。

「急にライトをつけたらあかんよ」

元気そうな声に、涙が出そうになる程うれしかった。ハンドルは曲がってしまったけれど、頭は路上で打ってい



ないらしく、手足には傷を負っていた。すぐに車で病院へ向かう。

念のため、検査をしてもらうことになった。夫に連絡をしたのは、警察へ届け出を済ませた後だった。

「警察へ迎えには、もう来てやらんぞ」夫にしかられたが、これくらいで済んで良かったと夫がぼつりといった。

翌日に新しい自転車を買に行った。すぐには乗れない体にしてしまっ

たが、せめてものおわびのつもりだった。幸いにも入院にはならず、通院になったため、私は毎日御見舞いに行った。

ばんばんに腫れた手足は痛々しくて、申し訳なくて涙がでそうになったが、毎日様子を見に行くたびに、少しずつ笑顔が返ってくるようになった。

六十過ぎたその人は、夫と二人暮らし、娘が県外に嫁に行っているという。運動オンチで、私を見ていると娘を思い出すという。

「小さい子供がおるのやけん、交通事故故には気をつけんばん。私がケガするのはかまわんけど、用心せんばん、あんたが命を落とすかもしれんよ。車は便利だけど、ひとつマチガエルと人殺しになるけんね」

彼女の言葉は、私の身を案じてくれる優しい思いにあふれていた。そばでうなずく彼女の夫は、自分の娘を見るような目で、

「ケガが治ったら、もう逢えんようになるけん、寂しかね」といった。

父が生きていたら、きっと同じ年ぐらいだろう。私を娘のように思っていて心配してくれている。父のために取った車の免許で、心配してくれる優しい人達に出逢った。天国の父からのプレゼントだったのかもしれない。しかしそれ以来私は運転していない。

誰でも免許をもっているのが普通に

# 憧れのHONDAシティ

東京都小平市 鈴木紀美枝（39歳）

七月——その日は朝から小雨模様だった。私は中古で買った三六〇CCの軽自動車に乗って、国道一号線のまっすぐの道を走っていた。二十四歳で免許を取った時に購入した車である。その車で保育園の送り迎え、仕事、家族四人の外出と、決まって私が運転して

いた。

その頃の私は、損害保険会社で営業をしており、夕方六時に帰宅した後、四歳と一歳の息子二人を後部席に乗せ、代理店に行き、深夜帰宅する日もあり、少し疲れていた。

営業所には出勤せずに、直接顧客ま

わりに向かうという電話を入れ、渋滞気味の道路を西へと走っていた。

私は高速道路や直進に弱い。半分眠った状態で走ることよくある。車はもうじき湖の上にさしかかるところだという、かすかな記憶がある。そして次の記憶は、誰かの手によって、運転席のドアが開けられ、誰かの手によって、右頬にタオルのようなものがあてられ、車の中から担ぎ出され、救急車に運ばれようとする時、もうろうとする意識の中で自分のセカンドバックを掴んだ。車内で、二男を出産した総合病院に向かうのだという声を聞いた。そういえば、大きなクラクションの音が聞こえたような気もする……。

気が付くと、目の前に会社の支部長の心配そうなまなざしがあった。うす暗い病室のベッドの上に私はいた。長い橋を渡った先にある駅前の交差点で、大型バスと正面衝突したのだという。自賠償が使えないか、とか相手方にも過失があるかなど、早速示談交渉を始めてくれているようだった。起き

上がろうとすると目まいがする。当時の中古車のシートベルトは二点式で、腰骨のところを固定しているだけなので、衝突の弾みで顔をハンドルの打ちつけ、細かく割れたフロントガラスが顔に無数に突き刺さっていた。

それでも不幸中の幸い（と支部長にいわれた）だったのは、異変を察したバスの運転手が車を停止させていたた

め、事故が最小に抑えられたこと。それから、回送中で乗客が一人もいなかったのも、人身事故に至らないで済んだこと。

バスが止まってくれたお陰で、一〇ゼロ、私が一方的な加害者となった。一週間後に抜糸をした。若くて気のいい医者が本数を数えながら、ハサミで切りピンセットで引き抜いていく。百



四十本を越えたところで、数えるのを止めた。肘と足のつけ根近くにも数本あった。細い糸で、四時間がかりで縫ってくれたとのことであった。

十二日程で退院し、自宅では少し頭がフラフラしたが、徐々に回復していった。労災保険がおりて、その後の形成手術の費用も払っていただいた。

後日修理工場に廃車手続きに行った時に目にしたその車は、前部がつぶれた無惨な姿だった。ホンダライフ——濃い青紫に塗装されている車を、車検のときに、白で全塗装し、エンジンをオーバーホールして、ますます愛着を持って乗っていた矢先であった。新型ライフより重厚な、昭和五十三年初年度登録の古い車を、私は今でも懐かしむ。

もう一生車には乗らないという決心も数か月で空しく消え、足代わりに乗り回す日々は続いた。だが、ここ五年は、車を持っていない。移動は公共交通と、自転車と徒歩である。現在住んでいるアパートの南側は、大家が所有

する駐車場で、西隣も駐車場なので、陽当たりは最高。だが、そこにとめる車は所有していない。車を所有しないことの快適さを今は愛する。自動車は生活必需品ではない。自動車を大人のオモチャとして楽しむ道楽を欲しない。公害の心配も、人を傷つける怖れも、お金もかからない健康的な趣味を求めている。

だが、運転は好きである。単調な運転によって眠りに陥ってしまうという致命的欠陥さえなければ、大型ワゴン車でどんな道も楽に走ることが出来、リフト付福祉車両で、病人、障害者を心地よく送り届ける自信がある。

心の中では、もし今度、間違つて車を持つことになるとしたら、今ではもう古い、二十年まえのホンダCITY、と決めている。もちろんマニュアル車。無駄なメカ、装備のない車を大事に乗る。まん丸いライト、独特の車体のライン、そして、あの頃の思い出を運んで来てくれる、そんな気がする。

再び車を持つのだとしたら――。

## クルマとは 「音楽も聴ける大八車」である

川崎市麻生区 重松めぐみ（35歳）

先日、気持ちわるいものを見た。日

曜の昼下がりのことである。家族で車に乗って走っていたところ、目の前に、このクソ寒いのに二人乗りのオープンカーに乗っているやつがいた。

とはいっても、「このクソ寒いのにオープンカーに乗ってるやつ」は、そう珍しいものでもない。港区・渋谷区あたりでは時々見ることが出来る。

なにが気持ちわるかったかって、そのオープンカーに乗っていたのが、オヤジ二人組だったのだ。ちょっと派手めで、広告屋入ってるかなー、といった雰囲気、白髪交じりの二人。

しばらく前を走っていたその車は、やがて左側に見えてきたテニスクラブ

の駐車場に吸いこまれていった。

「なんか気持ちわるいもん、見ちゃったね」と夫と言ひ合いながらその場を通りすぎた。ちなみにそのテニスクラブは、つい最近入籍したSMAPのキムタクが、ピンクの壁もあざやかな新居を購入した場所にほど近い、この辺ではちよつと有名な高級住宅街の中にある。

車選びにこだわり、大事にメンテナンスをし、自分のアイデンティティの一部にするのは、たいてい男性のようない気がするが、たまに女性のなかにもそういう人はいる。わたしはかつて、そのような友人にひどい目にあわされた事がある。

その友人はボルボに乗っていて、夫は「筋金入りのボルボユーザー」であると言癖のように言っていた。彼女自身も、「ボルボに乗りながら、あえてボロボロの格好をするのがわたしのこだわり」などと言っていたので、ボル

ボを所有していることに、とても誇りをもっていたんだろうと思う。

その彼女と全然別の理由で大ゲンカをしたことがあった。やりとりはメールで行われたので、内容は全部文章になってクリアーに残っている。だから

後腐れのあるケンカになってしまった。その時、最後の彼女のメールで「蛇足ですが」という書き出しで始まったのが全然そのケンカと関係ないボルボの話だった。

というのは、ケンカするちょっと前、たまたま車の買い替え時期を迎えていた我が家は、たまたま中古車屋で夫婦ともに気に入ったボルボを、たまたま手持ちのお金で買える値段だったこともあって、買うことにしたのだった。

そのとき、こだわりボルボの彼女の顔が浮かび、真似するみたいでいやだなーと思ったことは思ったのだが、「真似みたいでいやだから買わない」のもかえって大人げないと判断して口にはしなかった。

「ボルボを買うことになりそう」とメールで彼女に報告したとき、返信には「せっかく買う気になっているところに水を差すようで悪いですが」という書き出しで、

1 ボルボは加速が悪い

2 同じくサスペンションが悪い



3 北欧車なので、クーラーのききが悪い

4 燃費が悪い

などの欠点をあげてあり、「とにかく買う前に試乗することをおすすめします」とも書いてあった。

そのメールの結びは「重松夫妻がホンダファンと知り、長年ボルボと苦楽を共にして来た者として、あえて苦言を呈します」だったが、わたしは「ホンダファン」を自称したことは一度もないので、「ホンダファン？ 苦言？ はてな？」と思った。たまたま免許をとってから今まで、ホンダの車ばかり使用してきたと言ったことはあるけれども。ボルボの前に乗っていたコンチェルト（今はもう製造されていない）なんて、買った理由は「名前が気に入ったから」だったし、そんないいかげんなヤツが「ホンダファン」を名乗るわけないじゃないか。

今こうして当時の文面を見なおすとよくわかる。アドバイスの体裁をとってはいしたが、彼女は必死で「色と形が

気に入ったなんていういいかげんな理由でボルボを買うのはやめてくれー！」と訴えていたんだな。気づかなくて悪かった。最終的に買ったときには黙っていたが、よっぽど腹に据えかねていたのだろう。そしてケンカのついでにそれが噴出してしまったのだから。

で、前述の「蛇足メール」の内容は要約すれば、「シートベルトもろくにしないようなアンタ（たち夫婦）はボルボにふさわしくない」および「真似をされるのは不快である」の二点で、それをえんえんと何行にもわたって「客観的な考察」の体裁をとって書いてあった。わたしは「しょえー、なんじゃこりゃ」とびつくりし、次にはものすごく腹が立った。「こだわる彼女」が、「こだわらないわたし」を実はすごーく、見下していたことがよくわかってしまったからだ。わたしはマゾっ気はないので、自分を明らかに見下している相手とお友達になっていたく趣味はない。

当然彼女とは、そのメール以来音信不通だが、二年ほどたった現在、肝心のケンカの本題の方は「お互い様だった」と冷静に思えるようになっていたのに、蛇足だったはずのボルボの件の方が許せなくて、「あんなヤツとは二度と会いたくない」と百回くらい言えちゃうくらい、いまだに腹が立っている。

たぶん、「車にこだわる派」の人達との溝は一生埋まることはないだろうが、私をほっとしてくれる分には、好きにやればいいと思う。冒頭のオープンカーオヤジだって、勝手に自己陶醉してる分には無害である。こだわる派……車に限らず、例えば子育てでも、ファッションでも、食品の安全性でもいいのだが、とにかくこだわる人達が陥りがちなのが、こだわらない人達、あるいは自分と流派が違う人達を非難したくなる誘惑だ。

自分が正しいとか、立派だとか、ステキだとか、心の中で思う分にはいくらでも思えばいい。でも、それを確

認・補強したいがために他人を非難するのはとーつても迷惑だから、やめてほしい。

ともあれ、若い頃は事故や違反を何度もやり、「族車走り」とありがたくないレッテルを友人達から貼られていたわたしだったが、出産してからは安全志向になり、意味もなく飛ばす快感を必要としなくなった。今やわたしにとって車は、音楽も聴ける大八車にはかならない。

わたしは家でステレオをかけると「ご近所迷惑なんじゃないか」と気になってしかたがない小心者なので、車だと気がねなく好きな音楽をたんのうでできるのがいい。一人で運転しているとき、車はカラオケボックスと化す。ただし夫が同乗しているときはマイテープはかけない。音楽の趣味がだいぶ違うからだ。

現在、車が活躍する時といえば、  
1 毎週水曜に生活クラブの品物が大量に届くの、以前住んでいた、車で五分のところにある杜宅に取りに行く

とき。我が家は五人家族、息子が三人なので、毎週トランクがいっぱいになるくらい注文している。以前車が故障して、歩いて家まで運んだことが二回ほどあるが、重くて肩がはずれるかと思った。そう言う時に限って、米袋だのスイカだの醤油の一升瓶だのがあったりするのだ。

2 人を運ぶとき。わたしは生活クラブで消費委員というのをやっているのだが、援農のときなど、駅から離れたへんびなどところにある畑に何人か乗り合わせて行ったりするので、車は不可欠である。返りにはお土産の野菜がトランクに満載されるので嬉しい。

3 家族で外食するとき。土日はよく街道ぞいのラーメン屋に行くので、その時は必ず車を使う。

4 お互いの実家に帰省するとき。夫の実家が目黒区で、わたしの実家が同じ神奈川県内に二か所あり（両親が離婚している）、盆と正月にはかならず車で日帰り大移動する。

あとはほとんど車は使わない。道祖

神や古いお社の点在する、曲がりくねった道をわざと選んで歩くのが好きである。徒歩三十分圏内なら歩いていく。ポスティングの仕事をしているが、それもよっぽどのがない限り徒歩でやる。我が家のある地域は起伏が激しくて、自転車は役立たずで近所のどこの家でもほこりをかぶっている、という事情もある。

ボルボに乗るようになってから、シートベルト着用率は100%になった。この車、シートベルトをつけないと警告灯がチカチカ光るようになっていたのだ。こだわりボルボの友人との一件があつてから、ますます安全運転に力を注ぐようになった。はじめは意地になって「安全運転してやる」と力んでいたのが、そのうち身について、自然にできるようになったので、大変結構な話である。

そういう節操のないところが、「こだわりボルボ」の気に入らなかつたんだらうな。いやいや、もうそういうことは考えまい。君子こだわりに近寄らず。

# 私と車のつきあい

埼玉県大宮市 新井純子

大学生の私に、車の免許を取ること  
を勧めてくれたのは、働きながら教習  
場に通い大変な思いをして免許を取っ  
た姉だ。

当時、自分が車を持ち運転すること  
などあるのだろうか、と思っていたが、  
時代は庶民まで小金持ちにし、若い私  
にも車を買うことを可能にしていっ  
た。「免許証」は私にとって、その後  
の暮らしのフットワークを軽やかにす  
る道具のひとつになった。運転免許を  
とって、かれこれ二十年になる。

夫は車の買い換えが趣味のような人  
だ。今まで車検というものをしたこと  
がない。マニュアル車、オートマチッ  
ク車。ワゴン車、四輪駆動のRV車と、

次々に買い換えた。もちろん私もその  
車の運転をさせられた。特別、車が好  
きとか、運転が得意ということはなか  
ったが、生活に車は不可欠だった。

夫の職場は、緊急を要し、不規則で、  
そのために家は仕事場の近くにあっ  
た。反対に買い物、病院という暮らし  
に必要な場所は、車でなければ出かけ  
られないところにあった。誰も頼る者  
がなく、なんでもひとりです生活を整え  
なくてはならない私は、よく車を運転  
してあちこちにでかけた。また、これ  
といってやりたいことも、夢中になる  
ことも持っていなかったのが、車の運  
転をさせた理由だったかも知れない。  
そうやって時間をやり過ごしていた。

ようやくそこでの暮らしに慣れたと思  
うと、土地も車も変わった。それが私  
たちの暮らしだった。

結果として、私はどんな車でも、ど  
んな土地でも車の運転ができるようにな  
っていた。あの、パプアニューギニ  
ア、オーストラリアでさえがんと運  
転していた。夫、他の人たちの手を煩  
わせることもなく、限られた楽しみを  
大いに味わい尽くした。車がなければ  
家から一歩もでかけられなかったのだ  
から、車の運転をおっくうがらないこ  
とが、かの地での暮らしを天国と地獄  
に分けたといっても過言ではない。

## 東北自動車道六百キロを走る

大宮に暮らし、四年が過ぎようとし  
ている。幼かった子ども二人も、公共  
交通機関を利用するとなれば、大人料  
金が必要の年齢になった。私の実家は  
東北の最北青森県の八戸だ。新幹線  
を利用すれば三人で往復十万円は飛ぶ。  
車なら、高速道路料金往復二万五千円



とガソリン代一万円の計三万五千円で済む。また、都会と違って交通の便が良くないので、実家に帰ってからも車は役立つ。帰りのみやげも、あれこれ積んで帰れる。そんな理由から、この四年間は、もっぱら車で帰省している。夫が一緒であれば、六百キロの道のりなど楽勝なのだが、以前は何度かそういうこともあったけど、現在はほとんど私がひとりで運転をする。夫との休みが、私たちの帰りたい時と一致しないことが理由だ。

最初、六百キロをひとりで運転できるのか心配だった。でも、神奈川に住む友人の「私なんて、毎年秋田までひとりで車を運転して帰るよ」の言葉を聞いて、勇気がわいてきた。「首都高速を通るわけでもないし、子どもたちは赤ちゃんじゃない。話相手ぐらいにはなるだろう。なんとかかな」と思い実行に移した。

時速百十キロ、二時間走ったら一息つくことを守り、ラジオの音楽、高校野球の中継を楽しみながら、ひた走りました。七時間ほどで八戸に到着した。ハードなことではあったが、実際なん

### 車の運転が重荷になったら

大宮の暮らしは以前住んだことのあつた土地とも違っている。駅まで歩いていける。図書館、病院、アルバイト先、すべて半径一キロの範囲内で、車がなくても暮らしていける。環境のことを考えると車は利用しない方向で暮らしたい。しかし、荷物が多いとき、

雨が降っている時、年寄りと出かけるときは、とても役だつ。まだ車を完全に手放すことはできない。ただ今回、初めて車検に出した。以前に比べれば、小回りの利く小さい車だ。夫の趣味、こだわりの変わったようだ。

また、交通事情、交通マナーが悪いこの土地で、いつまで運転をしていられるのかと考えることもある。外見は「若い」と言われるが、肩は凝る、眼

はかすむ、判断力も鈍くなってきているのは自分では承知している。

日々車の運転には、気を使うし、ストレスだ。もうしばらくして、自分のことだけを気にかけて暮らせるようになったら、さっさと車の運転はやめようと思っている。そうやって考えてみると、免許証の書き換えも何度もしなくてもいいのだ、と思った。車には感謝している。

## 教習所通い

横浜市港北区

江戸千恵（30歳）

私が車の免許を取ったのは専門学校を卒業する少し前。そう、二十歳の時である。

会社勤めをするようになれば自動車学校など行く時間はなくなる。それに

学生のうちならば学割制度で安く免許を取る事ができるのだからと、親に強くすすめられてのことであった。周りの友達の中には同じような考えを持つ者が多く、就職が決まった者から自

動車学校に通うというのがブームになった。

そしてその年の十月から私も家の近所の学校に通い始めた。

自動車学校の授業は、学科とそして実際に教官と一緒に車に乗り込み、運転の手ほどきを受ける実技の二つに分かれている。学科は自分の空いている時間に好きに取ればよいのだが、実技講習は予約制となっており、当時は今より自動車学校に通う生徒の数が多く、その予約を取るのが困難だった。

私は休日になると朝八時頃に学校に行き、教習のキャンセル待ちの整理券をもらう。それから売店でパンとジュースを買い、自分の名前が呼ばれるまで雑誌を読んで時間をつぶした。実際教習を受けられるのは午後二時頃になつてしまうことなどざらであった。

十二月に入ると、卒業を目前に控えた近所の高校生がどっと自動車学校に押し寄せるようになり、教習の予約を取るのはますます困難になった。

でもその頃の私はあと一歩で路上教

習の試験が受けられるというところまでできており、なんとか年内にそこまでこぎつけようと必死だった。そして年もおしせまったころやっと仮免許を取得した。

しかし、それでなんとなく気がぬけてしまったのか、年が明けてからというものは自動車学校に全く行かなくなってしまった。もうすぐ本業の方の学生生活が終わりということもあって、友達と卒業旅行に行ったり、映画やカラオケに行ったりと遊びほうけていた。

そのうちあつという間に三月にな

り、私はふたたび自動車学校に通いはじめ、実際に免許を手にしたのは会社勤めが始まる二日前だった。

しかしその日から八年間、結婚して子供が産まれるまでほとんど車を運転することはなく、ペーパードライバーの道を歩んできた。そもそも車の運転はあまり好きではなかった。

運転免許を取得したのも履歴書に書く資格がひとつ増えるのと、身分証明書のひとつになるぐらいしか考えていなかった。

しかし、結婚して妊娠してからはその考えは変わった。私が現在住んでい

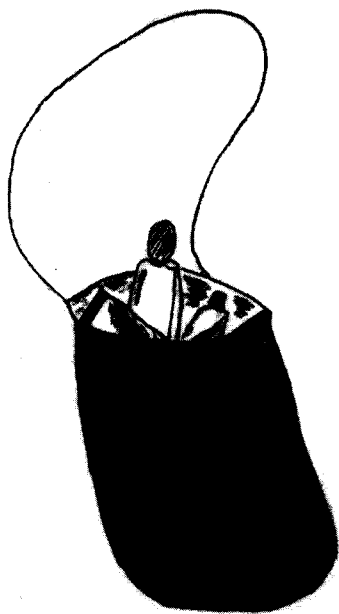
るところから歩いて行ける範囲に、食料品を買うことができるスーパーが一軒もないのだ。近所の薬局で日用雑貨や、味噌、のりなどの乾物はそろろが生鮮食品ともなると自転車、または車で買いに行かなければならない。

乳幼児をかかえて歩いて買い物に行くのは困難である。しかも近所に小児科もなかった。

妊娠八か月になったころ、私は主人に自動車を買う提案をした。主人は私が昔から運転をするのをかなり嫌がっていたことと、結婚当初経済的な理由から車を手放してしまったこともあり、この提案には大変驚いたようだった。

しかし車を買うことには賛成のようである。いろいろ資料を集めてきてくれた。久しぶりに運転する私のために、小回りの利く小さい車がいいだろうということまで話が進んだ。

ちょうど、その年の秋から軽自動車の規格が変わるということで、私たちは興味をひかれた。それまで軽自動車



はエンジンが小さく、車体も軽いというところで安全面に問題があるのでは、と私は考えていた。

しかし、今度はそれがずいぶん改善される。しかも軽自動車は普通自動車より税金やガソリン代などの維持費が安い。たまたま私の通っていた産院の隣にホンダブリモの店があり、話を聞きに何回か通ううちに興味を持ち、ライフという名前の軽自動車を購入することになった。

九月末に女の子を出産するとすぐに実家に戻り、日中一、二時間ほど子供を母に預け、再び自動車学校に通うことにした。

といっても今度の目的は自動車学校が主催しているペーパードライバー講習に通うことであつた。

久しぶりに戻った自動車学校は昔とは少し違っていた。ここ数年自動車の免許を取る者が減少する一方で、やむなく閉鎖する学校も少なくないという。その自動車学校でも生徒数が減少していることは同じであつた。

キャンセル待ちまでして授業を受ける必要も今はなく、教習の予約はコンピュータで自分のIDカードを入力して取る仕組みとなっており、教習時間も選びたい放題であつた。

授業の合間に生徒が集う休憩室も、以前は入りきれず廊下までごった返していたものだが、あの殺伐としていた雰囲気はなく、教台置かれたパソコンの前で筆記試験の問題を解く若い生徒の姿があつた。

それでも実際教習の授業が始まると久しぶりにハンドルを握るとあつて、かなり緊張した。私の担当になった若い男の先生は、簡単な質問をいくつかすると、一緒に車に乗り込みそのまま数周構内を回つた。

以前は運転中の注意が足りない、ブレーキが遅い、など教官にことごとく注意され、半べそをかきながらの講習であつたが、今回はもう免許は取得しているのでそれほど緊迫感もなく、なごやかな空気の中でその日は終了した。

その後五回ほどその講習に通つた。そしてもうこれ以上学校通いをするより、実際に一人で車を運転すること得上達していく方がよいと判断したうえで、今度こそ本当に自動車学校を卒業することにした。

あれから二年、娘のスイミングスクール通いや、買い物等で週に三、四回は車を運転する日々である。

一人で車に乗り始めたころ、駐停車を失敗し、何度か壁に車をぶつけたりもしたもののだが、幸い大きな事故もなく免許証もゴールドのままである。

しかし、どんなに気をつけていても事故は起こりうる。実際私も運転中に何度かヒヤツとしたり、もうすこしで危ないところだったと思うこともある。皆が皆自動車学校で習ったとおり運転をしているわけでもないが、私自身は人より長く学校に通つたのであるから、自ら過ちを犯してしまわないように気を引き締めていこうと思う。というの今は車の運転が楽しいと思う毎日だからである。

# 車よ、今日もありがとう

岡山県津山市

吉田淑子（67歳）

人生を七十年近く生きてきたが、可もなく不可もなかった。悪いことはもちろん、別段これといっていいこともしなかった。よかったと思うことでただ一つ上げれば「運転免許」を取っておいしたことだ。

自転車に乗ったのが女学校の一年生の時、友だちのを借りて、坂道突っ走ったら勢い余って田んぼに突っ込んだ。いつも脛の生傷が絶えなかった。終戦直後で、世の中は貧しく自転車といってもだれもは持てなかった。片道五キロの道を下駄や、ときには藁ぞうりで通学した。そのころを思うと、自動車運転する生活が訪れるなど夢のようだ。

社会人になって自転車を買ったが、宝物のように大事にしながら通勤に使った。数年後、世の中の発展とともに私の自転車は五十CCのモーターバイクにとつて変わられた。

乗用車を購入したのは三十歳の時で必要に迫られてのことだった。夫が仕事上、夜の会合が多くなり、酒を飲んだ時など迎えに行かなければならぬ。飲酒運転をして帰られては困るからだ。

運転免許は学校の夏休みの間に取ることにした。まだ当時は路上試験もなかったし、法規試験も比較的簡単で、なんとか最低点で合格した。

以来四十年近く、車のお世話になり

続けている。子どもを乗せると心が弾んで流行歌を口ずさんだりした。勤めに家事に、車があればどこへでも自由に動き回れた。性格がイラチタイプだから車の傷は絶えず、そのためぶつつけても気楽なように安価な中古車ばかり使った。新車にしたのは五十歳すぎからだ。スバル、アルト、キャロルと乗り換え、今はホンダのライフ。軽四輪ばかりにしたのは、大きな車だと私の手には負えないからだ。

車に乗りだした頃の思い出がある。勤めから帰る途中、ひとり暮らしの母が心配で、いつも実家へ寄り道していた。そんな私の車にバスで通勤していた校長が、「家の方向が同じだから」との理由で強引に便乗し始めた。しょっちゅうだと思が詰まる思いなのでバイクで行くと、校長は機嫌を損ねた。遠くへ転勤でもさせられては大変なので、校長を家まで送り届けておいて実家へ引き返すこともあった。そんな時でもその校長は、「私はいいいから、お母さんの所へ先によってあげなさい」

とは言わなかった。

我が家では幼い二人の子どもが、私の帰りを待ち侘びていた。つらかった。その母も今は亡い。

ともかく、車があったおかげで、何キロもある通勤がずっと楽になった。教員住宅に入って勤務しなければならぬ僻地でも、車なら楽に通うことができた。

さらに、車の真価を認めたのは、還暦で教職を退いてからだだった。自分の



やりたいことに専念しはじめると、これまで職場と自宅の往復だったのに較べて走行距離がぐんと長くなった。そうなるとうますます車の値うちを実感した。

都市と違って田舎には、電車も地下鉄もない。ローカル線の列車など乗客は二、三人ということもある。JRが便数を減らすのはもつともだ。バスだって過疎地を走るので乗客が少ない。運行回数が減っても増えることはな

い。朝夕各一本だけになった地域もある。

若い頃、なぜ苦勞して車の免許なんか取るの、と同僚に聞かれたことがある。年をとってからのため、と答えたら、「年とつたら、運転なんかできなくなるよ」と言われたが、今になると私の方が正解だった。車がなかったら、不便さから病氣になったと思う。

現在は夫との二人暮らしだが、夫の留守にちよいと温泉までドライブする。紅葉間近い山あいを四十分も走らせると、ヒノキの香り高い温泉に着く。露天風呂の透명한湯につかると、身も心も軽くなる。充分にリラックスして夫が帰宅するところを見計らってガレージへ滑り込む。

近ごろ町には、スーパーが増えた。開店セールやバーゲンのチラシ広告にさられて、ついつい車で出かけてしまう。

興味のおもむくまま、首をつっこんでみるカルチャースクールはもとより、人気作家の講演会、オーケストラ

の演奏会などへの足も、もちろん車だ。

最近夫は、町中を走るには私の軽自動車のほうがよいと言いつ出した。古い城下町だけに道が狭くて迷路のように入り組んでいるので、軽自動車の方が小回りがきくからだ。夫に私の愛車に乗って出られたことがある。しかたがなく夫の黒塗りの普通車で恐る恐るスパーへでかけたが、図体が大きすぎてハンドルさばきなどはスムーズでなかつた。

しかし、私の運転は普通車でも大丈夫夫だと知った夫は、岡山市へ出かけるときに私を誘うようになった。いままでだと、傷をつけられては大変と絶対さわらせなかった車なのに……そう思うと夫も年をとったものだと思つたり淋しくなつた。

山あいの国道を走る。長距離だとやはり排気量二千五百CCのエンジンは軽い響きだ。わが軽自動車は近回りに都合がいいが、遠出には向かない。



この馬力充分な車は、タイヤが路面に吸い着くような感じでひた走る。ハンドルを握っていると、ひよつとしてトラックでも運転できるのじゃないかと自信がわいた。

それ以後、夫の車で一緒に山陰地方の温泉や、四国の博覧会などにしばしば出掛ける。平坦な道は妻が受け持ち、ややこしくなると夫と交代する。私たち夫婦の生活パターンそのままだ。

遠出は不安だつたけれど、最近はずいぶんこんなですっかり慣れて、鼻歌まじりでドライブする。運転中、カーステレオをかけるのも好きだ。

健康でありさえすれば、何歳になろうとも車が運転できる。

今のところ、カラスの鳴かない日があつても、車に乗らない日は一日もない。

生活に、趣味に、交遊に私の手足となつて動いてくれる愛車よ、きょうもありがとうと、いつも車に語りかけている。

# 私らしさを取り戻すとき

横浜市都筑区 ゴル

独身時代は、メタリックグレーのダイハツミラ。新婚時代は、夫の乗っていたトヨタカリブ。子供が二歳の時購入し、今日まで乗っているのが、トヨタブサム。こいつのシートの高さとハンドルの傾斜具合は絶妙なバランスで、運転のしやすさは群を抜いている。

「マニュアル車でなくちゃ、車を運転しているとは言えない」というこだわりを、私にいと簡単にすてさせた、ＡＴ車。

軽自動車には自由をおう歌した独身時代の、ツーリングワゴンには夫と二人の、ファミリーカーには家族の生活があり思い出がある。

私はもともと、車に乗るとすぐに車

酔いする子供だった。車嫌いの自分がまさか免許を取るとは思わなかった。

「免許、取ったら？ 俺にも乗せて欲しいな」

夏休み直前に何気なく彼に言われ、二か月後の再会の時には、私はもう、免許証を手にしていた。

自分の運転だと、酔わなかった。

意外なことに、車の運転は性に合った。

ハンドルを握ったときの緊張感。アクセルを踏んだときの高揚感。窓をあけて風を感じるときにそう快感。それらが、たまらなく私の心を刺激した。車を走らせるのが楽しかった。

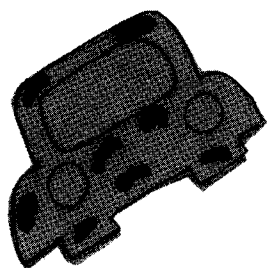
行きたいところへ行ける。バイクの

ように天候に左右されない。バスや電車の時間を気にしなくていい。働くようになって自分の車を持つてから、行動範囲が格段に広がった。林道のダートや、山道のカーブをただ攻めるのも好きだったが、長野はちよつと走れば、山あり、湖あり、温泉ありの所。特に目的地を決めなくても、車を走らせていればどこかにたどりつく。初めての所へ車で行くのは、気楽で、愉快で、自由だった。

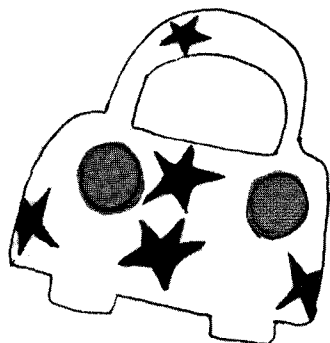
社会人になってマイカー通勤をするようになると「走る個室」は、自分が自分を取り戻す空間として、なくてはならないものになった。残業帰りに、駐車場にとめてあるミラを見つけるとほっとした。シートにおさまり、好きなハードロックをかけると、私だけの時間と空間が満ちてくる。黄色の信号が点滅する、深夜の道路をノンストップで飛ばしている、仕事のストレスも、プレッシャーも、みんな後ろへすっ飛んでいくような快感があった。バブリーな田舎のＯＬは、パラサイトシ

ンゲルしつつ、仕事に遊びに忙しかつた。

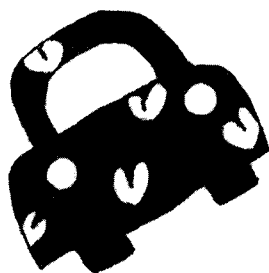
ミラは軽自動車のくせに馬力があり、ターボエンジンで、出足・加速も快調。パートタイムの四輪駆動で、山道・雪道にはボタン一つで四駆に切り替えられるところが、お買得感をくすぐった。燃費も良く、税金も安い。じっとしているのが嫌いなわたしの手となり、足となり、翼となった。



その頃の私は、慕う男を私の軽自動車の助手席に押し込んで、好きなどころへ車を走らせた。今思うと嫌みな、ほとんどストーリーカーまがいの女だった。でも、当時はそれが私らしい気がしていたのだ。短い付き合いだつたが惚れた男だったので、失恋の涙は半年続いた。運転中に涙がとまらなくなり、動転してワイパーでぬぐおうとしたことがあった。切ない思い出。



夫と二人の時は、ツーリングワゴンタイプのカリブに大荷物を積み込み、ドライブすなわちこれ、所帯の移動のようだった。スキーにゴルフにダイビングにと、二人のフットワークの軽さと車がマッチしていた。トランクにはいつもゴルフバッグが二つ入れっぱなしで、どこでも気が向くと、よくゴルフの打ちっ放しに行った。リッチなデインクスは遊びほうけていた。



子供が生まれてから、フットワークの軽かった私が、身動き取れなくなつた。

それからだ。ずっと、息苦しかった気がする。一人で運転する気軽さが、子連れのドライブにはない。遠出がおつくうになつた。出産と同時に横浜の新居に移つた私にとつて、見知らぬ土地を、赤ちゃんを乗せて運転するのは、かなりの準備と、覚悟と、勇気がいった。

子供が生まれて二年後に買った車は、あんなに抵抗のあつたファミリカータイプの、しかもオートマチック車だった。車は買い替えたものの、閉そく感のつきまとう生活にかりはなかつた。何か突破口が欲しい。やつと意を決して、山下公園まで子供と二人でドライブしたときは、たつたそれだけのことなのに、涙が出るほどうれしかった。

夫は、自分が乗るときは、自分が必ず運転する主義の人だ。特に長距離は、私が運転を代わると申し出ても、なかなかハンドルを手放そうとはしない。

帰省シーズンの渋滞にひっかかるものなら、私は狭い車内で八時間以上も、むずかる子供の相手をしなければならなくなる。運転に集中できる夫の方が楽なのではないかとさえ思つた。

夫がハンドルを握るのは、すべて彼の優しさで、責任感、忍耐強さからくるものだ。でも、私にとつては、幼児と二人で後部座席に座らされて、おとなしくしていることの方が、よっぽど忍耐のいることで、苦痛だった。思えば彼のこの優しさがくせものだつたのだ。

何事につけ労をいとわない優しい彼のおかげで、私は、ちよつと勇氣さえ出せばできそうなことにも、どんどん挑戦する意欲をなくして、なんとおとなしくなつたことか。気付かぬ内に、一人では何も出来ない女になりさがるのではないだろうか。

私は自分でできることまで、人にしてもらふような、男におんぶにだつこの女などでは断じてなかつたはずなのに。自分が自分でなくなっていくような

焦燥感。

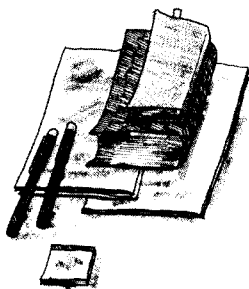
この夏、私は五歳の子供を乗せて、横浜から長野の実家まで、初めて一人で高速道路を運転して帰つた。正確に言うと、夫が御殿場まで運転して車を降りたので、そこから家までの約二百数十キロ余りを、途中何度か休憩をとりながら、四時間弱で私が運転したことになる。

そう快だった。解き放たれた気がした。出産して以来、自分一人では、何もできない、どこへも行けない、そう思い込んで、思いのままに行動することと自分をあきらめてきた。その呪縛が、今、解けた。

これでいつでも横浜を脱出できる。妙な自信だった。いざというとき、私はここまでできるのだという確信もあった。そんな確信を、たかが車の運転ごときで得るというのも単純な話ではあるのだけれど、車にはそうさせる何かがある。運転する人を心強くさせる何か、良くも悪くも。

(え・田沼千恵)

# 火花



大阪市城東区 布施幸子

六十五歳イコール高齢者となった時には正直いって嫌だった。私はまだ年寄りではない。夫が逝ってからいつそう煩わしいことが増え、一人息子は病気になる、隠居気分は毛頭なかった。なのに高齢者、否応なしのお婆さんか。今ではだいたい慣れたがまだ抵抗がある。

先日、お友だちから「火花」をプレゼントされた。北条民雄の生涯を書いたノンフィクションである。「いのちの初夜」を読んだ遠い日を思い

出した。あの頃は若かったな、と。

昭和九年に北条民雄はハンセン病のため、東京全生病院に入院した。十九歳だった。

「誰でもライ（昔はそう言った）になった刹那に人間としては死ぬのです。ただ生命だけが根強く残り、復活の歩みを始めるのです」北条民雄著「いのちの初夜」の小説の中で、登場人物が語る言葉に感動した。だが、思えば残酷な言葉である。重症病棟のすさまじい描写があこのころの私にどれだけ実感できたか、いわば安全地帯から眺める他人ごとではなかったか。

北条の入院期間は三年余り、昭和十二年末結核のため二十三歳で逝った。「いのちの初夜」はじめ、小説や随筆は川端康成を介して世に出た。

高山文彦著  
飛鳥新社 一九〇〇円十税  
一九九九・八・一五発行

川端康成は息子のように北条にかかわり、亡くなったときにも病院へ行った。「火花」には川端康成とのいきさつや他の関係者とのエピソード、当時の時代背景を織りこんで北条民雄の生涯が書かれ、年譜が添えられ、友人の筆による画像も載っている。

才能に恵まれながら、否応なしの隔離暮らし、ペンネーム以外は全て伏せた一生。作品の世界では同病者に同情しながら、実生活では同病者を憎悪した気持ち、否応なしの高齢者になった今、少しは実感できる気がする。

もちろん私の抵抗などとは較ぶべくもない悲惨な思いを、ほんの少年といえる年頃から味わい、さつとこの世を去った北条民雄であった。

(え・渡辺美帆)



# エッセイスト・クラブ

## 山の端に日が沈む

福島県安達郡 桜井淳子 (68歳)

西の空が茜色に染まっています。日は安達太良山の端に沈みかけています。黒いシルエットの山に徐々に沈んでいく日は、また明日の朝、東の阿武隈高地の真ん中から昇って来るでしょう。

西に安達太良山、東に阿武隈高地を望む福島県の中通り、阿武隈川の流れに沿った丘陵地帯に開発された、住宅地に越してきて十年目になります。周囲は見渡す限り大自然です。昔から、『風の本宮』『水の本宮』『花の本宮』といわれ、季節風は時には数日の間、吹き荒れます。水は阿武隈川に氾濫し、十年に一度の頻度で町は水に沈みます。春には、梅、桃、桜が次から次へと咲き誇ります。

静寂に包まれ、澄んだ空気、夜には星座もくつきりと見られます。

理想郷といえはその通りです。



東京から越してきた時は感無量でした。

そして今、悩んでいます。都会の雑踏と人が恋しいからです。「水清ければ魚住まず」といいますが、東京の浅草で生まれ、目黒で育ち、世田谷で結婚生活をし、老後をのんびりと田舎で暮らそうと計画した私なのに、都会が恋しくて、友人や所属している会の会合があると、待ってましたとばかり東京に出かけます。

友人たちにも、田舎に遊びに来ませんかと心で願うのですが、交通費がかかり、時間がかかるので容易にお願いできません。日帰りでは余りにも忙し過ぎます。観光地ですので、近くには磐梯山、猪苗代湖、温泉、スキー場、山岳ドライブウェイなどがあります。でも、お招きしても、半病人の夫がいるので遠慮をなさるのです。

十一月二十六日、東京へ日帰りで行きました。「わい

ふ」の田中編集長、和田副編集長の古稀の祝いと「わいふ」二十五周年記念の祝賀会でした。

「わいふ」の三羽鳥、原田さん、早川さん、鈴木さんが発起人で開催されました。まだ編集室が田中さんの家の敷地内にあった初期のころ、私が編集室に遊びに行くと、三人のうちのどなたかが、田中編集長と和田副編集長の手助けをしておられました。

編集室で事務を担当していた辻浦さん、エッセイ欄で活躍してられる高宮さん、貴重な体験を書かれた法村さん、興味ある記事を投稿されている和田美代子さん、その他にもなつかしい方々が大勢来席されまし

た。

八十歳になられた風間さんの若々しいお姿にも驚かされました。

現在誌上で活躍している若手の方々も、大勢来席され頼もしい限りでした。

二十余年前、私が「わいふ」の会員になった時、女性投稿誌が、このように長く続き、また若い人々に受けつがれて行くとは思いませんでした。人と人とのつながり、信頼、共感が田中さん、和田さんを中心に築き上げられたのでしょうか。

帰りの新幹線の中で、「わいふ」の会員である幸福を



あらためて認識しました。東京から離れるにしたがい、夜の闇は濃く、深くなつて行きますが、私の「わいふ」への想いは熱く燃えて行きました。

縁があり「わいふ」の会員となった私は、投稿することでも何度も人生の危機を救われました。ある意味では、書くとは心を字に置き換えて自分を見つめ直すことでしょうか。

今、山の端に沈みつつある日を眺めながらこれを書いております。

## 引き伸ばした写真

大阪市城東区 布施幸子（68歳）

「私のミスかと思いましたが、やが違いますね。怪我ですなあ」

縦十六センチ、横十二センチに引き伸ばした写真を示しながら写真屋さんが言った。中央の幼女の頬にべったりと絆創膏が貼つてある。

「いややわ、これ私ですもん」

「ほんまでつかいな、奥さん」

ほんまです。なにしろ六十四年前のだから。

福井県丹生郡白山村。亡母の実家は、氏神である白

山宮の傍にあつた。鳥居を背に祖父母をはじめ七人の全身が写っている。元の写真は四センチ角ほど。傷だらけで色は変わりゴマ粒ほどのわが顔は虫めがねを通して輪郭をつかむのがやつとであつた。

「お仏壇とるか、家とるか」と言われるほど越前地方の仏壇は立派だ。その仏壇の前で猫とふざけていて引つかれたのはこの時だったのか。泣きわめきながら村医の家まで、リヤカーで運ばれたのをうつすらと覚えていた。

古いアルバムの隅に放つてあつたその写真を見つけて「ほしい」と言つたのは志津子叔母だった。母の三番目の妹である。

「けど、志津さんは写ってへんえ」

「そう、着物が無いってごてて写さなんだの。写しときゃよかった、バカな私」

後悔六十四年前に立たず、か。優しい志津さんの昔のあだ名が「ゴテンボ」だったとは。

「でも両親の写真が一枚もないんよ。田舎で写真をとるなんてめつたに無い頃やったわ」

そこで私は近所の写真屋さんに、引き伸ばしを頼みに行つたのだ。ゴマ粒大の顔は金時豆大となり、表情がはつきりしてきた。と同時に、それまで気にも止めなかつた絆創膏の存在に気づく羽目にもなつた。

写真の祖父母はまだ五十前なのに、やたらと地味な



着物姿である。祖父は紋付きの夏羽織に威儀を正している。

べそをかいた私は四歳。麦わら帽に半袖のワンピースを着て、ひざ丈のゆかた姿の愛子叔母と手をつないでいる。叔母といったって当時七歳で母の末妹だ。

二十八の母、二十一の多賀叔母、ともに髪をひつめた素顔でいかにも若い。多賀叔母に抱かれた弟はまるきりの赤ん坊である。

「こうして見ると姉さんと愛子、よう似てるわ。私だけ不細工といわれて僻んだわ」

写真を見せると志津子叔母は言った。

「けど、愛子は十五で死んだ。私は七十五で元気。運が強かったと思うべきかしら」

そういえば、写真の中で現在生きているのは私と弟だけだ。それに、母の実家はこの写真をとって二年ほど後に人手に渡った。祖父母が相ついで急逝、早世した伯父の子は幼くて、跡つぎが絶えてしまったのだ。

愛子叔母は、東京の素封家の養女となった。間違えるように垢抜けた女学生姿の写真を、母宛てに送ってきたこともあったが、「白山村が恋しい。志伊姉ちゃんと暮らしたい」との手紙が添えられていた。そして、戦火に追われ、東京大空襲で短い一生を終えた。

志津子叔母も大変だったという。

「軍需工場に住み込んで働いていた方が私には良かった



たの。終戦になったら帰る家が無いんだから」

苦労がゴテンボさんを円満にした。結婚して姑さんと暮らせた日々は楽しかったと笑う。

「ところで志津さん、この写真は誰が撮ってくれたんやろか」

「健さん。母の弟よ。福井の軍隊にいてね。そのころ珍しかったカメラを持ってたの」

ゼロに近かった記憶が急にふくらんできた。遠い日の両親のひそひそ話である。

「健さんが軍刀無くしたって実家に泣きついてきたの。三十円で弁償せんと営倉入りやて」

昭和初期の三十円は大金だった。が祖父は無理して貸したらしい。

「それが嘘やったのえ。母は土下座して父に詫びてね。体を壊してしもうたんやわ」

「気の毒やったなあ、お義母さん」

願っていた父も早世した。

健さんは、借金に來たときに写真をとってくれたのだろうか。志津子叔母に聞くのがなぜかためらわれた。

長年、目にも止めなかった古い小さな写真が、大きくなったとたん様々語りかけてきた。志津子叔母と私は、しばらく黙ったまま、はるかに過ぎ去った一瞬を留めるその写真を眺め続けた。

## わがふるさと大開

おおひらき

千葉県松戸市

高橋安子（56歳）

大開は大阪市福島区にある。阪神電車「梅田」から二つ目の「野田阪神」駅前に広がる商店街に位置して、近くには区役所・保健所・警察署や大型スーパー・銀行が揃っている。賑やかで元気で、気さくな下町という感じの街だ。

私は、結婚して初めて住んだ杜宅が大開にあり、四年ほど名古屋に住んだが、子育てのほとんどをこの街で過ごした。

杜宅は駐車場を挟んで杜屋の向かい側にある。四階建ての一階部分は倉庫、二階から三DKの住宅が六世帯あって、私は三階に入居した。洗濯をしようとペラ

ンダを開けると、機械修理の作業場が見える。社員や夫の働く姿があった。通勤時間はゼロだが、自分の生活が丸見えのようで、なれるまでは落ち着かなかった。社宅での新生活は、独身寮生活の長かった夫の、大量の下着や靴下の洗濯から始まった。洗濯は休日にかできないと言う。しかも夫は横着だ。マメでない。着る物がなくなると「買っては使い」を繰り返していた。靴下の組合せがバズルのようだった。

「大阪はなんでも値切って買物をするそうだ」と聞かされていた。どう値切ればいいのだろう。東京生まれの私は、生活習慣や言葉に戸惑い、土地カンもないので、外出は近くのスーパーの買物に限られていた。

野菜や魚など生鮮品の買物は、公設市場がいいと、社宅の奥さんに教えられた。南北に細長く延びる商店街「新橋筋」の脇から奥に入る。小さなアメ横のように、小売店が軒を並べている。昼ときは大阪弁が飛び交い、たいへんな賑わいだ。大きな買物は別として、地元の人でも市場の買物では値切っていないかった。

お金を出して買う商品を見る目は厳しかった。たとえ大根一本でも、苦情はしっかり言う。ズバリ物を買ってもカドの立たない大阪弁の小気味良さが頼もしかった。生活者の目線を市場で習ったように思う。

結婚した翌年に当たる昭和四十五年三月に、大阪万国博覧会が開催された。大阪に日本中から、外国から

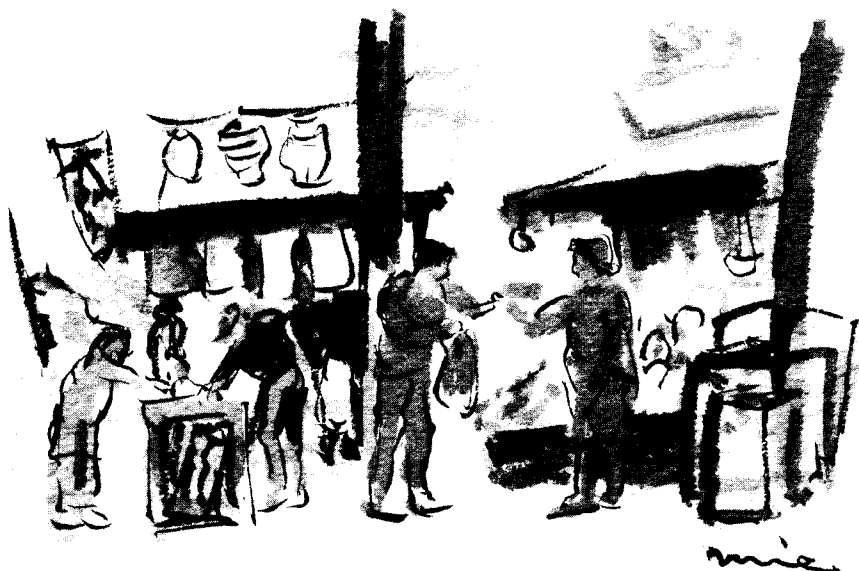
大ぜいの人々がやってきた。私の家も何組かの親戚が宿にした。

春休みや夏休みに、二日三日と会場へ通い、パビリオンを巡り、いくつ入場して何が面白かったか、大人も子どもも熱っぽく語った。万博会場には「月の石」や「タイムカプセル」などロマンを感じさせる展示物があり、誰もが夢みた「豊かな世界」が具現されていた。

高度経済成長のおこぼれで小金がたまり、レジャー時代を反映して万博見物となった。毎日のニュースで万博入場者が三十万・五十万人と更新され、最高は八十三万五千人。パビリオン入場に一時間待ち、二時間待ちと報じられた。お揃いのチューリップハットで長蛇の列をなす農協さんの団体が話題になったこともなつかしい。豊かさに憧れ、すぐ手に入りそうな予感が膨らんだ時代だった。お祭騒ぎのような万博に、私も三度足を運んだ。

会期中、生鮮品の値段が上がった。玉ねぎ一個百円に、家計のやりくりは大変だった。当時の方が、今より高いカレーライスだったことになる。

万博はいろいろな記録や思い出を遺して、九月に閉幕した。わが家では十一月に長女が生まれた。子育てという、少しも油断のできない緊張した日々突入した。新米の親は、泣かれてはオッパイをふくませ、寝



ている間にオムツを洗う……あの頃紙オムツがあったらどんなにラクだったろう……と思う。

十一月末に新生児とともに退院した時、社宅の六畳の部屋の襦を閉め、ストーブを点け、姑から贈られた綿入れの着物を着せて寝かせた。

「暑すぎる」「着せすぎよ」と言われるまで、どうすればいいのか、加減が分からない。赤ん坊を手渡されて、ウロウロしている私が出た。

退院した翌日、東京から何人かの親戚が長女の顔を見にきてくれた。姑は十日ほど滞在して、赤ん坊の扱いを教えてくれた。

東京の親元で過ごした二十数年間は、会社勤めもして、自立したつもりでいたが、家族の庇護の下で暮らしていたことを痛感した。大阪で、私は初めて性根を据えて生きようと覚悟を決めた。無事に赤ん坊を育てたいと思った。

子どもの頃「母と千駄木町でズーと暮らすんだ……」と言っていた。母と千駄木町が大好きだった。それが大阪で暮らし、名古屋、東京足立区、千葉県松戸市と住まいを変えた。それぞれの土地の、それぞれの習慣が、その地方の良さであることに気付く。

今では十六年間住んだ大開を、ふるさとと呼んでいる。子育てを通してたくさんの人に出会い、いろいろな事を教えられた。私の大切な財産になっている。

# 闇夜の栗拾い

千葉県船橋市

榎 雅子（38歳）

近くの公園に、大きな栗の木がある。

小さい実しかつけないが、子供にとっては憧れの存在だ。秋に『いが』からつやつやした実をのぞかせると、私も気になってつい上を見上げてしまう。大人がジャンプしても届かないし、娘達にせがまれてお相撲さんの『突き』を太い幹に試すがびくもしない。落ちてはいないかと一緒になって地面を探すが、運良く草の中に隠れているのを一、二個見つけるだけだ。

その公園では、年輩の方々が毎朝六時前から体操とウォーキングをしている。昼間はベビーカーの一大団にぎわう。午後は帰りの早い幼稚園児が集まる。学校から帰って行ったのでは、拾われた後でなかなか見付からない。

それでも、小学生と年長の娘達は栗が気になって二人で公園に行く。

買物ついでに私も一緒に公園に行った。五十歳代のおじさんが栗の木に登り、長い竿で実をたたいて落としている。優しいおじさんが子供達に取ってくれて

いるのだ、と疑いもなく思った。

「わあ、すごい」と娘達は駆け寄って、足元に転がってきた実を拾った。

すると信じられないことに「俺の栗、とるな」と木の上からどなるではないか。

「ここは公園、あなたの栗ではないでしょ」

と言いたかったが、おじさんの風貌が怖いのでやめた。しゅんとしてしまった娘達と「大人げない」「変なやつ」「欲張り」とぶつぶつ言いながら帰った。

それから数日がすぎた。その日はせっかくの日曜日なのに、台風が接近していて朝から空が不穏な色だった。昼過ぎには雨風とも強くなり、テレビの天気図が示した通り、我が家の上を台風が通過している様だ。

雨戸を閉めた部屋の中で大騒ぎする娘達にもあまりし気味で夕食を済ませたころ、台風は過ぎてあたりが静かになった。

ニュースによると、大きな被害はないらしいが、外に出てみると強風に引きちぎられた枝や葉があたりにたくさん散らばっている。

「栗もいっぱい落ちているかもね」となにげなく私が言う。

「行こう、行こう」娘達は目を輝かせた。

夜の八時近く、もう外は暗いし、道にいろいろ落ちていて危ない。娘達が行きたいのはよく分かる、それ

に私も行きたい。

「よし。行こう」スーバーの袋と懐中電灯を持って娘達と出かけた。

あの怖いおじさんが来ているかもしれないとちらっと思ったが、公園には誰もいなかった。飛ばされた枝や葉を踏みつけながら、栗の木に近づく。

落ちている。栗がごろごろ落ちている。暗くて見づらいが、懐中電灯のスポットの中で濡れて光る実をいくつも確認した。

「あった。ここにもあった」と娘達は歓声をあげる。私は付き添いのつもりが本気になって、顔がほころびながらも無言で拾っていた。そして何度も、誰か来な



いかとあたりに目をやる。

時折風が吹き抜けると、木の葉に溜まった雨水がぼたぼたと音をたてて落ち、私はびくっとした。別に悪い事をしていとも思わないが、暗闇でこっそり栗を独り占めするのはすこし後ろめたかった。でも、秘密めいた行いはドキドキして、なんとも言えない興奮がある。

家に帰って小さいざるに移すといっぱいになった。明るい部屋でよく見ると、栗の中にくぬぎのどんぐりや、丸い小石も混じっていた。人目を気にしてかなり焦っていたので、犯人は私である可能性が高い。さっそく茹でて、皆で食べた。

「今までで一番おいしい栗」と娘達は喜んだ。

「そうね。おいしいね」と私は言ったが、実は小さいし味もよくない。でも娘達がいたから栗の木の存在を知ったし、スリルある暗闇の栗拾いはとても楽しかった。

「台風が来たらみた行こうね」と約束してから三年経つが、ちようどよいタイミングで台風は来ない。

## 蜂の話

京都府宇治市 匿名 (39歳)

十一月の初めのよく晴れた日だった。

「ああ、洗濯日和だなあ」

と思いながら二階のベランダで洗濯物を干しているといきなり、

「ブーーン」という嫌な羽音が耳のすぐそばでしただ。思わず

「ギャー」

と叫んで家の中に飛び込んだ。休んで寝ていた旦那が「どうしたんやー!」

とびつくりして飛び起きた。

おそるおそるベランダを見ると一匹のミツバチが飛

んでいる。たかがミツバチでも耳許で飛ばれるとすごい羽音がして、スズメバチかクマバチかと思ってしまった。大騒ぎした自分が恥ずかしかった。旦那も

「相変わらずおおげさな人やなあ」と笑っていた。

とはいえ、ミツバチでも刺されたら痛いし怖い。中から様子をうかがっているとしばらくベランダにいたが、やがてどこかに飛んでいってしまった。もう一度干しに出た。

それが、そのミツバチが、私が洗濯物を干そうとすると飛んでくる。怖がって家に入ると飛んでいく。出るとよってくるを何度も繰り返す。

今干すのは無理だ。少し時間をおいてから干そうと諦めた。

「ひょっとしたらこの蜂は誰かの魂かも知れない。私に会いに飛んできてるんちゃうか」

旦那に言うと、

「あんたは本当にめでたい人ですなあ」

と呆れていた。

普段はゴキブリは叩き殺すし、蜂だって蟻だって何匹何十匹も殺してきた。

夏に子供とビニールプールをしていると水を求めてアシナガバチが飛んでくる。子供が怖がるので、水を飲んでいるアシナガバチを形もなくなるまで踏み殺したものだ。何を私らしくない事を考えるのだろうかと思



ったが、晩秋の朝、珍しく感傷的になっていたのだろうか。おとし亡くなったお爺ちゃんかなあ、昔分かれた恋人が死んだのかなあとか想像して楽しんでた。三十分以上経ってから干しに出た。旦那はもう起き出して布団も畳み掃除機をかけていた。何ということだろう。どこかに飛んでいったあのミツバチがまた飛んできた。こわい反面、嬉しいよ

うな懐かしいような気持ちだった。するとハチはまるで私を追いかけるように、逃げ込んだ家の中について飛んできたではないか！

「大変！ 蜂が入ってきた」

という私の声で、旦那がひょいと突き出した掃除機の吸い口にあつと言う間もなく蜂は吸い込まれた。

「なんとまあ、どんくさい蜂や。でもこれで安心やろ」と旦那は大笑いしていたが、

「なんて事をしてくれたんや。私の大事な人の魂かも知れないのに……」

まさか掃除機で吸うとは思ひもしなかった。せっかく会いに来てくれたのに……。

「ごめん。私今日変やねん。掃除中悪いけど蜂を助けたしてもええか」

蜂を退治して誉められると思っていた旦那は、いつも残酷な私が高んでハチ一匹助けるのだろうと不思議に思っただろうが、

「あんたはいつでも変や。気の済むまで助けてやり」と言った。

蜂は掃除機の紙パックの中で弱り切っていた。元々弱って動きが鈍かったから掃除機に吸われたのだし、死ぬ前に暖かい所に行きたいと思って家の中に入ってきた昆虫の本能だろう。それでも、苦しい中あれだけ私を追いつけてくれたのだ。安らかに天国にいった欲

しいと思い、ティッシュでくるんで助けだして、外の日溜まりの中の鉢植えの花の上にそっと置いてやった。もうほとんど動かなかった。

掃除機から救い出してやったことで私はすごく満足だった。

本格的な冬がくる前の、穏やかな日に起こった不思議な出来事だった。

## 思いがけないご褒美

東京都青梅市

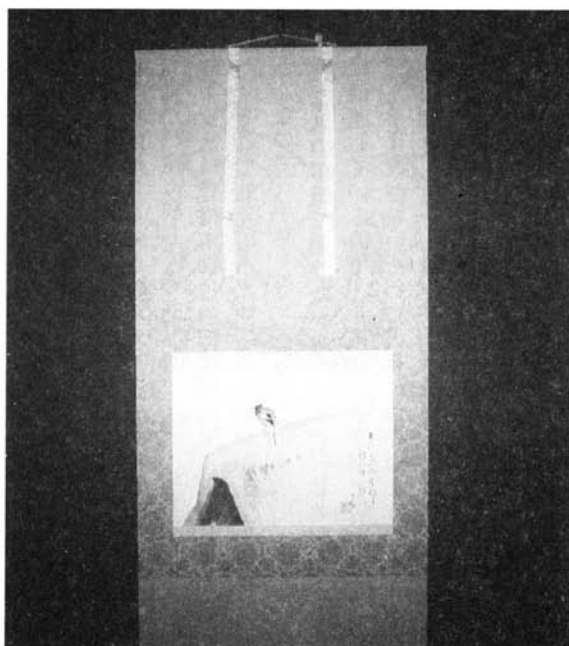
福島みさを

昨年十月末、夫は都立の神経内科へ検査入院し「脊髄小脳変性症による体幹機能傷害二級、他」と認定された。退院する時「転倒に気をつけるよう」と注意があった。

ところが明けて一月の二十日、家の中、それも私の目の前で転倒した。大腿骨骨折で緊急入院、二か月も療養しようやく退院した。退院に先立ち住宅改造、生活介護用品万端整え、在宅サービスのヘルパーさんに週二回入浴介助をして貰い、主治医は週一回往診、後は家族皆が手助けをし、夫は好きな書き物をして暮らしている。

私自身高齢でいづどのようなか分からないから、身辺整理をしておかなくてはと、家中整頓し、最後に仏壇の下戸棚を片づけ始めた。八十年も毎朝線香を上げ続けた仏壇の下は、むせかえるような異様な匂いがした。奥の方にかびの生えた革の鞆が三つあった。

その一つに昭和二十二年財産税の控えとか、「老式参」と縦書きの銀行通帳、戦後の経済変動のため、価値の無くなった保険証書等入っていた。それらの間にボール紙を芯にした紙に包んだ物があつた。縦三十三センチ



チ、横四十七センチの和紙に何か画かれている。縦横共に二カ所、四本も二センチ位破けている。

絵はすうつと引かれた薄い墨の跡、柔らかい線、田舎家の茅葺き屋根に雪が積もっている。その上に一羽の鳥が止まっている。この鳥は一般にはじょうびたきと言われる小鳥で、頭は灰色顔が黒、腹が赤かつ色、平地の雑木林に生息し秋には日本全土に渡来、越冬する。

あけぼのや屋根にひたきの四方拝 偶庵



この画讀は紙画右や下の方に書かれていて玉堂の印がある。偶庵は住まいにちなんだ雅号である。

玉堂が何でこんな所にあるのかしら、破けているのはなぜ？私は信じられなかった。玉堂の複製の色紙と比べて見た。全く同じである。

戦時中玉堂は青梅市御岳の旧家福田家に疎開しておられた。そこで地元の小澤酒造の大奥様が玉堂先生のお孫さんなので、手紙を書くことにした。

「これこれの事情で見つかったのですが、私共昭和三十年に倒産しているので、その折に知恵者と言われた舅が、人手に渡さないために人目につかぬようにわざと破いたのかもしれない云々」と鑑定をお願いした。

間もなく玉堂美術館館長川合三男様から、

「絵は全くの真筆に間違いありません。昭和二十三年の作です。現状の形で保存して行くのは良いことではありません。掛け軸または額装にして頂ければと思います」と表具屋さんまで紹介して下さいました。

掛け軸は地味な金欄を使って玉堂にあさわしく仕上げ、加瀬表具店が届けてくれた。

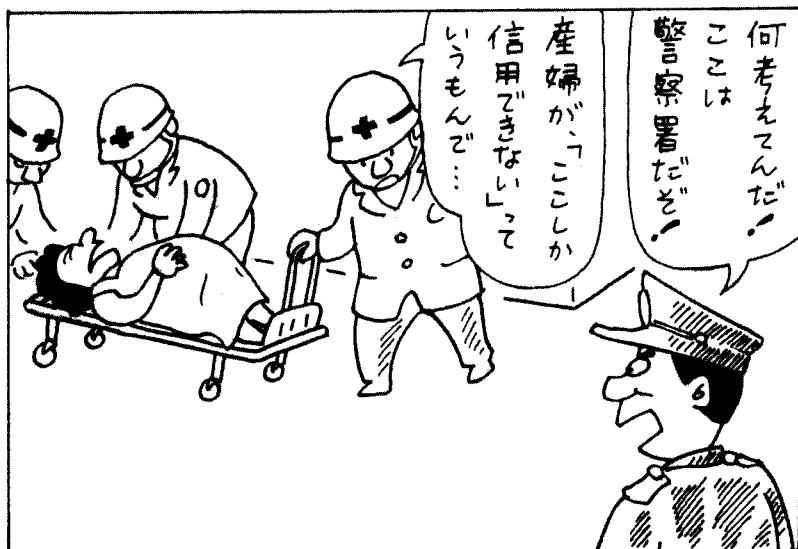
登録、箱書きまでして頂き、ただ今わが家の家宝として床の間にかけてある。今年はいろいろあったけれど、家族皆で助け合って来たご褒美と思ひ感謝している。

(写真提供・著者)

(え・佐藤瑞江子)

どうにかならないか  
相づく医療ミス (20)

一筆  
西断



西断

# 家族の スケッチ

## 母に負けた

山形県山形市 加藤智恵子（70歳）

私の母は九十二歳、十数年前に父（夫）を亡くし私の姉の敷地内に十坪程の小さな家を建て、人の誘いを蹴って気ままな一人暮らしをしている。明治の終わり、田舎に生まれ育ったから、特別な教育は受けていないし、優れた才能や夢中になっている趣味も思い当たらない。日がな一日、一体何を思い過ごしているのだろうと時々気にかけている。

七、八年程前、私もとうに職を退き、暇も出来て、時々母の家を訪れていた。ある日箱に仕舞い込まれていたっぱいの習字を見つけた。聞けばほとんど毎日、本や新聞から良い言葉を抜き書きしているのだと言う。大体筆を持つ姿を見たこともないし、決して上手とは言えないが、結構まともな良い言葉を書き写している。八十の中年を過ぎた普通の老人が、毎日のように書き続け

る根性を想像だにできなかった。そして更に「書いていれば少しは巧くなるだろう」と老いてなお向上心の旺盛さに内心たじろいしまった。

実は私は若い頃から、書を友とするあこがれをひそかに抱いていたので、心の奥に仕舞い込んでいた大切なものを先取りされたようで、ショックは大きかった。「ガーン」と頭を殴られるとはこんな思いかも知れないと、とっさに「負けた！」と叫んでしまった。そして母のどこにそんな発想や持続性や向上心を持ち合わせていたのか不思議だった。

少しして考えてみると思い当たる事もなくはなかった。その一つは、母は若い頃から読書好きだったということである。だから多くの作家の洗練された言葉を読む毎に学習していたのだから。たとえ自分で表現はできなくても、言葉を選ぶ力は残っていたのかも知れない。

もう一つは、父は書道の趣味を持ち常に書いていた。作品を仕上げる時は

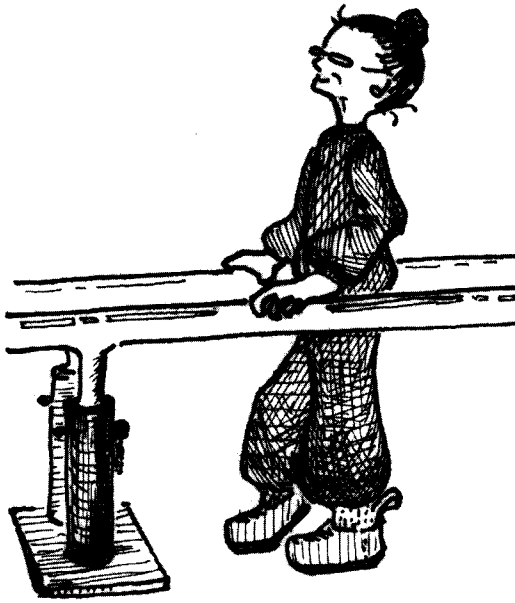
母に色々手伝わせ、その前で静かに見ている事を強いられていたから、自然に読む、鑑賞する習慣等身についてしまったのかも知れない。

その日折良く書道塾を開いている叔父が来訪、早速「負けた」一件を話し、自分にも出来ないはずはないと、毎月の競書の手本の送付をお願いしてしまつた。こういうとき私は熟慮すること乏しく、すぐ飛びついてしまふが、力

の無さを自覚するとすぐ諦めてしまふ。しかし後々「続けていればこんな風になつていたかも……」などと想像し悔しがつてしまふ。

案の定、毎日どころか毎月のメ切り前日に重い心で提出枚数三枚だけ書いて送るから、よい成績など望めない。ふしだらな書道はそれでも師匠の病氣まで四年程続いた。

さて時が過ぎ今年二月母は入院し、



家族のスケッチ

続いて要介護施設に入所して約七か月後自分の家に帰つた。足で立つ事すら出来なくて施設に入つたのであつたが、自立の訓練の末、家の中での移動も、入浴なども自分でできるようになつたのである。こうして約三か月が経つた。

先日ふと以前に習字の出してきた引き出しを開けると、そこに入院直前に書いたものと、夫や子に先立たれた心情を書いた短歌らしきものがあつたのである。この事実は習字の発見より大きなショックであつた。字余り、字足らずではあるが心情が伝わる。昔こんな勉強やつたんだらうか、その原点不明の不思議な力にうなづいてしまつた。

老いは間違ひなく誰にもくる。だが鍛えていれば少しはゆつくりときてくれるし、別の味のある力も与えてくれるようである。そして老人特有の「強情」は悪くいえばわがままだが、良くいえば信念を貫き、他を受け入れない孤独を楽しむたかさとなる。その成せる業と感じ入つた次第である。

## 呼び名のこだわり

東京都八王子市 浅川涼子

結婚式の数日前になって、二女は照れくさそうな顔をして言った。

「ねえ、お母さんって、呼んでやってもいいよ」

「あら、まあ、それはそれは」

「簡単よ。お・か・あ・さ・ん」

二女は棒読みでもするように、小さく言った。私は思わず笑いだしてしまった。笑ったのがまずかったのか、それつきり、お母さんという呼び名は、二女の口から再び出なくなってしまうた。

こう書くと、何という仲の悪い母と娘と思われそうだが、違うのだ。ただ単に二女が呼び名にこだわっているだけだ。

二女は小学六年生ころまでは、帰宅すると「ただいま」の代わりに「お母さんは」と、まず私をさがす子だった。お母さん、お母さんを連発してばかり

いる子だった。

それが変わったのは、長女が学校にいかなくなってからだ。二女の中学生時代は、家の中がまるで風雨が荒れ狂っているような状態だった。私がやつ



きになって長女を学校にいかせようとしているのを見たり、父親の身勝手さを見たりしているうちに、両親に失望してしまったのだろう。

「お父さん」「お母さん」と呼ぶのもいやだ、許せない、そんな気持ちからいうと、二女は安らぎを家に求めないで、友人たちとの交流を深めていった。幸いなことに心のやさしい友だちばかりで、どんなにか癒されたことだろう。子どもはいずれは親を捨てなければ、一個の独立した人間として生きていけないのだから、成長のプロセスとしてはよかったのかもしれない。少々荒療治だったようだが、しっかりと自分の足で歩きはじめた。

高校、短大と一日も学校を休まなかったし、アルバイトも就職も自分でさつさと決めて、親の手を煩わせなかった。だからといって、親に反発してきつい目をしているのとも違った。二女はときおり言っていた。

「私は自分勝手かもしれないけれど、家族に迷惑をかけていない」

その通りで、長女で苦勞した分、さっぱりと我が道をいく二女にどんなに助けられたか、言いつくせない。

結婚相手も自分で連れてきた。二人で一緒に買い物に出掛けても、私を呼ぶときは、ねえ、で済んで、特に不便なこともなかった。

結婚式の当日、ウエディングドレスに包まれた娘は、見とれるほど美しかった。眩しいほど輝いていた。

新しい生活に入ってから半年、生活のこまごまとしたことで分らないと、私に電話してくる。私が直接出るときはいいが、三女が出たりすると、困るようだ。

「ねえ、いる？」

「だれが？」

わざと三女とはほける。「お母さん」と言うように仕向けてにやにやしている。二女は言うわけにはいかない。言ったら最後、ワイー、とはやしたてられるにきまつている。

私と二女はとってもいい関係なのに、呼び名のこだわりだけは当分抜け

そうにない。何事においても、こだわりを溶かすのはたいへんなのだな、とつくづく思う。

## うちの嫁さん

横浜市緑区 三田サキ

うちの嫁さんは元国鉄駅の駅長さんの娘として生まれ、大事に育てられた。幸せな家庭のお嬢さんである。

彼女は高校生の時、うちの息子が勤めていた横浜線の小さなK駅を利用して学校に通っていた。その駅の助役さんの官舎が彼女の家と隣同士で、ごく親しい間柄であったという。そんな関係で、彼女は学校の帰りにK駅に立ち寄り、助役さんや駅員さん達ともお喋りをして楽しく過ごしたという。その時窓口でキップを売っていた、ピカピカの社会人一年生のうちの息子も、その仲間に入り楽しく語り合う事が多かった。

息子と彼女はいつの間にかお互いに好意以上の感情が芽生え、二人だけで

仕事場以外の場所で付き合うようになった。そして彼女も高校を卒業してある会社の事務員として働き始めた。

一方息子の方も、兼ねてからの念願がかなって駅の出札は卒業し、車掌の仕事につくことが出来た。やがてその仕事にも慣れてきて、時間的余裕が出来た。そのあたりから息子は、自分の勤務にさしつかえない程度（夜勤明け等）に彼女とデートをするようになった。

少なくとも週三〜四回は、夕方彼女の会社まで迎えに行き、遊んだあと彼女の家まで送り届けて、夜十時頃帰宅するのが日常となった。そんな生活が五〜六年続いた頃から、二人は結婚を望むようになっていたが、彼女のお母さんが大事に育てた娘を手放すことをいやがり、結婚にまっこうから反対して許してくれない。でも二人は決してあきらめないで、お母さんに必死で同意を求めた。

付き合い始めて八年経ってから、ようやく許しが出た。そして二年後に、

二人は大勢の人達の祝福を受けながら  
目出度く結婚式をあげることが出来  
た。

新婚旅行も終わりのよい新しい生  
活が始まる日がきた。だがそれと同時  
に息子は今度は運転士の試験にパス  
し、半年間住み込みの学園生活をしな  
ければならなくなった。

新婚の二人が週末以外は離ればなれ  
の生活である。嫁は新居で一人で暮ら  
すのが心細いので、息子が学園を卒業  
するまでの間、週末を除くほとんどの



毎日を実家で過ごすことになった。

息子は間もなく運転士の資格をと  
り、念願の運転士としての実務につい  
た。ようやくおちついた楽しい新婚生  
活が始まった。

交際期間が十年も続き、結婚生活を  
八年も続けた今でも、一度も喧嘩をし  
た様子がない。それどころか息子は私  
達に、何かの会話中にも「うちの嫁さ  
んも褒めてよ。素直でいい子だよ」と  
さらりと言うのである。息子にこの言  
葉を言わせるのは嫁の人柄そのもので

あると思う。たしかに素直で大らかな  
性格である。

嫁の誕生祝いの宴席で、一番の好物  
というサバの味噌煮をメニューの一品  
として添えて出した。するとサバを一  
口ほうばり、「おいしい」と一人ごと  
の様にぼつんと言って一気に食べてし  
まった。普段お世辞を言わない彼女だ  
けに、この「おいしい」の一言が真実  
味があつて私の心に響き、とても嬉し  
かった。飾り気のない素朴な人柄に、  
私や主人をひきつける力があるのだと  
思う。

彼女はとても優しい心の持ち主であ  
る。ある日家族揃つて車で墓参りに行  
った時のこと。お墓に着いて下車しよ  
うとしたが、なかなかうまく下りられ  
ずあせっていると、嫁がさつと側に來  
て私の手を取つて手助けをしてくれた  
のである。

何気ないこのしぐさは私をほのほの  
とした気持ちにしてくれた。息子よこ  
の可愛い嫁さんと共に、いつまでも  
熱々の結婚生活をしてほしい。

## 犬の危篤

森 恵子

暮れになると、私にもほんの少し、里心がつくのかもしれない。

何か月ぶりになるだろうか。実家の弟に電話をした。

ひとしきり、話し込んだあと、弟が言った。

「ロブが危ないねん。そろそろ薬の間やから、あっちの家に帰るわ」と。

ロブは十五年以上、実家の番犬？をしている。私が結婚してから実家で飼った犬だが、ロブには大変お世話になった。幼い息子を連れて実家に遊びに帰ると、ロブは息子の一歩の遊び相手だった。

二つ、三つの子どもは、興味のあるものに対して何をするかわからない。

「ロブちゃんのおメメ」

息子はそういつて、ロブの丸い瞳を触ろうとする。

あるときは、「ロブちゃんのシッポ」

もやっていた。

普通なら、自分のシッポをもってひっぱる奴をガブツと噛んでおしまい。

気がついた母が

「ヒロくん、そんなことしたら、ロブちゃん、痛いかな」

と、息子をたしなめ、

「そんなことしちゃ、ダメ！」

と、私たちがそれをやめさせるまで、ロブは息子のあどけない狼藉に耐えてくれていた。

実家の母が息子がいなくなったと驚いて探しまわったら、息子はロブの犬小屋の中に入り、ロブは自分の小屋の外で、おとなしくおすわりをして番をしていた、ということがあったとも聞いた。

そのとき、私は実家へ帰ってハネを伸ばして友達と会っていたのか、それとも娘の出産で入院中だったのか。

「ロブがあぶないねん」と、弟に聞いたとき、私が最初に思ったのは、「あの子には世話になった」という感情だった。幼い息子が私の実家に行くこと

を喜んだ、大きな理由は「ロブと遊べる」だったから。幼い息子をロブは本当に大切にしてくれた。

翌日、仕事に行く途中、私は息子の携帯に電話をかけた。

「ロブがあぶないって」と。

「トヨカツのお兄ちゃんに、電話かけとく？」

図書館にいた息子は、小さな声で叔父の携帯番号を聞き取り、メモした。

その夜、息子から電話がかかってきた。

「まだ、電話かけてない。今、大変だろうから、携帯に電話したら、お兄ちゃんは迷惑するんじゃないかと思って」

私はまだ息子の逡巡に気がつかなかった。

「ちょっとくらいだったら、いいと思うよ」

「なんだか電話、かけにくい」

「どうして？ 夏休みに行くと言って



「そんなことして、のたれ死んでも知らんから」

もとよりその覚悟だと、私は答えた。

「ヒロ君やヨーコちゃんのこと、どないするのっ！ あんたはそれでも母親か」

「あの人（夫）のどこが不満なの！ 言うてみなさい！」

親子の縁を切る、と向こうは言い、私は、どうぞ、と言った。

しかし、両親は結局、私を切れなかった。

行かなかったから？」

「そういうことじゃなくて」

「どちらでも、あなたのいいようにいいよ。かけにくかったら、やめればいいし」

「うん……。ヨーコが電話をかけてもいいよって言ってたから、かけようか」

遠くから、娘のなにやら言う声。

「あいつ、やっぱりかけないって言っ

てる」

「どっちでもいいよって言うのと、よけい迷う？ おかあさん、よけいなこと、言ったね。電話かけても、ロブには聞こえないもんね」

四年前、私は夫と二人の子どもを置いて家を出た。実家の母は半狂乱で私に迫った。

息子を大事にしてくれた実家の飼いだ犬が死んでしまいうだと聞いたとき、私はいずれやってくる実家の父や母の死を思ったのかもしれない。そのとき、きっと私は取り乱すのだろうと。

あるいは、息子に勧めた電話は社交辞令につながるような意味をもっていて、その社交辞令は私が息子を使って、師走の実家にしたいと思ったことなの

かもしれない。

それに対して、息子には息子の逡巡がある。

「なんとなく、かけにくい……」

息子が電話をかけにくいと思える現実を作り出したのは、とりもなおさず私自身なのだが、息子の叔父はそのあたりをよくわかっていて、息子を当惑させるような大仰な情感ではなく、さりげなく息子の電話を受けてくれると私は思ったのだけれど。

私は、ロブの危篤を間接的に悼み、間接的に無意識に利用しようとしたのかもしれない。

「ロブちゃんのオメメ」と、今は危篤のロブの目を触った息子の人差し指、犬小屋でロブになった息子の体は、今もロブとつながっていて、電話などしなくても息子は直接、死を間近に控えたロブちゃんを感じているのかもしれない。

あるいは、息子はまだ、危篤の報に對して言うべき社交の言葉をもたない青年であるのかもしれない。多くの大

人がかつてそうであつたように。

あるいは、その日の午後、頭がいつぱいになる実験で忙しく、また青年にとつて死は遠くばやけて掴まえきれないものであるかもしれない。

どれも少しずつそうであり、どれも少しずつ違うのだろうか。

それは、私にはわからない。

わからないと思える関係がよい。自分以外の人の気持ちなどわかるわけではない。

親子関係においても適当な距離を持ちたいと願った私の、願ったとおりの関係が続いているように思えることに、おいて、私は私の物語を綴ればよいと思ったのだ。

翌日、私はこんな追記を書こうと思った。

息子の幼児期に、ことに息子を愛してくれたものの危篤に對して、あの時代の終焉を今更ながらに見て、取り乱

すのは母である私のほうであり、私だけがひそかに間接的にロブの危篤に心を寄せておけばよかったのかもしれない。

「おさなくて罪をしらず、むずかりては手にゆられし、むかし忘れしか、春は軒の雨、秋は庭の露、母は泪かわくまなく祈るとしらずや」〔海辺の風景〕  
安岡章太郎

この歌を歌った「狂える母」のように、私もまた息子に向かって「むかし忘れしか」と、歌ってしまった。「母を哀れめ」と、私は息子に向かって言う愚かさはもたない。それは私が物心ついたときから、母に訴えられつづけているものだからだ。

しかし、犬の危篤に際して、私は「かの犬に愛されし、むかし忘れしか」と、息子に向かって歌った。それが間接的な「母を哀れめ」の歌であつたかもしれないと思うことは、「しなだれかかる母」「おおいかぶさる母」として残る自分を解体させたいという強い願いが私にもたらした、ある種過剰な感覚なのだろうか。

## 小さな『襟まき』

大阪府豊中市 中松ミナ子

この冬はじめて木枯らしが吹いた寒い日、私は弟宅への道を足早に歩いていた。

コートの際もとに、亡き母の小さなフアーが思わぬ温もりで心地良かった。

ことは秋から冬へと、フアー・ファッションの流行で、十四年もの間、洋服タンスの隅でうずもれていた襟まきが突如日の目を見た。自転車で行動する時など欠かせないほど重宝しているのである。もつともこの襟まき、決して高価なシロモノではないが、母が生前、美容院や病院へ通う時の防寒用で、おしゃれな母らしいモノだった。

そんな母が亡くなり、悲しんでいる余裕もないほどあわただしく過ぎた葬儀のあと、それなりの形見分けを終えたら、私の手元には、いわゆるガラクタの類だけが遺された。

このウサギかキツネか、はたまたネコ（？）の毛のような、こげ茶色のフアーは、当時は無造作に紙袋の中に詰め込んだまま忘れられていたのだ。それが意外にも毛足も充分に艶やかで美しかったから、急に鏡の前で首に巻くと、以前は（地味すぎるワ……）と思ったのが、今、なかなか似合っているので少しばかり戸惑ってしまった。

母はわが長男出産と同時に我が家に来てくれた。ちょうど家業のすし店も順調に繁盛しており、母はたちまち重要な戦力となり、結局晩年を我が家で奉仕の人生を送った気がする。

陽気な性格の母が、よもやの脳コウソクで倒れ……、そして私が今、その年齢になっていることに改めて気付く。

このところ、よく人から母の面ざしに似てきたと言われるが、形見の襟まきが違和感なくなじんで見えるのも、きっとそのせいだ、とひとり合点する。鏡の中の『母』の（アンタこの頃、やせ過ぎよ、ぼつぼつ体に気を付けてな

いと、それから、憎まれ口もほどほどにせんと、周りから嫌われるから慎みなさいよ）とのいつものお説教まで聞こえてきそうな気がするのだ。

一年ほど前、常連の女性客に手相を見て貰ったことを思い出した。

彼女は心が冴えている時は、手を取った瞬間から、その人の過去、現在、未来が絵巻物を開いたように手のひらに映し出されて見えるという特殊な能力を持つ人で、その時も私自身しか知らない過去を次つぎと言いついて、大いに驚かされた。その上「奥さんには、亡くなったお母さんが、大きな力で守っていらつしやるわ、今までもピンチを助けられているはずよ、思い当たらない？ 御命日には、ちゃんと仏さまを拝んでいらつしやい」と痛い釘を打たれてしまった。

なにしろ母が健在であつた頃は、遠慮のない母と娘の間柄をいいことにこき使っておきながら、病気になる入院中は「今日は店が忙しい」だの『ほとんど意識がなくて行って話しかけても

反応なしだもの……』と、つい毎日、母を見舞うことを怠り、病院まかせにしていた冷酷非情の私であった。

しかも位牌は弟夫婦が祀っており、私は気楽で勝手な立場でいられるのだから、いよいよもって親不孝者である。あの世とやらから、母が、私の守護靈となってくれるような娘ではないというのに。もつとも、人工衛星が飛び回る時代に何を言うかと笑われそうだが、この時は、ふしぎに、それが信じられたのである。

以来、心して弟宅を訪ね、仏壇に手を合わせて無心に拝んでいる私。

つい先日、義妹に手相の話をすると「おかあさんが、よく言うてはりましたよ『私の目の黒い間は、あの子を守ってやらなアカンのよ』って……」始めて聞く母の心情が、またしても私の胸の奥の方で、やさしく広がるのであった。

今は存在しない母への感謝の念を深めながら歩いていると、路地を抜けて北風が吹きつけてきた。思わず襟まき

の中へ首をうずめると、忘れていた母の懐かしい残り香が一瞬たしかに感じられたのである。

## 根無し草

匿名

私の生いたちは、ちよつぱりほろ苦い。訳あって、生まれて間もなく実母の妹夫婦の養女となったのだ。しかし、子供が出来なかった養父母の間に、二年後女の子が生まれ更に翌々年には男の子が生まれた。自ずから答えは決まる。私の立場は微妙になった。

自分が「もらいっ子」であることを知ったきっかけは、隣近所の善人という仮面を被った、実は陰險な大人達のささやきによるものだった。笑うしかないのだが、今もって私は誰からも自分の出生について、きちんと説明されてはいないのである。ドラマのシーンのようにはいかない。現実には、こんなもんですよ。

「いいかい、よくお聞き、アンタの

本当の親はね、○○さんなんだよ」

まるで、赤ずきんちゃん、あの意地悪オババそっくりだ。おためごかしに近寄ってきては、五、六歳になるかならない私にささやくのだった。もちろんオババ達は、自分の娘、息子達にもしっかりと吹き込むことに、ぬかりはない。

「あそこの子は、『もらいっ子』なんだよ」……お陰様で、私は小学校に入學と同時に、級友からいじめられたのだ。

こんな事があつた。教室で級友らに取り囲まれ、「もらいっ子、もらいっ子」の大合唱。私は教科書を開いたまま、じっと同じ箇所を読み続け、嵐が去るのを待った。泣かないこと、強くあること、こうしていることが唯一私に出来る抵抗だった。この可愛げのなさ、大人達や友人らの反感を、より増長させたのかもしれない。

とはいえ、私にも平穏な日々も、たまにあつた。級友らのお許しが出て、かくれんぼやドッチボールの仲間に入

れてもらえた時は、このままこの状態がずーっと続いたら、どんなに幸せだろうと思った。しかし、数分前までは、『敵』の彼らに、心底私が心を許したことはなかった。

救いは養父だった。とにかく優しくった。実の子と私を分け隔てなく可愛がってくれた。本来なら、叔母と姪の関係であるはずの、養母と私。この養父と私はアカの他人である。なのに、養父は養母より、ずっとずっと優しくった。ある日、私をもらいっ子と呼んだ妹や弟に対し、私はキレた。とっくみ合いのケンカになり、事の成り行きを承知していた養母がすっ飛んで、言った。

「やめなさい!!」

養母が振り払った腕は、私のだった。遅れてやってきた父は、

「そういうことを二度と言うな!!」

言いながら、弟の尻を何度も何度も、ごめんなさいをするまで叩き続けた。嬉しかったなあ。

と、養母が私をにらみつけ叫んだ。

「アンタが（私のこと）、そんなことぐらいでぐずぐず言ってるからっ!!」——だからこの子（弟）が叩かれる、養母はそう言いたかったのだろう——この人は、私の母ではない。そう確信した日だった。

「生みの親より育ての親」。私の出生について知っている大人達は、訳知り顔で私にこう言ってはさとす。だが、誰に言われなくとも私自身が一番そんな事は解っている。でもさ、辛いよ。私がいくらそう思ったって、育ての親の方は『お腹を痛めて生んだ子』だもんね。こんな事を小学校の低学年のうちから感じている子供だったんだよ私は……。グレもせず、学校を休むこともなく、勉強もした。みんなみんな養父母に気に入られたい一心からだ。

多感な年頃になると、さすがの私も従順なだけではなくなり、養父母の反對を押し切った結婚、出産。

子供を生んで解ったことがある。

「自分の子は、よその子より可愛い」

養母が私より、妹や弟の方が何百倍

も可愛くて当たり前。

「アンタがそんなことぐらいでぐずぐず言ってる」

あれは、ごもつともな感情だったのですね。

以来私は、養母には何も求めなくなつた。

私が人の子の親になり二年が過ぎた頃、今度は妹が結婚した。三DKの借家は信じられない多くの荷物と家具で埋め尽くされていた。私は軽い気持ちで各部屋を探検して回つた。

一番北側の四畳半の部屋に、それはあった。桐のタンスである。緑色をした唐草模様の布が被せられ、まるでカクシテアル風だった。婚礼家具は別の部屋に鎮座してあるから、それとは別のシロモノである。

布をめくりながら妹にきくと、

「うん、お父さんがね、買ってくれたんだ」

私の手前だと思いが、静かに、どうってことなさそうに妹は答えた。

それがもし、妹が言うようにどうっ

てことのない、そこいらにある安物の  
タンスなら、私も動揺はしなかったは  
ずである。『五十万』はするであろう、  
桐のタンスである。お金の問題です。  
私が結婚する時は、反対を押し切っ  
てといういきさつがあつたけれど、養

父母からはハシ一本もらっていなかっ  
た。夫と私の貯金だけで全てをそろえ  
た。二人分合わせて三百万ぐらいあつ  
たから、婚礼家具も電化製品も一通り  
手に入れることが出来たし、決してみ  
じめなスタートではなかった。『桐の



●  
家族のスケッチ

タンス』は、単に一つのエピソード。  
いや、たかがタンス、されどタンス。

(……お父さん、それはないよ)

「お前の結婚の時は何もしてやらなかつたから」、

そう言つて気持ち差し出すチャン  
スなら、私が妊娠した時、出産した時  
……あつたでしょ？

昔、養母から、「アンタがぐずぐず  
言うから」と言われた時と同じモノが、  
父に対し私の体の中を走りぬけた。

それからというものの、急速に父に感  
じていた絆がうすくなつてしまった  
私。どうしてこうも父に対して冷たく  
なれるのか。私は自分がコワイ。私は  
ヒネクレテイル。

「私って所詮、根無し草なんだよね」、  
演歌みたいなことを口走ったら、夫が  
真面目な顔で、

「オレや子供達にしっかり根付いてる  
だろ」

……せめてもの救い、いや十分な幸せ  
……。

(え・橋本美智子)

あ  
なたへ

ス  
マッシュ

## 母、姉、私、娘

東京都世田谷区 後藤 晶（42歳）

「困りものの母親」の座談会を読み、家族という身近な人間関係の悩みに驚いた。おそらく他の多くの人も、一見仲のよい親子でありながら、心の底には人に言いにくい思いがあるのだろう。

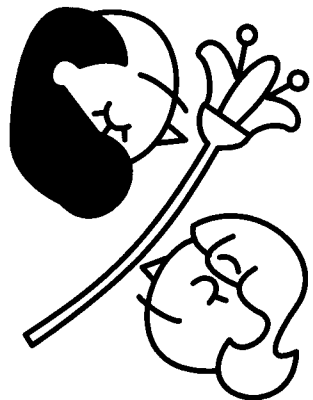
私は二人姉妹の妹で、母親に声や顔がよく似ていると言われて育った。それがいやとも思わない。マイ

ペースでうぬぼれが強くて、今まで親に気兼ねなどしたことなく生きてきた。姉は思春期のころ、よく親と対立していたが、今では親にとって私は私よりも頼りになる存在だ。私は四十になってもやんちゃで危なっかし、姉は幼児のころからしっかりしたお姉さんだった。

橋由子さんの本に『アダルトチルドレンマザー』というのがある。母親の娘に対する心理的な依存や子どもの生きにくさは、母親のさらに前の世代にも原因があるという内容だ。筆者自身も母を喜ばせたい一心

で、勉強や結婚に努力してきたという。親子間の依存と支配の関係は、世代を越えてめんめんと受け継がれていくので、どこかで気づいて不幸な意識の遺伝を断ち切ろうというものだった。

のほほんとした性格の私は、そのような圧迫を家庭内で感じることもなく成長した。が、自分の子どもと接するときに、「母ならどうするかな」とか、「母と同じことをしている」と思うことがある。自分が言われたように育てられたように、自分も子どもに同じことをしている。それは



心理的な支配ではないと思うが、鏡の中だけでなく心の中に母親の存在を意識するときだ。

理科系の姉の言うには、それこそがDNAなのだ。

あまり親密な家族とはいえないし、誉められた記憶も少ないが、私は全然いやじゃない。親のためにしたことなんて、何もないほどだが、それでよかったのだろう。

小学生の娘がいる。ふっと既視感の日々である。

## 二八六号「怒りも後悔も」の森菜美さんへ

東京都小平市 鈴木紀美枝（39歳）

あなたの文章を読んで、本当に悲しい……。それにしても、あなたって人は、申し訳ないけど暢気な方ですね。私の方も、読んで投稿するのが遅れてしまつてごめんなさい。

余談ですが、私は元浜北市民で、現在も住んでいる妹は、高校時代に合唱部部長で、全国大会で優勝した経験を持っています。

「こんな文章のつてたけど、どこ的高校が見当つく？」

「全国行かつていたら○商ぐらいかな」

「今からでも遅くないと思うんだよね」

「その人、自分の娘のことしか考えてないんだよ」

「その顧問だつて早く解任してあげなきゃ。自分が悪いとは言え、いつまでも悪人のままじゃかわいそうだよ」

「……」

と、すぐ私は悪役に同情してしまう……。

森さん、今日、たつた今、直訴してください。ありとあらゆることをしてあげてください。お願いです。どうしたか、ではなく、これからどうするか、だと思つのです。

お友達に「わいふ」をおすすめください

新しい定期購読者をご紹介くださった方には、次のように購読期間を延長させていただきます。

●定期購読者をお一人ご紹介くださるごとに誌代プラス送料とも一号延長。

「わいふ」年間分をプレゼントにお使いください

●御結婚、赤ちゃん誕生のお祝い、遠方のお友達とのコミュニケーションにどうぞ。お申し込みいただければ、新読者に、送り主のお名前とプレゼントのおしらせを同封の上、一年分、計六回送本いたします。

●その場合も定期購読者のご紹介の場合と同様に、お一人につき一号分延長させていただきます。

●また十冊以上ご購入くだされば割引がございます。

連載 5

# リラの花 桜の花

浅野素女

リステルツチさんは大きな瞳をした小柄な女性だった。ソフィア・ローレンを思わせる南欧人独特の人を吸い込むような瞳だ。その目がじっと私を見つめている。家庭裁判所つきの心理学者がいったどんな役割を果たすものなのか、よくのみに込めないまま、私は彼女に会いにやって来た。

彼女にはじめて電話したのは、たしか産院のベッドの上からだった。前回の裁判で心理学者との面接を勧められた時、私は、「ギョームに問題があるわけじゃないのに、どうして心理学者になんか会わせなきゃいけないの。問題のない子をかえって問題児にするだけじゃない」と思った。親の争い事に、子どもまで巻き込



んで裁判所に引きずり出すことは避けたかった。下の子の出産を控えてそれどころではなかったという事情もある。

放っておいたら、裁判所つき心理学者のリストルッチさんの方から手紙がきた。手書きの手紙だったのが印象的だった。出産直前のことだったと思う。とりあえず出産をすませてから、手紙を受け取ったという電話を入れた。

当時の私の身には、いま思っても目が回るくらい多くの出来事が同時に降りかかっていた。前回の裁判の時は大きなお腹を抱えて出廷し、お腹が重くて、裁判官の前だというのに、両足を開いて椅子の上に腰を降ろさねばならなかった。出産とか裁判とか、それだけでも人生の大事件だが、不動産の売買という七面倒くさい仕事も抱えていた。ギョームが五歳になるまでふたりで暮らした小さなアパートを売り払い、家族四人の生活をスタートさせるため、もう少し大きいアパートを探し出して、購入手続きをしている最中だった。カトリック教徒になるための洗礼という一大イベントの準備もしていた。どれも一生の中でそうめつたにやらないことを、一気に抱え込んでいた。人生の転換期とはこういうもののだろうか。

まだ一か月半の赤ん坊を人に預け、家に戻るまでにお乳が張ってこないかと心配しながら、私は裁判所の

迷路のような廊下をつたって行った。パリ最高裁判所の建物の上階に出ると、肌寒くなるほど殺風景な廊下が延々と続く。その片隅にある奥まった部屋が、リストルッチさんのオフィスだった。

「私としては当のお子さんがどう感じているのか知りたい。ギョームの前で、ごくごく基本的なところで意見の一致を、両親そろって示すことが大切だとも思っています。まだおふたり向き合って話し合える状態ではないのでしたら、段階的に進めましょう」

リストルッチさんは、まず私とアダムそれぞれに会って、話を聞きたいと言った。それから私とギョーム、ギョームひとり、アダムとギョームという組み合わせでも会いたい。そして最後に、三人いっしょに話し合おう、ということだった。その面接の結果を彼女がまとめて、次回の審理の際、裁判官に報告するということ。

でも、もう裁判で決まるべきことは決まっているのではないですか、と私が不可解な顔を見ると、リストルッチさんは答えた。

「判決というのは、親どうしが自分たちで決められないから代わりに裁判官が決めたというだけで、両方の親がこうしようと同じ意すれば、何の強制力もありません」

あ、そうか、と私は意外な感じがした。判決というのは、もう何か絶対的なものかと思っていたが、刑事

裁判ではないのだから、あくまでとりあえずのものなのだ。ちょっと角度を変えただけで、世界がちがつて見える時がある。私はそれまでの、どんながんじがらめにされてゆく感覚から、ふと解放されるような気がした。ともかくも、私は一回目の面接を承諾した。

私は息を深く吸い込んでから話し出した。自分の生きてきたこれまでの十数年間を要約するのはたやすいことではない。

「重要だと思うところだけお伝えします」

と、私は前置きした。リステルツチさんの瞳がじっと私を見守っていた。裁判の時のように、遮られることも、反撃されることもない。私は自分の言葉の裏づけとして、アダムとの間でやり取りされた手紙やファックスの束を抱えて持ってきていた。裁判のたびにそうしていた。しかし、リステルツチさんは微笑みながら首をふった。

「見せてくださる必要はありません。私はあなたのおっしゃることを信じます」

何と表現すればいいのだろう。私はある感動に包まれて、彼女の瞳の奥を覗き込んだ。すべてが、リステルツチさんのこのたったひとことで救われる思いだった。それまで、どんなに言葉を尽くしても、どんなに証拠を示しても、どんなに心に鋼鉄の鎧を着せて闘っても、私の言葉は届かなかった。少なくとも私にはそ

う思われた。裁判は証拠の世界だ。書面やサインがなければ、発せられた言葉などいくばくの価値もない。裁判官は私を、父親が子どもに会うことを阻む悪い母親と半ば踏んでいたようだし、私の弁護士だって、内心どう思っていたとか。事態を正しく理解されないということに自分がどれほど傷つき、苦しんでいたか、私はリステルツチさんにそう言われて改めて思い知った。

この人は私の言葉を信じてくれる。それは、私に途方もない安堵をもたらした。私は落ち着いてこれまでの経過を話した。私たちはたしかに恋愛をして、思いちがいがあったにせよ、歪んだ関係であったにせよ、ギョームは愛し合った男女から生まれたのだと、静かに語ることができた。

リステルツチさんは言った。

「ギョームの前で、そう言っただけが大切ですよ」

ギョームはすくすくと育っていた。片親家庭で育った子どもには見えないと、学校の先生が言うほどだった。事態をごまかすことなく、要所要所で子どもにもわかる言葉で説明してやったのがよかったのだと思う。男の子の自覚が出てきた頃、夫との出会いがあり、家族三人の生活に入ったという幸運もある。それにギョームは、引き裂かれる部分はあっても、両親に愛され

ていると感じていただろう。私に対する態度はともかく、アダムはギヨームを愛していた。それはリステルツチさんも二か月に渡る面接の合間に、繰り返し私に強調した点だ。

話は遡るが、前回の裁判の直後のある週末、私はギヨームにパジャマなどお泊まり道具一式を持たせてアダムのもとへ送り込んでいた。裁判ばかりを主張して義務は果たさないアダムの身勝手さに、ほとほとうんざりした結果であった。いまのところはギヨームを自分の家に泊めないでおく、と言い出したのはアダムの方なのに、裁判官の前では私がギヨームにプレッシャーをかけているようなことを言う。だから、裁判官はギヨームに何か問題があるのかと勘ぐるのだ。私の目から見て、ギヨームの方は、アダムのうちに泊まる心の準備ができつつあった。父親のところには自分のうちにはないおもちゃやゲームもあるし、それだけでも子どもにとって十分に魅力的なことだった。アダムからひとこと、「裁判で決まったことだし、泊まりなさい」と堂々とさえいいことだった。しかし、彼にはその勇気がない。または自分の家庭の事情で都合が悪かったのだらう。自分は父親だと声高に権利を主張しながら、いざその段になると、おおよび腰になる。裁判官はそうしたアダムの姿勢に潜む危険を敏感に感じ取って

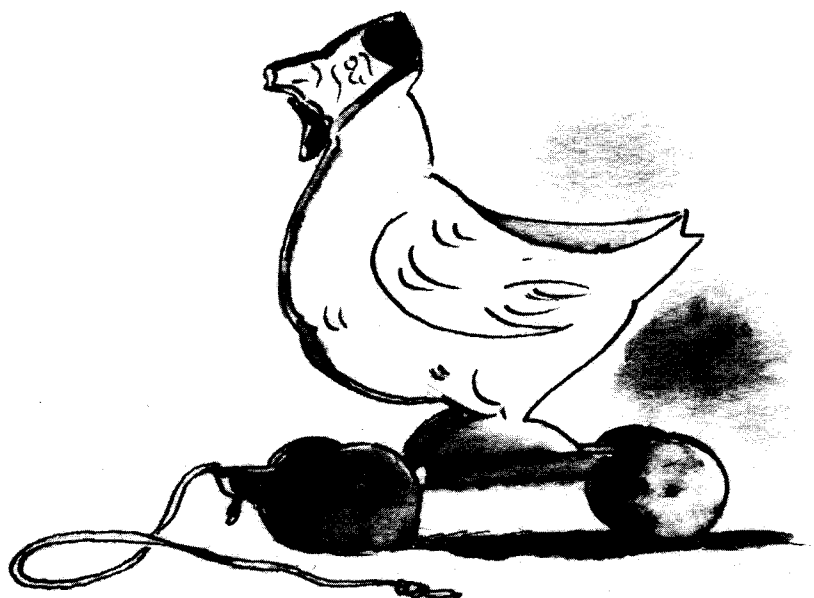
「親の権威をいまから崩しにしていたら、将来、困る時が来ますよ」と厳しい口調で言ったことがある。アダムがするべきことをしないなら、私が行動に出るしかなかった。そうしないと、いつまでも私が悪者にされそうだった。

「もしも帰ってきたくなったら、電話を入れてね。いつ帰ってきてもいいからね」

そう言い聞かせてギヨームをアダムの家に送り届けた。実力行使である。パジャマを持参して現れたギヨームを、アダムは送り返すわけにはいかなかっただろう。それ以後、問題なく、ギヨームはアダムの家に泊まれるようになった。

心理学者との面接が始まった時は、すでにそういう状況だった。したがって、判決に関して私が修正を加えたいと思うことは、ただひとつ。私からの働きかけで週末アダムの家に泊まるようになったが、それはごく最近のこと。ギヨームにとっては大きな生活の変化である。異論はないが、長期に渡って私と離れたことがないので、様子を見るため、この夏のヴァカンスは父親のもとで過ごす期間を一月でなく、二週間にしてほしい。私はこう提案していた。

繰り返しになるが、私たちはアダムといっしょに暮らしたことがない。だから、離婚したカップルとまるで同様に扱われることについて、どうしてもふに落ち



ない部分があった。一か月もギヨームと離れ離れになるなど、それまでの生活からは考えられないことだった。

「どうしてそんなに心配なさるんですか」と、リステルツチさんは意外な顔をした。

「子どもは少しずつ自立してゆくものです」

たしかにそうだ。だが、ギヨームは七歳になったばかりである。この辺りの感覚の差は、国民性のちがいというものだろうか、と私は唸った。まちがっているのは私なのだろうか。七歳の子を一か月も手離さなければならいなんて苦痛以外のなにものでもない、と感じるのはおかしいのだろうか。

フランスの幼稚園では、四歳くらいでもう、親元を離れて集団生活をする移動教室（それも二週間！）のプログラムが組まれるほどである。「自立」と「社会性」が何にもまして尊ばれる国なのだ。

いま思えば、ちょうどギヨームが幼児から児童へと脱皮する変わり目のこと。私の方も、そうした変化に対し、心の準備が整っていなかった面がある。

「自分の父親と一対一で向き合って、まとまった時間をいっしょに過ごすというのは、ギヨームにとって大切なことですよ」

と、リステルツチさんはたたみかけた。

「ギヨームは、お母さんが結婚して、父親のちがう弟

が生まれて、どこかで疎外感を感じているかもしれない  
せんし……」

この言葉には私は即座に反論した。

「私が結婚したことも、弟が生まれたことも、誰より  
喜んでいるのはギヨームです」

「いえ、家族から疎外されているというのではなく、  
あなたに対して、という意味です。ずっとあなたを独  
り占めしていたのに、そういうわけにはいなくなつ  
た。ギヨームがいま自分の場所を確認することは、と  
ても重要なことです」

リステルツチさんは続けた。

「それにアダムさんはギヨームをとっても愛している。  
ギヨームといっしょの時は、ギヨームのために精一杯  
のことをしてくれるでしょう」

もちろん、アダムはギヨームを喜ばせるためなら何  
でもするだろう。私は私の感じている抵抗感の在り処  
を突き止めようと、一心に自分の心の奥を探った。

どうやら、いまだに私の心の奥には、私に対してさ  
んざんな言動を取った人にギヨームを渡したくないとい  
う思いがある。それは否定できなかった。でも、私  
の立場とギヨームの立場はちがうのだ、と私は自分に  
言い聞かせた。ギヨームは収容所に送り込まれるわけ  
でも、ギヨームに悪意を抱く人間の手に渡るわけでも  
ないのだ。

それともうひとつ。ギヨームは認知されるまではフ  
ランス人とは認められていなかったから、私はギヨ  
ームを日本人として育ててきた。私たち親子は日本人親  
子として生きてきた。フランスで生活していても、ど  
こか日本の感覚で生きてきた。それが突然、フランス  
の司法、つまりフランスの価値観で裁断される羽目に  
なった。それに伴う抵抗感はかなり大きかったと思う。  
でも、ギヨームはこれからこの国で成長し、生きて行  
く。それなら、やはりこの国の習慣や価値観に従って  
道を拓いてゆくのが当然のことではないか……。

リステルツチさんの吸い込まれるような瞳に見守ら  
れて、私はこうしたことをぐるぐると考えた。そして  
ある時、ひょいと何かを突き抜けられたような気がし  
た。

与えればいい。アダムがほしいというなら、与えれ  
ばいい。与えたから減るのが愛情ではないだろう。時  
間を取られたからギヨームと私たち親子の関係が揺ら  
ぐわけでもないだろう。私にとっては敵のような存在  
であっても、奪おうとするより、与えるべきだ。頭で  
は理想の父親を演じたいと思っているのに、憎しみに  
支配されて自分をコントロールできず、子どもの母親  
を痛めつけている、そうしたアダムの弱ささえ、いつ  
かギヨームは理解するようになるだろう。ギヨームを  
信じるべきだ。一個の人間としてのギヨームの内に秘

められた力を信じるべきだ。私ひとりでギョームを支配しようとしてはいけない。

前回の裁判の時の一場面が思い出された。アダムの態度が結局は子どもを苦しめているという点を、私が批判した時だったように思う。彼は自分を弁護して、「もう少し時間が経って、ギョームが成長した暁には……」というような言い方をした。それを聞いて、裁判官はびしゃりと言った。

「もう少し経ってからなんて、あなた、子どもはまさにいまのいま、成長しつつあるんですよ。このいまが肝心なんです！」

裁判官のあの言葉を、私もまた噛みしめた。いま、なのだ。ギョームにいま、父親を与えてやらねばならない。

ギョームの面接の日が来た。「心理学者」がいかなるものかをギョームに説明するのは難しかった。パパとママは意見が一致しないので、裁判所でいろいろなことを取り決めている最中だ、というのは前から伝えていて、ギョームも承知していた。裁判官ではないけれど、別の「裁判所のおばさん」がギョームに会いたいと言っている。ギョームがこうしてほしいと思うようなことがあるば、何でも話していい。相談に乗ってくれると思う。リステルツチさんのアドヴァイスもあった。

て、私はこのように説明していた。

パリ最高裁判所の正面階段を昇りながら、ギョームは目を丸くしていた。

「うわー、すごいね。ここは王様の宮殿だったの？ ルイ何世が住んだの？ えつ、そのずっと昔なの？」

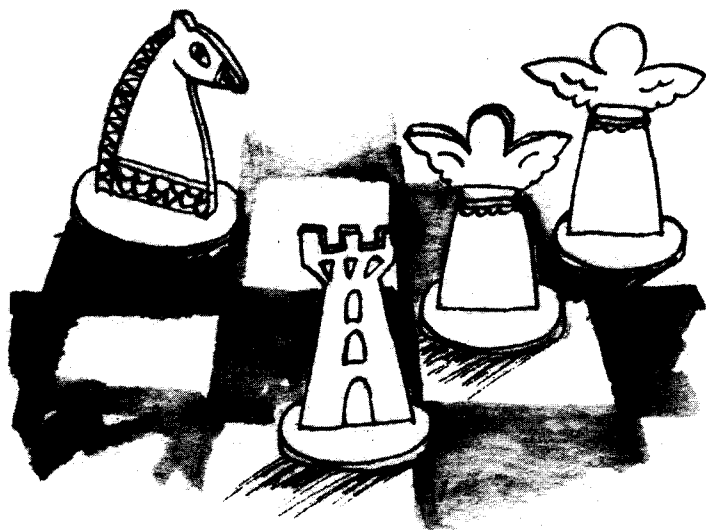
最近まで、大きくなったら何になりたいかと聞かれると「王様」と答えていたギョームは、おとぎの国を探検するかのように目を輝かせながら裁判所の建物に入っていた。黒衣を纏った弁護士が廊下を行き交っている姿を物珍しげに眺めては、「ママの弁護士もあんな服を着ているの？」「弁護士って何をするの？」など、私を質問攻めにした。

リステルツチさんのオフィスに通されてからも、開口一番。

「本当にここ、王様が住んでいたの？」

緊張の影すら見せず、リステルツチさんとの面談はスムーズに始まった。私はしばらくして外に出されてしまったので、二人の間でどんな会話が交わされたのか、くわしくは知らない。後でギョームに聞いた限りでは、質問事項が印刷された紙があつて、それに順番に答えていったとのこと。

「家では、義理のお父さんと何をするの」とか、「お母さんはどんなことをしてくれるの」とか、そういったことを聞かれたという。家族の様子を把握しようと



いうのだろう。お絵描きもした。精神分析の一環である。

途中、リステルツチさんは別の用事で、一度席を外した。私たちが到着した時、待合室で別の家族の姿を見かけたが、その子どもの件で裁判官のところに出向かねばならなかったらしい。

その日は水曜日だった。フランスの学校は水曜日がお休みだ。子どもの面接や、子どもを交えての審理は水曜日に集中する。リステルツチさんはてんでこまいの様子だった。

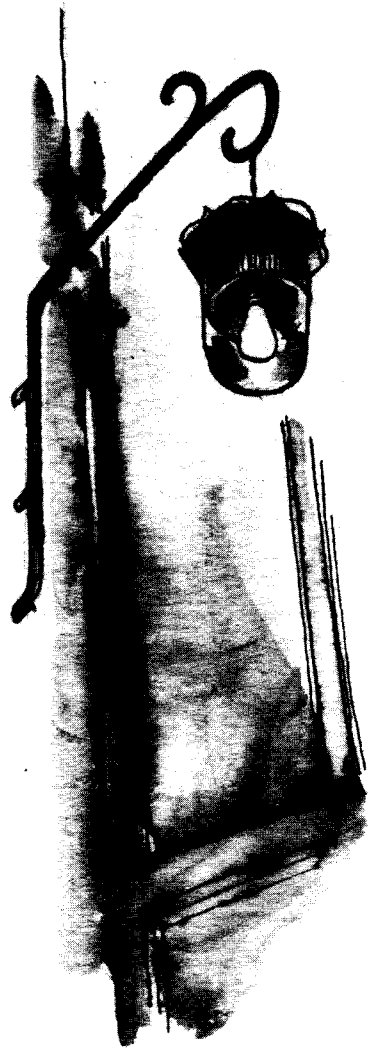
リステルツチさんが席を外している間、ギヨームは楽しみに絵を描いていた。そして、最後までリラックスした表情だった。

「好奇心いっぱい、何の問題もないお子さんですね」  
そう言われ、私はほっとした。専門家が見れば、私と夫がどんなふうに子どもに接しているか、たとえば子どもにプレッシャーを与えて父親に会わせないようになっているかどうかなど、すぐにわかることだろう。私はあらぬ嫌疑をかけられているより、心理学者にギヨームを会わせてその点をはっきりさせてよかったと思った。

それ以上に、ギヨームにとって、この面接は非常に有意義なものだったと、私は少し後になって納得した。なぜなら、ギヨームとしては、父親と母親のいさかい

がここで初めて公のものになったからだ。

もちろんそれまでも、家庭内やごく親しい者の間では何度も話題にしてきた。しかし家庭の外で、しかも見ず知らずの他人の前で「そのこと」を話題にし、「そのこと」を隠されたものでないものにする、ことは彼にとつて、心理的に大きな飛躍を果たしたということだった。他人とは社会の視線であり、社会の目に晒すということは、事態を客観視することを強制されることだ。その時、問題は自分の「外」の問題となり、感情や情念のレヴェルを越えて、言葉に置き換え可能な物事となる。それはギヨームがこの問題から解放されるために不可欠の第一歩だった。ギヨームが問題児



であるとかないとか、それとはまた別のレヴェルの話であった。

その日、家庭裁判所には幾人もの子どもの姿があった。リステルツチさんによると、ギヨームは他の子どもたちのケースに強い興味を示し、彼女にいろいろと質問を浴びせたそうだった。

「あの子は、お父さんとお母さんが別れて以来、お母さんと住んでいるんだけど、お父さんと住みたいと言ってきているのよ」

リステルツチさんの説明に、ギヨームは熱心に耳傾けていたという。問題を抱えているのはギヨームひとりではない。ほかにもそうした子どもはたくさんいる。

様々なケースを生きている子どもたちがいる。そのことを実際に自分の目で確かめたことの意味は大きかった。

私の目にも徐々に、裁判所つき心理学者の役割というのが輪郭をとって立ち現れてきた。心理学者の役割は、一般的には、子どもの真の意向を見極め、裁判官の判断を助けることにあるようだ。私たちの場合、争点自体はごくささいなことだった。だが、裁判官は、子どもの言動が裏で親に練られていないか、おとなたちの高等な話術の裏に嘘が隠されていないかを確かめなかったのだろう。

子どもが父親のところに泊まらない。子どもがいやがっているのか。父親が泊めたくないのか。母親が泊まるのを阻んでいるのか。

アダムの方は、とりあえず要求できる権利はみんな要求して手に入れたものの、正真正銘の父親としてギョームの一切合切を引き受ける準備ができていなかった。私としては、ギョームを手元に留めたい気持ちがあつて、アダムがもう少し待つというならこれ幸いとはばかり、その状況に甘んじていた。子どもの立場としては、パパのところに泊まってもいいのだけどママに悪いかな、と考えて、泊まらないと言っていたかもしれない。それぞれが何かをどこかでごまかしていた。

行き着く先もわからず始めた心理学者との面接だつ

たが、六回に渡る面接は、わかつている、頭で理解していると思つていいことを問いなおし、再度組み立て直す、またとない機会となった。

親なら自分の子どものことはすべて理解していると思つていい。そこが落とし穴だ。子どもにとつて本当は何か必要なのか、我が身のかわいさをひとまず脇へ置いて状況を俯瞰する――リステルツさんの助けを借りて、私のまなざしは少しずつ本質的なところへ近づいていったと思う。

「父親はひとりです。でも、パパと呼べる人がふたりいても、何の不都合ありません。ギョームはあなたのご主人のことを話す時は「僕の義父」と言っていますし、彼の頭の中はちゃんと整理されていますよ」

リステルツさんは、実の父親と義理の父親の位置づけに関する問題にも、こうして明快な答えを示してくれた。心から少しづつ重石がはずされていくようだった。

ところが、それから十日後の三人いっしょの面談は、極度の緊張の中で始まった。

私とギョームは指定時間より少し早めに裁判所に到着した。私たちは裁判所内にあるカフェで、テーブルをはさんで向き合い、時間を潰していた。ところが偶然、少し離れたテーブルにアダムが居合わせた。友人

のピエールをいつものように護衛に引き連れて。私はほとんどいつもひとりで裁判所に赴いていたが、彼はいつもピエールを伴ってきていた。大の男がふたり束になれば、私にプレッシャーを与えられると思っていたのだろうか。

アダムは席を立つと私たちのテーブルにつかつかと近寄り、私の存在はまったく無視して、ギヨームの頭の上に屈み込んだ。そして精一杯、相手を崩しながら、「サ・ヴァア？ モン・プティ・ギャルソン？（息子や、元気かい）」

と甘い声を出した。ギヨームは蒼白になって身を固くした。その場面は傍から見ても明らかに異常な光景だった。隣のテーブルの女性はぎょっとした顔でアダムを見つめていた。

子どもの目の前の保護者をまったく無視して、溶りけそうな笑顔で子どもに親しげに話しかける男。いったい何なの、この人は、と女性の表情は物語っていた。「ピエールがあっちに来ているんだけど、ちよっと挨拶においで」

ギヨームはこの事態に明らかに混乱して、見じろぎもしなかった。父親と母親が接触する瞬間を、何よりも恐れているギヨームだった。ギヨームを私の家に迎えてくる時、アダムは私と顔を合わせるのを避けるため、外から電話でギヨームを呼び出す。私が迎えに行

く時は、ギヨームを家の外にひとりで立たせて待たせたり、または鉢合わせしても私や夫をまったく無視したり、ギヨームの前で私に対する憎しみと軽蔑の感情を剥き出しにしてきた。約束の時間に遅れようものなら、後で大事になる。泊まる時は、私の家のものを一切持てこないよう、ギヨームに言い渡していた。「母親との生活、父親との生活、ふたつははっきり切り離させる」と、アダムは調停の話し合いの時も声高に主張していた。しかしそれは、たとえばふたつの国籍を持つ人間に、日本にいる時はフランス人の部分は一切ないことにしろ、フランスにいる時は日本人の部分は一切捨てろ、と言うのと同じである。自分でいるな、というのと同じである。

それまでの三年間、ギヨームは大人のエゴやプライドのために緊張と不安を強いられてきた。しかもいま、これから当の父親と母親に挟まれて面談をしなくてはならないという矢先、さらににっちもさっちもいかないう状況に追い込まれて、ギヨームは声すら出せないでいる。

「やめてくれない。こんなところで」

私は抑えた声で言った。

お蔭で、そのすぐ後の三人の面談は、またもや私に対するアダムの非難、攻撃で幕を明けることとなった。私はリステルツチさんの要望で、ギヨームとアダムを

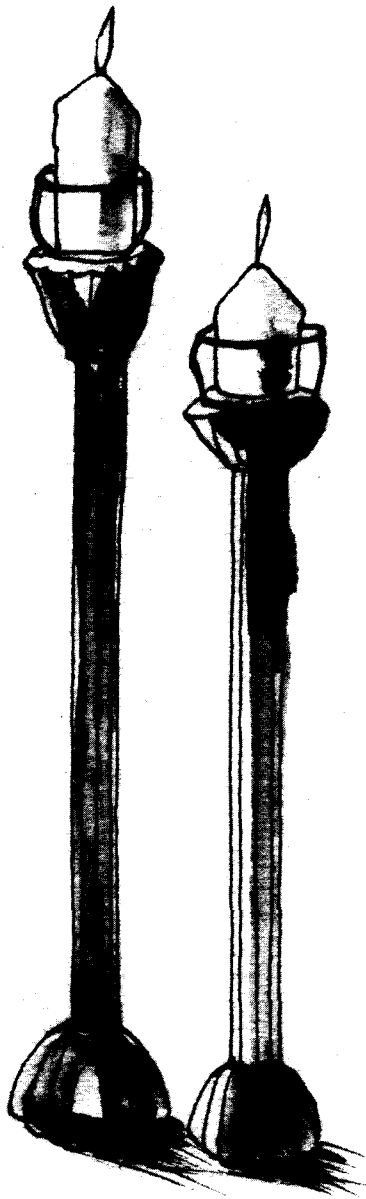
残してオフィスの外に出た。ギヨームは終始緊張したままだったらしい。何かまちがったことを言ったりしたら、たいへんだ。子ども心にそう感じていたのだらう。

しばらくして私も呼ばれて、四人の話し合いが始まった。アダム様子は少し落ち着いていた。リステルツチさんは、ギヨームは私たちが愛し合った末に生まれた存在であることを改めて確認した。そういう言い方をされるのはその時は不愉快ですらあったが、ギヨームにとって、それは非常に重要なことだとわかってきたから、私もアダムも異論を挟まなかった。さらに彼女は、以後は争いと避け、親どうし協力してやっついこうと私たちに呼びかけ、その意思があることをギ

ヨームの前で誓わせた。

これらの作業は一体、何を意味していたのだろう。過去を整理した時、人はようやく未来に向かって進んでゆくことができる。わずか七年間の子どもは過去であつても、それは四十年、五十年を生きた人の過去に勝るとも劣らない重みをもった歳月だ。その過去に名前を与えること。その過去を過去と名づけること。これらすべてが、ギヨームのこれからにとって必要な手続きであつた。

リステルツチさんとの面談で、裁判の判決内容が大きく変わったわけではない。おそらく面談を勧めた裁判官の側には、私たちが安易に裁判に頼らないよう、私たち三人の今後のために、という配慮もあつたのだ



ろう。そしていま思うのだが、リステルツチさんがしてくれたことは、私たち三人の立ち会いのもとに、私たち三人の過去の埋葬を取り仕切ってくれたということではなかっただろうか。

しばらくして、私とアダムはまた裁判官に召喚された。四回目である。いつもとちがうのは、弁護士以外にリステルツチさんが審理に加わったこと。彼女は裁判官の前で、六回以上（父親の方は、二回以上会いに行った可能性大なので）に渡る面談の内容をまとめた報告書を読み上げた。

リステルツチさんは、私とアダムのそれまでの経緯を要約した。また、ギヨームが非常にバランスの取れた子どもであることを報告した。ごく細かいところで事実関係に誤りがあったところもあるが、私は黙っていた。アダムはこの期におよんでも何度もリステルツチさんの報告を遮って訂正を加えようとし、裁判官にたしなめられた。

私は聞きながら、涙が溢れてくるのを抑えることができなかった。ようやく自分の名誉が回復されたことを、私は感じた。誰に対して、というわけではない。考えに考え、自分を問い直し、迷いにまよいつつ真実の言葉を探ったそれまでの苦しみが、ようやく報われる思いだった。よくぞここまで理解してくれたと、心

はリステルツチさんに対する感謝でいっぱいであった。彼女はアダムが悪いとか、私が正しいとか、そんな言い方は一度もしなかった。ただ、彼女の淡々とした報告を聞けば、私が、アダムがみなに信じさせようとしたような人間でないことはわかったと思う。判決内容はもうどうでもよかった。

実際、判決自体は、それだから何が変わったというものではなかった。どちらが迎えに行くかという問題は、アダムの要求が通ったし、夏休みに関しては、私の主張が受け入れられた。現在も、私たちの関係は当時と似たようなものである。しかし、私はもうそのことに押し潰されたりはしない。

ギヨームに対して罪悪感を抱く必要はないと、私を支えてくれた友人たちは口をそろえて言った。父親の攻撃的な態度はずっと変わらないかもしれない。しかし、人はそれぞれの条件や障害を背負って生きている。これが彼の人生なのだ、かわいそうに思う必要はない。そうした条件を認めた上で、手をたずさえて生き抜いてゆく姿勢こそが大事であろう。

私はこうも思った。私たちは、家族四人が強く愛情で結びついている。たいへんな状況には、いつも一丸となって立ち向かってきた。アダムはそうした家族を持たない。高みに立って憐れむつもりはないが、やはりその面では不幸な人である。



「ある意味では、ギヨームは、彼（アダム）に残された最後のチャンスなのかもしれません」

最後に、ひとりでリステルツチさんに会いに行った時、彼女はこう言った。

「妻や子どもや、自分の家族に十分なことをしてこなかったという後悔が、彼の心のどこかにあると思います」

愛情は与えて減るものではない。下の子が生まれたからといって、私のギヨームに対する愛情が減ったわけではなく、それどころか、私たちの愛情はさらに奥行きを広げた。それと同じで、ギヨームが父親とつき合っても、父親に愛情を注いでも、私の損になるわけではない。愛情は損得ではないのだ。本当の愛は、愛する自由、選択の自由を与えることだ。神も、愛の証として、人間を自由な存在として創られた。ギヨームがアダムにとって「最後のチャンス」だとして、ギヨームとの交流によって、アダムが少しでも心の安らぎを得られるなら、それでいい。人ひとりが幸せになつて、悪いわけではない。

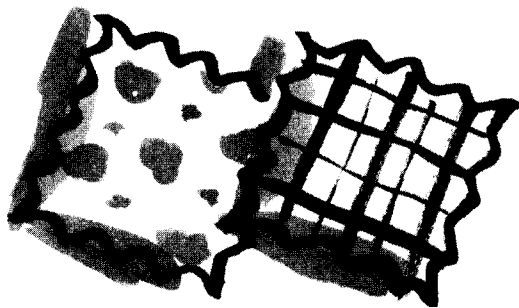
敵をも愛せ、というそれまで寄りつきがたかった厳しいキリストの言葉が、ようやく一筋の光に姿を変えて私の心に射し込んでいた。

（え・荒田ゆり子）

インタビュー・「アスカ企画」和田麻子さん

# アパレル業界の実態

— 女二人で経営する小さな会社を持って —



インタビュアー 田中喜美子

## アパレルの歴史的背景

田中 私たちの目に入るファッション情報  
って、わりあいに限られてるでしょう。す  
ごくファッショナブルなパリモードとか見  
ると、それを作っているところも華やかな  
ところと思っちゃうんだけど、結構小規模  
に作っている人たちがいる。そういうのは  
マンションメーカー（マンションの一室を  
借りて始めた企業）っていうんだって聞い  
たんだけど、そういうことも含めて、どう  
いうふうに洋服ができていくか、最初から  
話してください。

和田 まず、マンションメーカーっていう  
ものがどうしてできてきたかっていうと、  
洋服を作るアパレル産業って、高度成長期  
からはとんど大手が占めているものなの  
ね。既製服を大量生産してみんなに売って  
いく。大量だから、価格もわりと安い。で  
もファッションを大手が作るとなると、マ  
スを手にするから、みんなが好きなもの、  
無難なもの、面白くないものっていうのが  
たくさん出てくる。みんな同じものを着て

いなきやならない、つていうことになるわけですね。

それで、七十年代、八十年代の初頭ぐらいに、もっと自分を表現できる普段の洋服が着たいと。パリコレとかそういう舞台上で着る服ではなくて、普段着るものも、もっと自分の個性とかが現れるような洋服を着たい、という人たちが集まって始まったのが、DCブランドだとか、マンションメーカーとか。

田中 なるほど。

## 「アス力企画」誕生秘話

和田 うちの会社が始まったのは一九八五年なんですけれども、このころって時代のおおりに受けて、もっと小さなところで勝負しよう、洋服全般じゃなくて、テニスウェア、スポーツウエアっていうように、もっと小さいカテゴリーの中で変わったものを作ろうっていう動きがあった。そういう会社がスポーツ業界にもたくさんできたわけです。

田中 なるほど、専門分化つてわけね。

和田 以前の経営者の一人はデザイナーあがりの女の人で、たまたま旅行仲間が二人いて、一緒に会社やるうよつて誘ったわけ。

一人は素材の開発をやっていた人で、毛糸の糸の素材とかボーダーの柄とか、柄を描く糸の専門の人だった。もう一人は広告代理店のスタイリスト。そのときデザイナーあがりの人は四十歳で、あとの二人は十歳上だった。

で、何をしたらもうかるだろうって考えたときに、「中年のおばさんに合うようなテニスウェアを作つて、これで一発当てよう」つていうことになったわけ。

田中 これはいい話ですね。みんなの励みになるわ。お金、誰が出したの？

和田 今も有限会社なんですけど、当時は百万で有限会社ができた時代だったんですよ。一人三十五万円ずつ出したんだつて。そのうちの一人は、子宮ガンで入院していたのにあとの二人が病院に押し掛けてきて「早くお金、お金」つて手を出したの、私は今でも忘れない」つて。

田中 アッハッハ。こっけいな話もあったわけね。

## 洋服ができるまで

和田 で、おばさんの着るテニスウェア、どんなものを作るうかつてことになった。

まず生地がなくっちゃデザインができない。ふつうの人は買えない生地屋さんで買ったり、昔知り合いになった生地屋にちょっと分けてもらつたりして、生地をセレクトする。

これは（写真の洋服を手説明）生地から生地屋さんから生地を買つてきて、デザインは寸法を決めて絵を描けばいいんだけど、こっちは（胸元に刺しゅうのある服を手取つて）刺しゅうなのね。刺しゅうは刺しゅう屋さんがある。生地屋さんで縫製してくれるところと、刺しゅうをしてくれるところが全部違うわけ。

服には「おりネーム」つてものと「品質表示」つていうのがついていて、これを作っている会社はまた違うんですね。この会社、たとえばポリエステル六十で綿四十つていうものを作つてもらつて、手配して縫製屋さんに行くようにするわけ。すると



和田麻子さん

縫製屋さんは一緒に縫い込んでくれる。

こういうネームなども、一個や二個じゃ作ってくれない。何万枚って世界だから、採算にのらないと作れないわけよ。で、Iさんって前の社長さん達は、自分たちでプ

リントのセットを東急ハンズで買ってきた、一個一個手で作ったり。品質表示のマークは、浅草橋とかでハンコを売っているのね。それを買ってきて、ぼんぼんぼんと押ししたりとか。

**田中** どういうところで、何をいくつ作るっていうのを決定するの？ 自分が欲しいもののイメージがあって作るの？

**和田** 彼女達の場合は、テニス狂いだった人がデザイナーで、腕がすごくよかったのね。何がいかって、テキスタイルがよかった。テキスタイルっていうのは、刺しゅうの柄や絵を考えたこと、で、そういうことがすごく上手な人だったのね。ちょっとかわいくて。

**田中** なるほど。売れるわけね。

**和田** そう。しかも素材が好きだった。素材はもう一人の人が作るのが上手だったから、素材から全部自分たちで作っていたのね。

**田中** へー、素材から作るの？

**和田** たとえば、（しま柄のシャツを手に）これはうちのオリジナルなんだけど、ボーダーがやりたい、っていう話が出る。そうすると、素材屋さんに電話をして、持っている糸を全部貸してもらうんです。一覧表になっているものを。その有り糸で私たちがお絵描きするの。まずこの糸がきて、次はこの糸で、太さはこのぐらいで、そのあ

いだに一本ラメが入ってっていうふうに。何種類か絵を描いて、どれにするか決めて織ってもらう。

オリジナルっていうのはリスクを負うことになるんですよ。生地一反でだいたい五十メートルぐらいなんだけれども、売って生地を買うと一反から買えるわけだから、五十メートル潰せばすむんだけど、この服だと例えば二百メートルが二色だから、四百メートルは必ず自分たちでリスクを負うことになる。そのかわり、このボーダーは他のどの店にも売っていない、このブランドも使っていない、うちだけのオリジナルということになるわけですよ。

**田中** なるほど。

**和田** マスプロとは全株違う世界でもあるわけですよ。うちは半期（半年）に二、三種類しかオリジナルを作っていないんですけども、当時は半期に六種類、ほとんどすべてオリジナルでやっていたわけ。

**田中** ぜいたくな話ねえ。

**和田** それでまあ、パンクしちゃったんだけど。

オリジナルティーがあつて、やっぱり売れたんですね。人とは違う服を自分が着ているとか、中年のおばさんがカッコよく見えるとか。

**田中** こんなささいのいやだわ、かつこわるいわつて、まず自分が着たいもの、そんな欲望から出発しているのね。

**和田** ところが、年商が多くなるとそういうこと言つてられなくなる。要するに、自分が好きなものじゃなくなつて、お客が買ってくれるものになつてくるわけ、だんだん。

**田中** そりゃそうだよな。

**和田** どうしてもそうなるのよ。ところがそれをうまくやれる人と、うまくやれない人がいる。彼女たちすぐくまじめな人だったから、とても苦しんだクチなのね。お客の買ってくれるものと、自分の好きなものが違つていうことが、うまく折り合いがつけられない。

で、結局うまく行かなくなつちやつて、デザイナーが辞めてしまった。そこで前の社長は、新しくデザイナーを雇おうと思つたわけ。

**田中** 他にデザイナーっていなかったの？

**和田** 一人しかいなかった。それで別の人を持つてきて、このポストに置けば、前の人と同じようにやつてくれる、もしくは前の人のためなところを補つてくれると思つて、高いお金払つて、雇つて入れてみたら、全株使ひものにならない。

その辺に転がつているデザイナーを捕まえてほんと置いたつて、そんなことできつこないの。もとのデザイナーならではの個性とかで売れてたんだから。

**田中** 難しいわねえ。

**和田** それでどんどんデザイナーを入れかえたんですけど、結局ダメで、社長がもう辞めたいつて言い出したので、社員だったあたし達が引きついだわけ。

**田中** 辞めたいつて、その社長が？

**和田** そう、だつて借金しないと回らないからね、こういう商売つて。もう六十歳過ぎてるし、辞めたいつて言われて私が代わつたんですね。

### 自分たちで立てた経営方針

**和田** 私は営業だったんだけど、企画で型

紙をおこす人、ボタンナーの女の子が一人いて、一緒にやろうよって誘ったの。それでお金を半々出して、共同経営者になって引きついだのね。

で、引きついだときに二人で話し合ったのは、とにかくデザインーはなしにしよう、編集で行こうと。

売れるってというのは、頭を使ってやれることもあるのね。センスの問題とはまたちよつと別で。前の経営の歴史があるんだから、それに則ってあたし達が編集をして、頭を使って商売をしようっていうのが、彼女と私の方針だったわけ。

当時、ファッションの流れってというのは、また大きな変化を見せていて、例えばパリモードとかイタリーのモードとか、それぞれが確立したモードだったんだけど、そういうのがごちゃごちゃになっている時代に突入していた。もう四、五年前からあったんだけど、グッチがどこそこを買われたんだとか、大きなブランドごとの競争みたいなのがあって、吸収合併っていうことほとんどなくなっているってしめた。

それから、情報伝達がものすごく早くな

った。パソコンがあつて、インターネットがあつて。

年に一回、映画のオスカー賞っていうのには選ばれた女優が、何を着てくるのかっていうこと、みんなすごい楽しみにしてるんですってね。それ、アメリカのインターネッットだとテレビで見られる。テレビをつけて、何とかって女優が出てきて、ピンクのドレスを着ているでしょう。その横にね。デザイン画がのっているんだって。その下に会社の名前があつて「これと同じデザイン」のドレス、うちなら百ドルでやります！」っていう広告が瞬時に出る。

**田中** へーっ。

**和田** それくらい情報が早くなってきたわけ。

そうすると、服もね、情報ですべてが決まるようになってくるわけ。私も二十代には女性誌で服のファッション見てたけど、必ずしもその服を買わなくてもいい時代だった。今はね、はやりの服っていうのはきちつとあつて、よくよく見ていると、その情報どおりにみんな着ているんですよ。

**田中** えーっ、そうですか。

**和田** ええ。例えばね、今年の夏でいえば、女の子がみんなプリントのスカートをひざ丈ではいているの、見なかった？ それで、ミュールっていうつまかけをはいて、上はジーンズのジャケツト。これを一番最初にやったのはグッチで、前の前の年の夏に発表したら、またたく間に世界中、みんなあの格好になった。

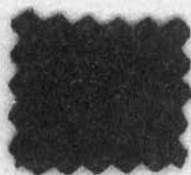
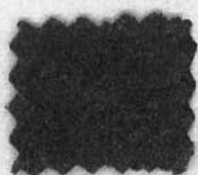
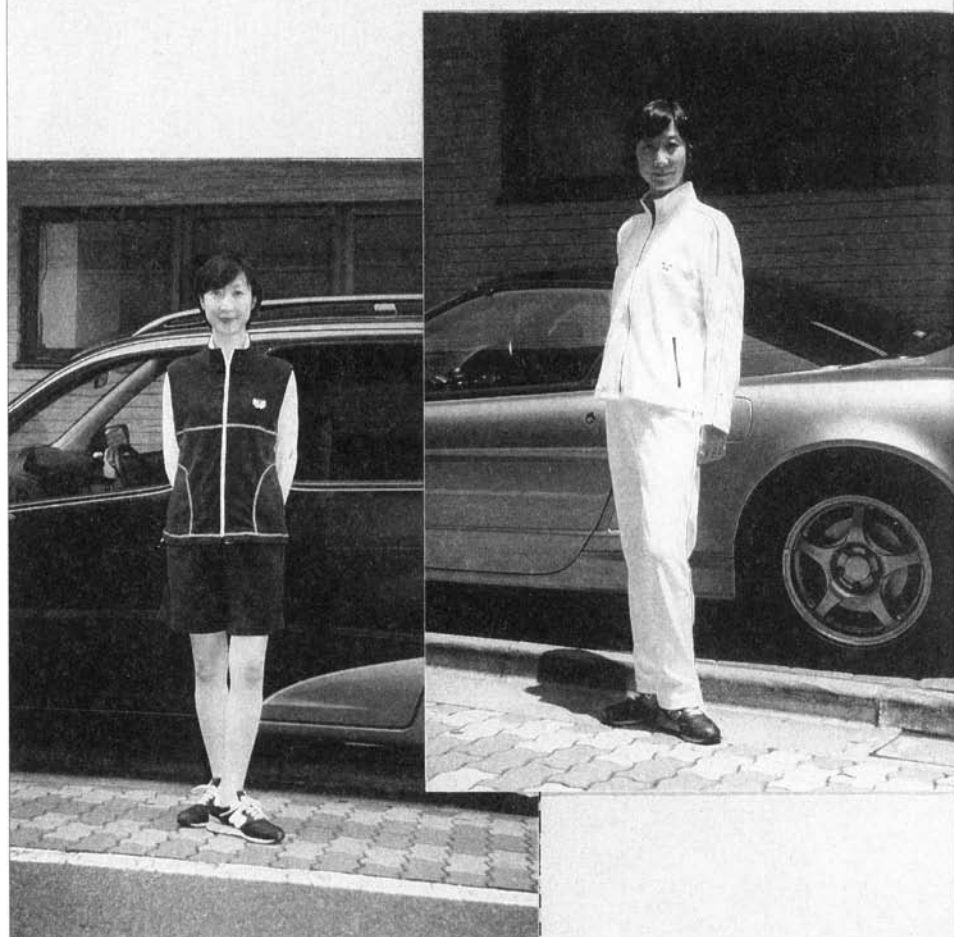
私はファッションの講習会を受けているんだけど、二、三か月前かな。上がジーンズのジャケツトで、下がプリントのスカート、中は普通のTシャツっていうので、一人のモデルが四つのパターンで着ているのね。一番左はアルマーニで買うと、一万五千円、M&Aって今向こうですごく流行っているところがあるんだけど、そこで買うと、八千九百円とかがつて。全部同じスタイル。

情報が早いってことは、そのスタイルをどれだけ安く売るかということでは勝負負けが決まる。こういう世界に、ファッションは突入しているわけですよ。

それをするかしらないかは、うちみたいにちっちゃいところはまた別なんだけれど

# ★ ピーチスルス

インタビュー  
アパレル業界の実態



商品見本 モデルも自分でつとめます

も、それを知らずにはやっていけないわけ。知らずには、全疾駒を進めることができない。そういうふうになってしまっているわけですよ。

もうひとつは、あんまり百貨店でお洋服買わないでしよう？

田中 買わない。

和田 ここ最近、百貨店でもうかつているのはブランドだけなわけ、グッチだとか、フェンディだとか。ああいうところは大にざわいだけど、国産のアパレルはみんな青色汗息で全燃うまくいつてない。

今、ユニクロっていうのがはやっていて、今着たい服を、一番安い価格で売る。ベーシックっていうのが基本なわけね。もうみんな持つてますよ。そういうものがあるから、ますますイトーヨーカドーとか、ダイエーとかの衣料品部が総倒れ。要するに普段の服なんだけれども。

そうすると、うちなんかはカットソーってTシャツ素材だから、ユニクロみたいなものとは違うもの作っていかないと、値段的には全滅荒れていかない。これは（と商品を手にして）八千九百円するけど、見た

目同じようなのを九百円くらいで売っている。

情報が、常に頭の中に入っていないと、へたすると行く道を間違えて、倒れてしまう。だから新聞を読んだり、そういう講習会を受けたり、いつもファッションの情報大きな流れっていうのを知っていないと、危険なのね。それが前の人たちがやっていた時代とは、大きく違うところなんですよ。

田中 ほんとだ。大変だ。

和田 例えば、うちの母（和田副編集長）みたいな人がいるでしょう。ああいう人ってユニクロが似合わないわけ、おばあさんだからね。着ると食べみたいになっちゃうから。要するに、年寄りにはユニクロは似合わないの。

でも、うちの母はお金ないんだけども、たとえあつたとしても、フェンディとかグッチとかで物を買うつていうと、そんなの絶対買わないわけ。やっぱり国産の自分の体形にある程度合つた、品質のいいしっかりとした縫製のものを買うのよね。スーパールの服でいいよつていうようなわけにも

いかないでしょう、母くらいの年になると。田中 そうだ。年とつたらね、あんまり安物着たらダメよ。

和田 そうでしよう。それでね、年とつて安物着ているおばあさんもいるんだけど、例えば七十年代で、夫婦で世界にクルージング旅行に行くとか、スポーツを始めたりとかつて人たちは、お金はあるからユニクロは買わない。そういう人たちに「こちはきれいいに見えますよ」つて、実際にユニクロよりはきれいいに見えるパターンを引き、国産の縫製で美しく見えるようなラインの生地を選んで作つてあげれば、それなりの値段でも買うと。

逆に、私くらいの歳、三十代の後半くらいだと、まだ体形もそんなに崩れていないし、子どもが小さくつて、だんなはリストラにあつたりして、生活が苦しくて大変だから、あんまり洋服にお金は使えない。

田中 そうでしようね。

和田 特別な人以外はね。だから、いろんな人がいるけど、うちとしては四十代以上の人がターゲット。

## 企業のポリシー

**田中** やっぱり生き残っていかなくちゃね。

**和田** 私、最近思うんだけど、企業っていうのは生き残っていかなきゃいけないとして、じゃあ、何のためにその企業があるのかって、すごく大切なことだと思うんですよ。洋服屋さんっていうのは、自分の好きなものを作って、お客さんが喜んでくれて、という意味では、比較的クリアなだけ。

誠実にものを作っているとか、それを着てお客さんが本当に喜んで過ごしやすい日々を送っているとか、そういうことってとても大切でしょう。うちの会社は、そういうところで服を作ってきているから、パートナーの彼女も、そこは手離したくない。だから、うちの服は洗濯機で洗えて、伸び縮みする。ブラウスやスーツのような重衣料じゃなくって、普段の、日々使う洋服で、何となく着ていて楽で、生地もよくって、格好もよく見えて長持ちする。そう

いうものをやっていくって決めているから、そこからは絶対に出ない。

カットソーの世界だけで、とにかく食べっていく。そこから出ていっちゃいけない。それが私たちのやり方っていうか、ポリシーっていうものかな。

ちっちゃい会社だから、まず手元に残っているお金を見て、次の仕入はこのぐらいの仕入にしようって決める。残っている在庫と相談して、これぐらい作らないと商売回っていかない、どこかで借入れをしようとか。月に引き出せるお金はこれだけだから、例えば二月にたくさん仕入れたらお金が足りなくなるから、ぎりぎり三月に仕入れようとか、そういう仕入の計画をまず立てて、それに併せて生地を選ぶ。すごいセコイことをうちはしているの（笑）。

**田中** 堅いな。

**和田** でも最近少し甘くなっているから、先に生地を選んできてほしいの。アウトラインができた時点で、お金の計算をもう一回して、ダメだ、これは止めようとかって。

**田中** やっぱり堅いなあ。でもこれだけ売

れるだろうと思つて作って、お店に出したらいっとうに売れなくて返品、なんていうのももちろんあるわけでしょう。

**和田** もちろん、あります。

**田中** そういう返品はどうしちゃうの？

**和田** たたき売るしかないのよね、やっぱり。

うちは一年に二回セールを企画するんですね。春・夏と、秋・冬と。秋・冬が終った時点で、だいたいどれぐらい出ているのかって各品番ごとにデータ管理をしているのね。要するにトータルしてどのぐらいの利益があるかってことが大切であつて、もちろん返品が帰ってくるってつらいんだけど、商売っていうのはすべてがプラスになるってことはないわけ。

**田中** そうでしょうね。

**和田** だから、トータルして利益が出て、私たちが食べればいいわけだから、そうなるための努力を、日々怠らない。

うちはとにかくちっちゃいから、ゲリラ的に最初はうんと少量作って、様子を見ながら追加をしていく。例えば半期で仕入に一千五百万くらい使おう、と決めると、七

## 気になる収入

百万か、八百万、約半分でスタートするの。スタートしてみても、それで売れたら追加って、そういうやり方をするわけ。そういうふうにして、最後一千五百万を越さないように、例えば一千五百万って決めたらそういうふうにやるわけですよ。

失敗するものもあるんだけど、前の経営者の最後のほうの利益に比べれば、今はもう、上等の利益。

**田中** ああ、それはいいなあ。

**和田** うちは社会保険も入っているし、きちっと整備してある。それはやっぱり前の経営者が、お金がある時にどんどん社員を入れて、人に投資したのね。会社としてある程度の地位を確立していたわけ。だから生地屋とのつきあいとか、縫製工場とのつきあいとか、全部きちっとしていた。

**田中** なかなかいいところはあったのね。

**和田** そうなの。パソコンを使ってデータ処理をするなんてことは私が始めたけれども、指示書の書き方とかきちっとしたものは、普通のアパレルと変わりないこととして。適当なところが全然ないわけ。

**田中** あなたは今経営者になっているわけだけれども、その前は勤めていたわけよね。お店の経営者になったのと、勤めているときと、どっちが最終的に収入は多い？

**和田** それは勤めていたほうが多いです。現状ではそうですね。気も楽ですね。

**田中** やっぱり。

最近、起業々々ってよくいわれるけど、二十年ぐらいますも、女の人が仕事を始めてもてはやされた時期があったのね。喫茶店とかちっちゃなお店始めてね。私たちが素材したり、本も書いた。ところが、サラリーを聞いてみると、すごい細かいわけ。やっぱり今でもそこところはそうなのかなあ。

**和田** でもね、私は子どもがいらないけど、相棒は子どもが二人いるのね。もし、夫の庇護から出て一人で暮らして生きていきなさいって言ったら、二人とも生きていけるお金は取ってますよ。年間三百万ぐらいは二人とも取っている。

引きつぐ時に利益計算をしたのね。前の

経営者は自分のお金をどんどんいれてやっていたんだけど、私たちは一文無しで借り入れだけでやるわけだから、回っていくようにするために、もうすごいケチケチ大作戦。バリエーションもそんなにないし、必然的に商売も小さくなっていくでしょうと。私たちいくら給料取れるのかしらって、利益計算したら、じゃ二人でこれだけでやって、まあ五年だねって。五年我慢したら何とかなるかも知れない。

今年経って、二人とも貯金残高ゼロになっちゃって税理士に相談したら、資本金は私たちが入れたから、それを返してもらう形にしなさいって言われた。月々五万円ずつ、とにかく現金を手にとって、そのうち給料が上がるようになったら、給料にしたらいいって、そういう感じをやってる。買ってるお客さんは、得してると思うよ。だって従業員の給料は安いし、縫製もしつかりしているし。そういうことは次につながっていくわけだから、五年は我慢。そのうちよくなったら、真っ先にもらおうねって。

(写真提供・有アスカ企画)

## 私の意見・

## あなたの意見

## 昔の人

東京都世田谷区 後藤 晶

石原慎太郎にも青島幸男にも私は投票しなかった。

田中康夫ならオッケーかも。

石原慎太郎は、珍しいほど想像力が乏しい人だ。身体障害者の施設を見学したときの、「人格はあるのか」発言。「第三国人」、「騒擾事件」、「お前らバ

カカ」など、とても現代人とは思えないような表現を人前でして平気である。今まで誰にも注意してもらえなかったのか、かわいそうな人である。

一流の教育を受け、文学者としても評価されているのに、この程度の表現力とは、あまり好みの主題ではないので、小説を読む気はないが、「弟」にせよ、「太陽の季節」にせよ、「男」を常に意識しているらしい表現が目につく、ということを経験で読んだ記憶がある。人生の基準が、多分それ（男）なのでしょう。

子どもを育てた後、やっと自分の教育を受けに大学に入ったと言う夫人。本人は満足そうだったが、私にはアンビリーバル。だけど家庭でならいくらボスが独裁でもいいかもしれないけど、知事には困るよ。

社会の荒波にあっても、あくまでも自己を貫き通して、それでもやってこられた人なんだな。反省とか考えを変えるとか、自分の努力だけではどうにもならないこともあるとか、そういう

経験しなくても、やってこられたんだね。

ほんとに驚いた。自分の子どもが生まれるときとか、自分自身の周囲の人について、障害や病気のことはほんとにまったく考えたことなかったんだろうか。「人格」発言のときまで、いっさい気がつかなかったんだらうか。

石原慎太郎の人格を私は哀れむ。

今になって思えば、青島幸男はよかった。少なくとも、もっと言葉がまともだった。人生の勝者であるかのように権力を振り回さなかった。



昔なら、これでも通用したかもしれない。だけど現代ではこんな人の言うことは聞かない。戦前くらいのリーダーシップのとり方だ。

田中康夫はその点、近代的。言うだけじゃなく行動もするから。

市民には意思があるって言うこと。お上の言うとおりにはない。納得できなきゃ黙っていない。

## 経済的自立に迷う

東京都練馬区 井上曉子（41歳）

この半年余り、私は迷っていた。

P.T.Aや生協の活動にのめり込み、外にばかり目の向いていた母と暮らしてきた私は、中学生のころから、結婚したら専業主婦になって、毎日を大切に暮らしたいと考えていた。母も専業主婦ではあったのだが、生協の理事をしていた時など、父よりも忙しいほどだった。

すぐに長女をみごもったこともあり、結婚とは同時に専業主婦になった。家事は楽しく、主婦は天職だと思えた。しかし、結婚十年目を迎える今年、その気持ちはぐらつき、自信を失いかけていた。

まず第一に、とにかくお金がない。現在私は、週に五日から六日、毎日二〜三時間アルバイトをして、自分のお小遣いと『家計の足し』程度の収入を得ているが、家事など適当にすませて、もっとたくさん働けば、暮らしはずっと楽になるのでは、という迷い。

第二に、夫だけに経済的な負担を背負わせるのは、フェアではないのでは、と思い出したこと。

そもそも、こうやって迷い出したのは、夫の転職がきっかけだった。少しの間は失業もしていた。新しい仕事が決まるまで、その仕事で軌道にのるまで、夫はたいへんなプレッシャーを感じたことだろう。その重たい荷物を私も半分持つべきなのでは、と思い始めたのだ。

第三に、そんなふうに失業したりする夫を、少なからず不安に思ったこと。経済的に夫一人を頼っているのはアブナイのでは……。

そして、一番大きな迷いの原因は、結婚十年目にして、夫婦の仲がぎくしゃくし出したことだ。遠からず、夫と離れて生活することになるかもしれない。そのために、経済的に自立しなくては……。だいたい、夫に「養ってもらって」いては言いたいとも言えないではないか。

そんな時、二八七号の林夏子さんの投稿、「再就職について考える」を読んだ。吉成真由美さんが、主婦業も立派な仕事であると言い切っているとあり、すぐさま書店に、その「やわらかい脳の作り方」を注文し、届くや否や、とびつくように読み始めた。

（ただ、林さん、あなたが引用された、『家庭の中で、夫、妻、子供全部が一度に輝くことは不可能だ。このなかで二者までは一流の仕事をし輝けるけれど、三者全部が成功した例を見たこと

が無い」という要旨の文章はこの本の中には見つかりませんでした。署名も、『やわらかい脳の――』ではなく、『やわらかな――』でした。

経済的に自立する、つまりフルタイムで働こうと思っても、やはり九歳と六歳の娘のことを考えると踏み出せない。朝は娘たちを送り出し、帰るまでには家を心地良く整え、「お帰り」と迎えてやりたい。夕暮れ時、鍵を開けて家に入り、とり散らかった殺伐とした部屋で母の帰りを待つ、あの侘びしさは娘たちには味わわせたくないのだ。

吉成さんは、それは、太古の昔から集落にあって子供を育てることを主な仕事としていた女の本能で、本能に抗えば、自ずと幸せは遠のいてしまうと言う。

さらに、主婦の仕事は、健康、経済、教育、庶務を管理するものであり、アーティストの才も必要。これら一切を処理する過程で、日常引き受けている人間関係の数だけでも百人は下らな

い。「情報の入手処理能力並びに、事故等の危機対応能力は必須。自己の時間管理だけでも刻みになります。今時、社会性のない主婦、昼寝のできる主婦なんぞ、存在しないのではあるまいか」と書いている。

とても勇気づけられた。かねがね、私が気を抜けば、家はホコリにまみれ、食生活は貧しくなり、そのために家族は焦立ち、また、お財布からお金がどんどん出て行くし、主婦の仕事には絶え間のない緊張感が必要だと思っていた。吉成さんのような優秀な方が、主婦業をこのように高く評価してくれたことで、「養ってもらっている」と自信をなくしていた気持ちを、建て直すことができた。

ただ、夫との関係が変わったわけではないし、いずれ、娘たちの帰りを迎えてやる必要もなくなるだろう。経済的な自立への模索は続くわけだが、『主婦』という立場に誇りを持つていようと思った。

(え・イシノフミ)

# ★わいふバックナンバー

(特集テーマ)

- |      |                    |
|------|--------------------|
| 263号 | わが家の親子ゲンカ          |
| 264号 | ふるさとの伝統行事          |
| 265号 | 私の初体験              |
| 269号 | 再就職で得た仕事・得られなかった仕事 |
| 272号 | カウンスリング体験          |
| 273号 | 子どもとテレビ            |
| 274号 | 引越越し騒動             |
| 275号 | 料理と私               |
| 277号 | 不妊治療・私の場合          |
| 278号 | 「おけいこごと」との格闘       |
| 279号 | あなたの夫は何番目の男?       |
| 281号 | 思い出の地・再訪           |
| 283号 | 私の読書歴              |
| 285号 | 美容と私               |
| 286号 | 私の健康法              |

自分にあった高校入りの決定版 私立高校ガイド  
ハイスクールレポート (関東版)

2001年度版

2000円+税

シリーズ最後の巻らし

お年寄りが安全に暮らすために

1500円

変わる主婦・変わらない主婦

1500円

お申し込みは03-3360-4771



## クマ笹に引かれて

神奈川県大和市 浅田節子（68歳）

今——部屋中に淡いやさしい香りが漂っている。五日位陰干しにしたクマ笹の葉をハサミできざみ、フライ鍋でからいりした香りである。

そのきざんだ葉を煎じた液や葉をお茶出したものに、殺菌力があり風邪（うがいも良し）、疲労回復、高血圧、

口内炎、口臭、細胞膜安定により免疫強化でガン予防、老化改善、更年期障害等によいと分かりビックリ！「みのもんだ」の「なるほどなっとく」のコーナー係の知人から「浅田さんのお庭にクマ笹ないかしら？」と電話を受けてテレビ出演となった。

テレビの画面に我が家の裏のクマ笹が写って、私がそれを切り取っていたので、あらゆる人から私もほしい——と頼まれ急に忙しくなった（説明も大変！）。

今までクマ笹のスゴサを知らなかったのだ。研究したくなり、テレビではお茶と同じ要領でキユースにお湯を入れた十五分おいて飲むところを放映されたが、私は名案を思いついた。

それは今は亡き作家の宇野千代さまが、お茶の葉をいって飲むといいですよ——とおっしゃっていたのを思い出したからである。

そうだ……クマ笹茶もからいりしてそれを煎じてみようと、すぐ実行してみた。

干したクマ笹をきざみ、フライ鍋で三分か四分割りばしで混ぜながら、からいりすると香りが出てくる。それを煎じた液はきざめも増して体によいような気がする。高価なものと聞いているので二度煎じている。

何でも実行してみたい私は、クマ笹の香りがどうも精神を安定させるような気がして、茶ガラを皿に広げて、夜枕元に置いてみた。すると、ほんのりと香ってくる中で心地よいネムりに落ち入るのが分かった。が……まだ実験中である。

クマ笹は薬局やお茶屋さんに置いてあるところもあるらしいが、やはり高価とのこと。

北海道に行った知人がおみやげ屋さんで「クマ笹茶パック入り」を求めたがやはり高いと言っていた。

だからこそ、あの手この手でうまく利用してみたい。殺菌力があり消臭の代用もするそれで、生ゴミに茶ガラをふりかけておくとよいそうだ。お風呂に入れてもよいとか？ ガーゼの

袋を作り、クマ笹茶の茶ガラをお風呂に入れてみようか知ら？と夢は広がってゆく。まるでクマ笹博士にでもなった気分！

あら——また電話でクマ笹がほしい



とのこと。でも、知人や娘や妹に送ってしまい、葉を少し残しておかないと枯れてしまうので、我が家のはストツプとなった。

こうなったらクマ笹を求める「旅」に出て何とかめぐり会いたいものである。

## 英会話

東京都日野市 十河温子（47歳）

近所の友人から、英会話のクラスに欠員ができたので一緒に習いませんか、と誘いを受けた。二年前のことである。

私の英語能力は、とても英文科を卒業しましたと大きな声で言えないくらいお粗末なもので、ましてや話す方はペラペラではなく、ペラとしか話せない。

それもいつかは話せるようになりたいと思っていたので、これは絶好のチャンスだった。隔週一回九〇分、謝礼

は七五〇〇円。四人の人数で割る。当初は六人だったのだが、初回で二人ギブアップしたため割高となってしまうた。

場所は自宅から道路一本隔てた隣の集会所で、通学時間は三〇秒。市の施設なので場所代は無料。メンバーは同年輩の女性ばかり。内二人は義理の姉妹で、皆気心が知れていて緊張することはない。仕事を持っている人もいるので、クラスは夜六時四五分からで私としては出にくい時間帯である。

夫が帰宅後直ぐに食事ができるよう食卓を整え、一〇歳になってもまだ留守番を怖がる息子に給仕を頼み、すっ飛んでいく。大声で叫べば聞こえるところにいるのだが、食事時に家を空けるのは結構大変だ。

ティチャーは現在コロンビア大学大学院に在籍し、いくつかの大学で講師をしているアメリカ人の男性。専攻は英語の何とか、いつも話してくれるのだがよく分からない。彼の将来の目標は国立大学の助教授になること。日本



のひなびた田舎の雰囲気が好きで、特に五右衛門風呂にこだわる。現在も窓枠は木製、鍵はねじ式といった、築四〇年以上の平屋を修理して住んでいる。四〇歳までに結婚をしたいと言っていたとおり、二年を残して二〇〇〇

年の夏、めでたく青森県出身の彼女と結婚した。趣味でやっている音楽バンドで知り合ったという。今は幸せの絶頂だ。

彼は明るくウィットに富みかつ優しく、こちらがとつとつと話すのを辛抱

強く待ってくれる。つくづくいい教師に巡り会ったと思っている。

一応テキストは二冊あるのだが、それに入る前に毎回、各自が何か新しい体験を発表することになっている。もちろん英語で。

これはかなり難しい。旅行に行ったりとか、家族で食事に出かけたとか、題材は何でもいいのだが、英語で言える範囲のことではなくてはいけない。

その内容を私はいつも家事をしながらとか、車の運転をしながら考えるこ

とが多い。勢い、料理は失敗するし、品数も減るし、外では思わず赤信号で交差点を横切ろうとするし、危なくて仕方がない。いつも上の空でいるようだ。

きちんと発表できるように分からない単語を調べては行くのだが、予期しない質問をされると、思いついた日本語が訳せず、しどろもどろになってしまう。毎回それがつくり落ち込んで家に帰るという有様だ。

二、三か月も留学をすれば直ぐに話せるようになるものを、日本にいてはなかなか上達しない。英語に浸る時間が少ないから当たり前のことだが、つまりは努力が足りないということになるのだろう。

何とかならないかと、分からない単語があると直ぐに辞書を引くようになった。語学は単語力がものをいう。その点電子辞書は威力を発揮する。

引いても引いても忘れてしまうのだが、忘れることを嘆いてはいいつになっても身に付かない。とにかく英語

に接する時間を増やすのが一番。そんな姿を見て夫が、

「勉強しているのか？ 偉いなア。でも今頃から英語の勉強してどうすんのや？」

そんなこと言われると、辞書を引いていた手が止まってしまふ。そうだ私はどうして勉強しているのだろう？とふと考え込んでしまつた。

そういえばただ話せるようになりたというだけで、私には目標などなかったのだ。もちろん翻訳者や、通訳になればいいのだが、自分にはそんな能力がないことぐらいいく分かっている。この年になって、「少年よ、大志を抱け」とは思えない。それに高すぎる目標は達成感がなく、返ってやる気がなくなってしまうだろう。

それよりも、英語を習おうとしなかったら出会えなかったアメリカ人のティチャーと話をしたり、頼まれたホームステイを受け容れて、異文化に触れる醍醐味を味わえることに喜びを見出したい。

ある雑誌に「七十五歳になっても英語を習う私は変なおばあちゃん」と書いていた人がいたが、私はその年になるまでまだ二十五年以上もある。これからはずっと習い続けて、英語をペラペラ話す変なおばあちゃんになりたい。

## 宝物

奈良県生駒郡 高松恭子（48歳）

十年前のことだった。ビジネススクールの席に座った男性が持っていた白紙の本が目についた。シックなワインカラーの布張りの表紙に興味をそそられ思わず尋ねた。

「それは無地の本ですか？」

「これ？ メモ帳ですよ、自分で作つたんです」

差し出された本を手にとった私は、「へえー！」と、感嘆の声を上げてしまった。

どう見ても上等の本といった本格的な作りで、世の中には何と器用な人が

いるものだと感心したのを覚えてい

る。ちょうどいいふに投稿を始めたところだった。自分の書いたものが活字になるのは嬉しかった。それをまとめてこんな表紙をつけたらどんなにすてきだろう。私は次の講座まで一週間、そればかり考えて過ごした。

あの技術をマスターしたい。翌週、待ちかねるようにしてスクールに向向いた私は、その人を探し隣に座った。

「製本の技術はどこで習われました？ 私も覚えたいんです」

「独学ですよ、何度も失敗してね。定年になったら教えて上げましょう。約束します」

その定年が今年の春だった。この十年、私は欠かさず年賀状はもちろんのこと四季折々の便りや旅の便りを彼に書き続けた。

六月、十年ぶりに再会し、いよいよ念願の製本技術を学ぶことになった。まずはこの十年間、わいふに投稿したもので没も含めて自分の気に入つたも

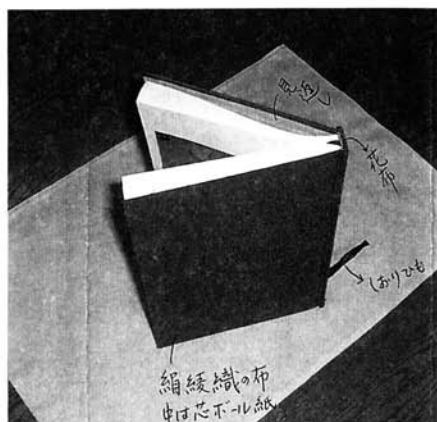
のを取り出し書式を揃えてプリントした。

用意するものは本の中身、表紙の芯ボール紙、装幀布、花布、しおり紐、見返し用色画用紙、ボンド、絞め板、万力、目打ち、針、糸、正確なものなどである。材料の大半は図書館用品専門の店で揃えた。

中身は片面印刷を真ん中で折って輪にして閉じた。全部で六十枚、ページにして百二十頁を十枚ずつのパーツに分け中綴じをする。この作業がもっとも大変だった。同じ位置に目打ちで穴をあけているのに、全部をまとめると針がすつと通らないのだ。やつと綴じたらゆるんで中綴じが見えている。そのうち表面の紙がよれよれになってきて思うようにいかない。何でこんなことを始めたんだろうと情けなくなってきた。

大型のホットキスでガチャンとやりたいところだが、ホットキスは時間がたつと錆びて針が折れ、本がバラバラになることがあるらしい。気を取り直

して再び挑戦、四苦八苦しながらようやく丸二日間の指導で自作の本が完成した。この世にたった一冊の本は、不格好ながら、製本過程の苦勞を吹き飛ばしてくれた。



二作目は失敗を踏まえて作ったので見違えるようにうまくいった。こうなるとのめり込むたちで、料理好きの姉がデジカメで写した写真をまとめて

理本を作った。オールカラーの本は自分でも惚れ惚れするできばえだった。

これを見た友人が、初孫の写真集を作るといので手伝いながら教えてあげた。丸四日もつぶれたが大きな収穫があった。彼女は電気ドリルを持っていたのだ。最も大変な穴あけ作業が電気ドリルを使うとビューンと一発であいた。ひと穴あくごとに、「うあー!」と歓声をあげながら、夢中で作った。友人は、これだけのためにでも生きていた価値があったと思われるほど喜んでくれた。

この勢いで、わいふに連載していただいた旅行記なども本にしてみようと思っている。人のものも含めてすでに八冊作ったが、完成のときは未だに言葉に言い表せないほど興奮する。表紙をつけたあと、一日重い辞書をのせて形を整えるのだが、これが待ち切れず、何度もそつと重石をはずして見てしまう。夜中に起き出して見たこともあった。

今、自費出版が大はやりだそうだ。

「市価よりは確実にお安いです」と、わいふにも出ている。しかし、自分で作ると、もっと立派なのをもっと安く、何よりも楽しくできる。

この技術を覚えてくれた手を見つめていると、かけがえのない宝物をまたひとつ心の引き出しにしまい込んだように嬉しくなる。(写真提供筆者)

## イギリスの豊かさ

埼玉県大宮市 笠原静枝（58歳）

私は四十歳を過ぎてから何かまとまったことがしたくて、いろいろ考えた末思いついたのがホームステイである。幸いその頃学校教師をしていたので長い休みが取りやすかった。公務を調整して、イギリスに四週間滞在する決心をした。四十二歳の夏休みのことである。

ホームステイ先はロンドンから特急列車で一時間の位置にある。ブライトンという保養地として有名な所で、日

本では鎌倉に相当する海に面した町である。

イギリスのホームステイは英語学校に通うことが条件になっている。土・日はもちろん休みだ。私はこの日を大いに活用した。

ある土曜の午後ブライトンの町を見物した。余り大きくない公園ではクラシックのコンサートをやっていた。

「え、こんな所でコンサートを」

と驚きと同時に、人々の生活の中に音楽が根づいているようであらやましかった。

演奏している広場は特別に柵がなく誰でも自由に入れてしまう。皆な気軽な姿勢で聴いている。芝生に座っている人あり。椅子に座っている人あり。足を投げ出している人もいる。

辺りを見回してもチケット売り場が見あたらない。どうしたら仲間に入ってもらえるか分からなかった。せっかくだから聴いていきたい。ずうずうしくも芝生に座りこんだ。何か言われたらチケット代を払えばいいのだ。人の

視線を気にしながら演奏を聴き始めた。

しかし誰にも咎められなかった。そうしている内にやっと分かった。椅子に座ったら一ポンド、芝生ならタダ。これはすごい。日本だったらあり得ない。イギリス人はおう揚だ。いい音楽にすっかり気分も良くし、なんだか得をした気になった。これぞイギリスの豊かさなのだと感激した。

月々の生活に少し慣れてきて、ロンドンの芸術にも触れてみたいと思い、チケット購入のことを考えた。これらの情報は大衆紙の隅に載っている。そこで図書館で調べてみることを思いついた。我が家の近くにある図書館なら歩いて行ける。が入館出来るかどうかは分からない。一応パスポートを持って行った。入口に立って奥の方をじろじろと見ていると、周りの人が、「入っていいんだよ」「どうぞ」「本を借りていいんだよ」と言っているような気がした。なにしろ少し込み入った英語は聞き取れない私である。

いつまで覗いていてもしょうがない。「サンキュー」と言って思い切って入った。大丈夫そうだ。お目当ての新聞がちゃんとあった。これでわざわざ駅に買いに行かなくてもいいのだ。新聞を広げ人々に交ざっていると、この国に住んでいるという実感が湧いてきた。そして私まで受け入れてくれるこの国の制度が有難かった。この国に来て良かった。素直にそう思えた。移民の多いこの国は、外国人に対して寛容でサービスも良い。これも本当の豊かさの表われだと思った。

イギリスは、ヨーロッパの音楽の中心地だと聞いたことがある。私は滞在中、費用の許す限り芸術に触れてみようと思い、バレエ、コンサート、ミュージカルと貪欲に出かけた。ロンドンのロイヤルアルバートホールコンサートには、何回か行った。チケットは一ポンド（二三〇円位）の立ち見席から四千円位までで、日本の半額で買える。多分政府から多額の援助が出ているのであろう。一流のアーティストからかけ出しの若手まで、出演者はバラエティーに富んでいる。



ある時若手の指揮者のコンサートに行った。驚くことに満席なのである。日本だったらこういうことはまずない。有名な演奏家でないとなかなか大勢の観客を動員出来ないのである。

演奏終了後盛大な拍手が起こった。私は胸が熱くなり、人々の温かい心に感動した。若手を育てようという気持ちを感じられたのである。さすがイギリスだ。芸術を大事にする人々の心が、私を豊かな気分にさせてくれた。

イギリスでの四週間の体験では、この国のいろいろな面を見た。若者の勤労意欲の低下、失業者の増大、経済の失速。欠点は多々ある。

しかし、目に見えないものにお金をかける豊かさ、他を排除しない心の広さと優しさ、住んで良かったといえる制度など、日本が手本にしたいことが多い。これが本当の豊かさなのだと思う。日本もここらで、物から心へと転換を迫られているのではないだろうか。

# ステロイド漬けの日々と骨粗鬆症

芹沢茂登子著



芹沢茂登子著

法研

本体1400円+税

みだしたら最後、巻をおくことのできない迫力にみちている。

著者は一九九二年六十二歳のとき、ネフローゼ症候群で入院する。この病気の治療はステロイドの大量投与を必要とするが、同時にそれは、骨粗鬆症を促進するという副作用を生む。病気は一応の回復をみるが、それから四年たつて病状が悪化、第二の入院を余儀なくされたときから、病魔はかたちを変えてつぎつぎと襲いかかる。

突発性の難聴からはじまって、繰り返す発熱と筋肉の痛み、さらにヘルペスなどで入院を繰り返すうちに、著者はついにあれほどおそれていた骨粗鬆症に襲われ、背骨が無残に変形してしまう。

何の薬を何のために飲み、その結

果がどうなるか、医者との対話や看護婦のケアのあり方が克明につづられている、ふつうなら読むに堪えないほどのしんどさを満載したこの作品が、最後のページまで読者を引き込んでいく力をもっているのは、何よりも強烈な意思をもって「生きよう」とする人間の姿が私たちに与える感動によるのであらう。著者の意思の強さはほとんど「不屈」ともいえる。

しかし病はついにその「不屈」さにくじいてしまう。最後に近く、かつて涙を見せたことのない著者は夫の前で泣き崩れ、その後二度と氣力をとりもどすことなく沈黙のうちに世を去る。著者が命をかけて書きつづったこの記録は、悲しみとともに忘れられない力に満ちた作品である。

東京都新宿区

田中喜美子

「目一杯働き、社会活動をしてきた人間が寝たきりになり、人の助けを借りなければならぬ状態になったとき、人はどんな思いをいだくのだろう」

この本のまえがきともいうべき文のなかで、著者はこう語っている。

普通人の到底語り得ないその「思い」を、強烈な意思の力で最後の瞬間まで書きつづったこの記録は、読

# 嫌疑

野村治子

## 罵倒

三日間にわたった葬式がようやく終わった。間に友引などをはさまない限り、普通は二日ですませる。身内の疲労が激しいからだ。しかし千代子は、中に一日入れて、三日でしよう主張した。

何ひとつ逆らわない務。治子は、おそらく考えるところがあつてのことだろうと思つていた。だが、ただ単に務の心身耗弱状態に過ぎないのかも知れなかつた。務は動転の極みの中で、ようやく終わったというほろほろの姿だつた。治子はただ娘の香と息子の健が知

らないことだけを感謝した。だが千代子は、あの日、健に事実を伝えていた。

それは後になつて千代子の夫が、治子の驚愕を楽しみながら、得意げに語つたことだつた。

葬式のあと、健は自室にこもつていた。千代子の言葉を反すうしていたのだろう。

肉親に起こつた普通でない死に、健ははげしく動揺していた。ベッドに寝ころんだまま、暗く落ち込んでいた。

千代子は、自分の家が世間の人から、特別な目でみられるのが、辛抱でなかつた。

弟の服毒未遂だけでなく、十年ばかり前、トメの実

家でトメの兄の息子が投身自殺していた。なんとなく鬱状態が続いていて、妻子が話しかけても物を言わない。ある日いなくなった。近所の人が総出で探したが、見つからない。父親がずっと探し続けた。一か月後に、川下で浮いているのが発見された。

千代子は、今度のトメの死は決してそんな神経症からきたものではない。ただひとえに治子へのいじめが

原因だったのだと、健にも、世間にも告げたかった。

あの日、治子が肝も潰れるおもいで、「わたしがわらかったのか」となげやりに呟いたとき、千代子が、絞り出すように洩らした言葉。「わたしがわるいんじゃない。わたしが怒るばかりで、ひとつも話を聞いてやろうとせなんだから。わたしのせいじゃ、わたしのせいじゃ」千代子もこのときは、これが本心だったのだろう。



夜に、治子があと片づけに動き回っていたとき、食器をとりに来た料理屋の奥さんとちよつと話した。その人の甥が、健の中学時代の友だちだったので、それを二人は話題にしていた。すると健が階段をかけ降りてきた。

「なにを言うんならつ。いらんことを言うなつ」

二人はおどろき、料理屋はそそくさと帰つていった。健は治子を部屋に呼びつけた。

「てめえは、なんでそれほど、やさしさがいいんならつ」

「やさしさと、あの人の話と、なんの関係があるの」

「てめえには、人間のやさしさがいいんじゃない」

「どうして」

「やさしうないんじゃない、てめえはつ」

健はただそれだけを言つてわめく。力いっぱい大声をはり上げる。階下に泊まっている範男夫婦に、聞こえよとばかりにわめいた。

何のことか分からない治子は、ただだまって坐っていた。

ほかのことはどうでもよかった。トメのあの事実さえ知らないのであれば、どんなに罵倒されても平気だった。まさか千代子が兄とかわしたあれほどの堅い約束を、破っているとは思つてもいなかった。

「てめえがやさしうさえあつたら、もっとやさしい人間なら……」

健は、言わねばならない義務感に追い立てられていくようにみえた。

「てめえは、なんでこれほどやさしうないんなら」途中で、弟嫁の久枝が、風呂があいているけれどと、言いに来た。様子をさぐりにきたものらしい。

「はい、わかりました。入ります」

健は、うつてかわつて、ていねいに返事をして、風呂へおりていった。

務がそそくさと入つてきて、とにかく黙つて聞いておけ、あのことさえ知らんのなら、いいのだから黙つて坐つておれと言う。治子はうなずいた。いつまでも坐つていてやるぞときめた。

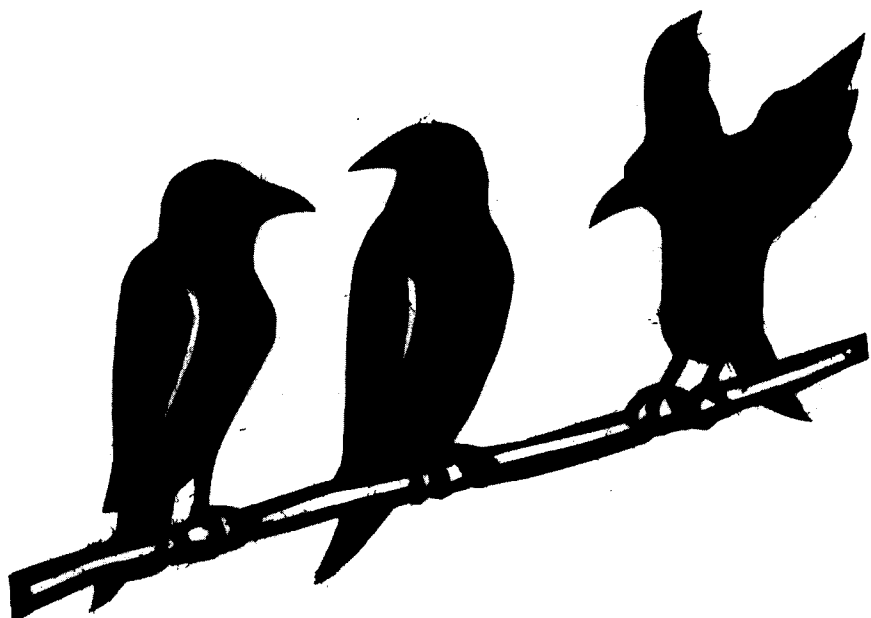
風呂から上がってきた健は、吐き出すように言う。

「もうええ、あっちへ行けつ」

まるで、教員室に立たされて説教を受けていた生徒が、追われるようなものだった。

朝、範雄夫婦は十時頃起きてきた。

治子は彼等のために昨夜、洋間にふとんを敷いた。トメの座敷に敷こうとすると、はつきり拒否されてしまった。範雄と久枝はトメの部屋では寝ようとしなかった。



昨日の晩は、義妹の厚代は千代子の家に泊まった。千代子は弟の範雄夫婦も誘った。範雄は、どうしようかと兄にたずねている。

「おまえ、うちに来たのじゃないのか」

と務に言われて、範雄は千代子の家に行くのを断った。昼近く、千代子と厚代が、しゃなりしゃなりとやってきた。待ち兼ねていたように、久枝が走り寄った。

久枝が両手をひろげて、身振り手振りを入れ、目を見開き、口をいそがしく動かして、昨夜のてんまつを報告している。

「わたし、中学しか出てないからばかなのよ」

いつも、あつけらかと明るくしゃべる久枝が、治子は好きだった。しかしこの時ばかりはほんとにばかなのではないかと、ふと思った。同じ立場の嫁ではないか。同居して嫁の義務を果たした治子の側に立つのが当たり前だろう。その久枝が打ちひしがれている務と治子でなく、義姉たちの機嫌をとっている。

千代子は腰を曲げ、腹をかかえて、身もだえしながら笑いこぼれた。久枝と厚代の肩を叩き、笑いつづけた。二階の窓から、治子はその様子をみていた。

葬儀の折、すでに健に事実が伝えられたということを手伝いから聞かされたとき、治子はこのときの様子をまざまざと思い浮かべた。

兄がうちおろすべき治子への鞭を、治子の掌中の珠

である息子の健が替わってやつてくれた。その満足は、千代子に我を忘れさせたのだらう。

夢中で転げ回って喜んでゐる千代子のところへ、治子が二階から降りて入った

立っている治子に気付いた千代子は、ぎよつとしたように、笑いを止めた。久枝も厚代も、凍りついたように立ちすくんでいた。

## 予告

四十九日の忌があけて、千代子が山辺を伴ってやつてきた。務がタバコをとり席を立つた隙をつくように、治子に言う。

「おばあちゃんが、死ぬ前にうちに金を預けてなあ」

山辺はあぐらを組みなおした。何か身構えている様子がありありとみえる。そんなことがあったのなら、なぜ務に言つて来ないのか。手の打ちようもあつただらうに。思わず治子はつぶやいた。

「そのときおかしいとは思わなかつたの」

千代子は、痛いところをつかれて、答えに窮したのか、しわがれた声を出す。

「ちよつとおかしいとは思つたけど」

山辺が横から陰険な顔で、ドスのきいた声を出す。

「思やあせんつ、思やあせんつ。だれがそねえなこと

を思おうにいつ」

治子は、いそいで務を呼んだ。

務は、黙つてきいていた。

千代子は息を詰めて、じつとしている。山辺が傍にいろんというものの、青ざめている。

務は、黙つたままだった。そのまま暫くの時間が流れた。

「まあお茶でも飲みましょうよ」

次妹の厚代が振り払うように言つた。

務は何故、この時はつきりと千代子に言わないのか、治子には不思議だった。

その時点で、どうして兄に連絡しなかつたのか。ひよつとして、トメはそれを望んでいたのではないだろうか。それをしてもらえないために絶望したのかもしれない。

事前に判れば、務はどんな方法をとつても、未然にトメの死を防いだことだらう。たとえどうにもならないことであつても、尽くせるだけの手は尽くしただらう。

兄を窮状のどん底に追い込むために、わざと知らせなかつたとしか考えられない。

これだけ、窮地に落とし込まれたのだ。もつと千代子の責任を追及すべきなのではないか。

務は、妹婿の山辺が居るときには何も言わない。千

代子はそれを知っている。だから、千代子はいまでは、山辺がついてこなければ、実家には来ない。

山辺もまた、務が傍にいたときは、治子に横柄な口のきき方をしなかった。

しかし、他の事とは違う。ここではつきりさせなければ、務と治子だけが責められねばならない。

治子の頭の中は、爆発しそうだった。

治子はもう一度、言ってみた。

「おかしいとは、思わなかったの」

今度は山辺の代わりに、務が治子を叱った。

「言うなっ、もう」



その夜、次妹の厚代が、治子に話したのは、こうだった。

トメがどうしても渡したいものがあると言うので、千代子はトメに会った。

「わしゃあ、もう死のう思ようるけん」

「なにを言うん。いつつもそんなことを言うてからに」

「この袋の中に預金通帳が入ってる。厚代と範雄と千代子で二百万円ずつわけてくれんさい。残りは孫八人で」

金を持ってきたのは、初めてだった。いよいよ来たかの予感があった。

（どんな小さなことでも、ばあさんのことは連絡してくれ）いつもの務の言葉が浮かんだ。しかし千代子は兄に連絡しなかった。

千代子は厚代に電話をした。

「なあ、どう思う？ 死んでもいいけんから、この金で老人ホームにでも、入るように言おうか」

「死ぬのだったら、家で死なせた方がいいわよ。ホームなんかで、そんな死に方をしたらたいへんよ」

厚代はこう答えた、平然と言う。

「たとえそうなつても、あなたのところも、私のうちも、子どもはもう結婚してるし、範雄のところも、こんなに離れていると影響ないわ。仕方ないわよ」

厚代は兄には千代子が知らせているものと思ってい

たらしい。

この正月頃から、健の結婚話が出ていた。務の同僚の娘だったが、相手の方が熱心だった。健はもう三十を過ぎていた。戦後と違って、男の子の結婚難の時代になっている。治子は、どうしても、まとめたかった。小さい頃から、びくびくとして気弱だった健と、苦楽を共にしてくれる伴侶がいてくれたら、治子はどんな犠牲も惜しまなかった。祈るような毎日だった。

忌が明けた頃、言いくそくに仲人が断りにきた。

「健ちゃんが、あまり気が進んでおられないようですから」

トメはこの縁談のあることを、知っていた。

務は金の分配の孫八人の中に、健と香をいれないように千代子に言った。しかし千代子はすぐに、健と香に送金した。トメが孫に渡そうとした金にまで、文句を言おうとしていると受け取ったのだろう。

あの時の百万円証書書き換えのことで、ずっとトメを責めつづけて、それも原因だったと書き添えて送った。だが務は、治子の知るかぎり、そのことについてトメの生前、一度も触れたことはない。

これで、香にも事実が知らされたことになる。健だけではなく、香との交信もまったく途絶えた。

（え・小林正子）

「わいふ」東京25周年  
田中喜美子編集長・和田好子副編集長の古稀を祝う会



# 「わいふ」トップは 若かった

「わいふ」が東京に移ってから、もう四半世紀！ しかもその間この投稿誌を引っ張り続けて、最も有名なミニコミ誌に育て上げた田中・和田両氏は共にいつの間にか古稀に……。

この事実気づいた原田静枝さんが、鈴木由美子さんと私に呼びかけてお祝いのパーティーを



思い立ったのが昨年の夏でした。

その当日、二〇〇〇年十一月

二十六日は、抜けるような青空

と暖かい空気が我々を祝福。飯田橋レインボービルの会場は、新潟から、関西から、東北から、甲府から、はたまた仕事先の北海道からと遠路を駆けつけてくださった方々を含め、七十人の意気軒高な女性たちの熱気

に包まれました。

その中心で、田中喜美子編集長と和田好子副編集長が、なんと若々しく、美しく、それぞれの個性を発揮して輝いていたことか！ こんな古稀ならなってみないと、一同感じ入り、安堵し、励まされました。出席者全員の良い顔と楽しい言葉も胸にはのぼりと刻み込まれています。

準備や当日の労働には結局わいふ編集部事務能力抜群の面々を巻き込んでしまい、深謝。

やっぱり「わいふ」の仲間はイキがよくていいな、ヤツテヨカッタと思わせてくれた出席者の皆さん、メッセージなど温かいお気持ちをお寄せくださった方々、ありがとう

ございました。

(早川裕子)



右より発起人の原田・鈴木・早川

# FREE TALK

## フリートーク

### 「温泉の旅」撮影の 過酷な舞台裏

熊本県天草郡

松本とみよ（44歳）

「松本さん、十二月のはじめあいてますか？」熊本県民テレビのディレクターから電話がかかった。「温泉ポッカボカ旅」と題した企画をするのだが、阿蘇の黒川温泉にうちのレポーターと同行してもらえないかというのだ。「黒川温泉に若い子は似合わない」というのがその理由だそうなの。「うむ！」

ただで温泉に入れて、しかも料理だつて出てくるに違いない。その上いくばくかのギャラが出るのだ。旅の企画で湯上がりに浴衣を着てごちそうの前にすわるレポーターのシーンが目につかぶ。こんなおいしい話を断るわけがないではないか。同行するレポーターというのが二十六歳の独身の男性アナだという。

「エエッ！ 男ですか？」なんかやりにくいなあ。

さて、当日は朝六時半に家を出て高速船マリンビューで熊本港まで一時間。テレビ局まで三十分、タクシード来いと言われている。私の到着を待っていた撮影スタッフは、カメラマン、照明、ディレクター、アナウンサーと全て男性。ワゴン車テレビタ号に乗り込む。

これから行く温泉というのが、南小国町に昨年五月にオープンした「竹ふえ」。四千坪の竹林の中に七棟の離れ宿があるという。

「もう気分はかぐや姫ですよ」と上野アナ。

「すずめのお宿みたいな所ですかね？」と私。

「すずめのお宿ってどんなお宿なんですか？」

「そんなこと言われても困っちゃうけども、あなた舌切りすずめを読んだことないの？ でも楽しみですよね」。

熊本市内から阿蘇方面に向けて二時

間半のドライブ。こんなことでもなければ一生来ることにはなかったろう小国の景色は雄大であった。冬のたたずまいを見せはじめた南小国は、見晴らす限り家一つない高原で、あたり一面銀色のススキが風にゆれている。

舗装道路から離れて山道を行く。本当にこんな所に宿があるのか、ちと心配になる。

さて十一時半に着いた「竹ふえ」は、本場に四千坪の竹林の中にあつた。それは旅館とイメージするものとはまる

で違っている。竹林の入口に門があつて、入るとそれから先は竹林の中の道へ続いていて、道の脇には、水車やらやまめの池やらがある。所々に七棟の離れ宿が見える。

案内されたその一つに入ると、囲炉裏には自在かががかかっていて照明はほんやり。露天風呂が各部屋についている。「ヘエーツ！　なんか日本って感じですね」。「二十一世紀に残したい日本の文化がここにあるんですよ」と上野アナ。なんととおおげさなと笑つて

しまう。

冬の小国とあつてけつこう冷える。上野アナは、薄いセーター一枚で震えている。「ぼくは、今朝急に温泉に行くと言われて来たんですよ」。

部屋の撮影が終わると、「露天風呂から先に撮ります。松本さんぬいで下さい」。水着のパンツだけをはきバスタオルをまいて安全ピンでとめる。「肩までつかつて」というのでザバツと入る。「あのう、松本さん、とてもリラックスしているようには見えませんですけど」とディレクター。そりやあそうだろう、キンチョーしているものの。正直なもんで。

肩のあたりからもみじの葉を流してだの、目線は右上から左へおろしてだの、カメラに向かってコメントしろだの、こだわるこだわる。外が寒いので今回はのほせる心配はなかった。

撮影が大幅にずれ込み、待望の料理の撮影は三時からとなった。それまで全員昼食抜きでひたすら撮影をこなす。いよいよ料理が運び込まれた。お



いしそうな料理が並んでいるが、生つばをのみながら、カメラマンが一品一品こだわりつつ撮るのを眺める。

人気の宿なので、三時には部屋をあけ渡さないといけないのだが、すでに三時である。時間がない。お腹がすいて究極に達している私、なりふりかまわず、かつ食らいたい気持ち。

「鴨って私食べたことないんですよ」と鴨を一口かじる「うーん！ レバーみたい」。撮り直し。私の皿のかじった鴨はとりのぞかれ新しい鴨がのせられる。ハイもう一度。

「これは、きつと山芋の天ぶらじゃないかな。私好きなんですよね」と口に入れたものが、はたして何なのかわからない。頭の中で苦しまぎれのコメントをさがす。「これって一体なんですよ。おもちゃかな？ ヘエーッ。変わってますね」。

こんな調子で少し味見してはコメント。最後にカメラが遠くへ移動して、私達二人が食べる情景の撮影となり「もう好きに食いちらしてもいいんで

すか？」と上野アナ。好きに食べられたのは、その間の五分くらいだったろうか。もちろん、お腹にたまるくらい食べるなんて不可能。撮影終了となったら即料理は撤収である。そんなあ

「待つてー！ ムースだけは食べさせてー！」。上野アナが自分のムースをくれたので、大好きな抹茶とチョコのムースだけは、しっかりと二個食べた。

だいたい、撮影する料理を昼食にしようなんて発想は全然ないようだ。私達は味見できただけでも幸せ。他のスタッフは口にもしないわけで悲惨。

四時に撮影が終了。昼食抜いているので帰る途中何か食べようかとなったが、おめあてのそば屋が休み。コンビニでパンでも食おうかとなった。いつもこんな調子らしい。「こんな時にかぎって妻は言うんだよな、あなたおいしい物食って来たんでしょって」とディレクター。

わかつちやいたけどやっぱり撮影は甘くなかった。

## 子宮筋腫摘出手術を受けた私

鈴木由美子（43歳）

子宮筋腫摘出手術を受け、今日、退院して自宅に戻った。

健康な体になったのだ。嬉しくてたまらない。笑みを抑えようとしても、ついつい、顔がほころんでしまう。

今まで、不健康だったというわけでもないのだが、身も心も、軽くなったような爽快感。

子宮は残せた、という嬉しさ、幸福感であろうか。

私もやはり、女だった。

年齢がいつていようと、子どもを産み終えていようと、やはり、子宮を捨てたくはなかったのだ、と思う。

子宮筋腫とわかったのは、四年ほどまえである。

「様子を見ましょう」と言う医者のことばに、それならたいした事はないの

だろう、安心して私はうなづいた。

筋腫持ちにありがちな、月経過多・生理痛・不順などがなかったこともあり、閉経してしまえば筋腫が大きくなることも、あらたにできることもないと聞いていたので、閉経に持ち込むしかないと思っていた。

それから半年ほど経ち、下腹部に固いしこりがあるのが、触ってハッキリとわかるようになった。

筋腫が、大きくなってきたのだという不安を感じ始めたが、私のように子どもを産み終えている中年の女の子宮など、残して欲しいと言ったところで、「必要ないでしょう？」と言われるのだらうと、恐れていた。

夫はすでに亡くなっていたので、当時はまだ小学生だった子どもを一人置いて入院はできない、という事情もあった。

このまま筋腫が他の臓器を圧迫したりするほど、大きくならないことを願い、閉経に突入して欲しいと思った。反面、夫もいないのにまだまだ続く

生理が空しくなり、子宮なんかもう必要ないから、全摘してもらおうか、と思ったりもしていたのである。

そんな矢先、姉から、「子宮筋腫の手術をした、明日、退院する」という連絡があつて驚いた。

姉にも筋腫があつたとは、初耳であつた。



姉は最近筋腫がある事がわかり、翌月には手術することを決めてしまっていたのである。

一歳がいの姉ではあるが、その行動力とバイタリティーに、毎度驚かされる私なのである。

その姉のおかげで、「おいしいと取り」のできる私なのだ。

姉はたつた一週間の入院で、一キログラム以上もある、筋腫を取つてもらったと言う。

子宮は残っていると言うのではないか。

なんでも、レーザーメスを使う手法で、筋腫はもちろんのこと、腺筋症、ポリープなどもすべて、米粒大ほどの物も残らず、取り去ってくれると言うのだ。

すべて取り去つても、新たに筋腫ができる可能性はあるけれども、二度とは筋腫ができない、ということだってあるわけだ。

私も姉も、四十歳代中盤だ。

筋腫は一、二年で大きくなるものではなく、五、二十年位かかって、徐々に大きくなるものだ。

新たな筋腫ができたとしても、筋腫が大きくなる頃には、もう閉経に突入できるだろう。

そのうえ、子宮は残せる。

私は、一も二もなく受診し、手術の予約をし、四か月後に手術ということになった。

私は筋腫の他、腺筋症、ポリープもあり、全部で五三三グラムのものを摘出していただいた。

MRIとCTの画像を見て、「大丈夫きれいに取れるよ」と先生に言われた時には、安心してへたり込みそうになった。

子どもは高校生になっていたの、私が入院中もがんばって、一人暮らしをしつつ通学に、勉強に、部活に、家事にと、励んでくれていた。

今日、退院するにあたって、先生から著書のプレゼントがあった。

現在は絶版になっている貴重なものである。

帰宅後、一気に読み終えた。

子宮筋腫に苦しみ、悲しみ、悩み、絶望し、そして最後に先生に救われた女性たちの記録である。

その中に、

「リップスティック・サインポジティ

ブ」ということがあった。

その意味は、

「元氣になって、口紅をつける気持ちになること」とあった。

実は私は一週間まえ、入院する前日にお気に入りメーカーの、新色の口紅を購入したのである。

退院の日に、その新しい口紅をつけて帰宅するつもりで、

私は手術まえには、

「元氣になって、口紅をつける気持ちになっていた」わけである。

そう、私は健康な体になり、元氣になったのだ。

嬉しくてたまらない。

## バザー

東京都武蔵村山市

大沢陽子

十一月二十五日、午後一時からの青空リサイクルバザーに参加することにした。このバザー、年に二回、春と秋

に開催される。友人のご夫婦が十年来世話人をしてくれている。場所取りは早い者勝ち。毎回四十店以上集まる。

「生きもののたちの会」としては参加しないと決まっていたけど、八月二十五日に森さんの家の庭で生まれた子猫を、飼ってくれる人を見つけたかった。子猫たちのお母さんは前に人に飼われていたのだろう、人に慣れていた。子猫たちも人なつっこかった。三匹はもらわれたけど、まだ三匹も残っている。大きくなってきているので急がなければならぬ。村山団地に仮住まいの、三宅島の人たちが冬物衣料を必要としているとも聞いた。そして自分の衣類も減らしたかった。それで私一人でお店を出すことにしたのだ。

数日前から物置、天袋、洋服ダンスなどから衣類を四畳半に集めた。洗濯の必要なものは洗濯した。その荷物を当日朝早く車に積んだ。トランクも後ろの座席もいっぱいになった。

「青空リサイクルまつり」と書いたたて看板を自転車に積んで雷塚公園に行

き、道のほうから見えるように、入口にたてた。そしていったん家に帰り、シロを散歩に連れて行って、朝食の支度。

落ち着きなく午前中を過ごし、お昼を終えて、十二時に出発。公園の入り口で荷物を全部おろした。夫が車を駐車場に置いてきて荷物運びを手伝ってくれた。ついでに売つてもくれた。「それ、あったかいですよ」とか「軽くていいですよ」とか言つてすすめている。

初め、百円と二百円とをべつにしておいたんだけど、夫がみんな百円がいいと言うのでそうした。それでも「あ

そこでは、三枚百円だったわよ」と言う人がいた。一枚百円だつて安すぎると思つてゐるのに。

ハーフコートは暖かくて軽くて、いいものだけど、一年に二・三日しか着ない。あれば変化があつていいけど、なくてもいいかと思つて、ちよつと無理して持つてきた。まだ二・三回しか着ていない。これだけは五百円にしよう、値札をつけて来たけど、百円にした。すぐに売れてしまった。

さえない衣類を集めて、五十円と書いた箱にいれた。これはほとんど売れなかった。

アクセサリーは子供用十円、大人用



フリートーク

三十円で売った。大人用は百円でよかったかも知れない。でも安い中で価値あるものを見つけるのが、バザーの楽しみだからいいかとも思う。

二時近く、森さんが子猫を二匹ダンボール箱に入れて抱いて来た。私が持つていったオりに子猫を移して、日の当たるところに置いた。「家族のひとつりにしてください」と書いたポスターを、ジャンパーをかけたオリの上に置いた。外から見えるのは前面からだけ。いろいろな人が見てくれたけど、もらつてくれるという人はいなかった。

子猫のそばにばかりいる森さんに「子猫を見ているから、ちよつとお店を見てこない？」と馬場さんのお店をすすめた。そこは、とびきり安い。全部百円だけど、いいものがある。初めにパーツと売れてしまったから、その頃にはもうとびきりの物はないかもしれないけど、それでも、いいものいっぱい。

私が行った時は、十人以上の人が集まつて選んでいた。一人の人が、これ

いくらかしらと七つくらい石けんの入った袋を持ち上げた。いっしょに売っていた萩野さんが、それを持って馬場さんに聞いた。「百円」馬場さんが言うより早く近くの人がそれを取った。

「わたしは買おうと思って値段を聞いたんです」先の人が言った。サッと取った人は放さず、ほかに数点ほど持っていた物といっしょに買っていた。「値段を聞いたのに買えないで」と先の人は文句を言っていた。

去年は電気じゅうたんのしを二人の人がつかんで、自分の方が先だと取り合っていた。いいものでもとても高いものでもすべて百円だから、取り合いにもなる。取り合ったりはしなかったけど、私も宝の山をかき回してあれこれ買った。

活気のあるそのお店が、細い道を隔てて向かいにあったから、私とさっちゃんとは二人くらいのお店に、人はあまり来なかった。

売上は二千三百二十円。洗濯したりして前々から準備して、今日一日とて

も忙しく働いて、これはちよつと安すぎる。

売れた物は百円の衣類が二十枚ほど。ハーフコート、フードつきコート、軽いオーバー各種セーターその他。新しく軽くて暖かいものはみんな売れた。五十円コーナーの物も少し売れた。「五十円？」と嬉しそうに言って、トレーナーの上下を買っていった人もいる。ハーフコートを買ったお年寄りも「百円でいいんですか」「ほんとうに？」と二度も念を押していた。買った人から見れば、暖かい服が手にはいつて、よかったかもしれない。暖かい服を提供できてよかった、と思うことにした。

だけど、早く来て入り口に近い場所を取ったほうがいい、未練のあるものは出さないほうがいい、二百円で売りたい物を五十円に値切られたら、「それは無理」と断る方がいいなど、いろいろ考えたことは多かった。

森さんが手際よく服をたたんで片づけを手伝ってくれた。森さんも夫も荷物をどんどん運んでくれた。儲けは少

なかったけどいろいろの人に助けられ、馬場さんのお店で買いう物もできて、楽しい一日だった。

この後、十二月十日に最後の子猫がもらわれて、森さんのところの子猫は六匹ぜんぶもらってもらうことができた。お母さん猫もその連れ子（六か月くらい）も不妊手術を終え、二匹は今森さんの家の庭で暖かそうな寝床をもらって、のんびりと暮らしている。

## 十年越しの恋

匿名

なぜ私はあの人のことを、こんなに好きなのだろうかと不思議に思う時がある。結婚前から数えると十年以上の付き合いになる。その間、出産で会えない時期もあったし、しつこい電話に、「もう電話しんといて」と言った時もある。それでも、今また好きでたまらなくなっているのはどうい

だろう。環境は変わっても十年前と同じように、せつなさのため息の日々なのだ。

当時はお互い独身だったのに、なぜ別々の人と結婚して親になったのだろう、それは一言でいうなら、私が結婚したい時にあの人が結婚したくなかったから。

お互いそれなりの幸せな家庭を持ちながらなぜ会い続けるのだろう、それは会いたいから。好きだから。それだけだ。

なぜそんなに好きなのだろう、それはいつまでたってもわからない。

私の友達だったあの人とSが関係したのが、そもそも間違いだっただろうか。S以外の男でこんなに苦しんだり泣いたりしたことはない。

そんな関係で始まったから、私はSに對し、どうしても素直になれなかった。「私はSにとって遊び、それなら私も割り切ろう」

どんなに会いたくても私から電話をしないし、会っても彼女のことがばか

気になる、そのくせ、何も言えない。本当は、「彼女と私とどっちが好きなん？」って聞きたくてしょうがなかったくせに。一人で電話を待つ夜は淋しくつらく、たえきれずに誰かを誘う、その誰かとまた楽しいだけの恋を重ねることもあった。

その内、彼女と別れたと耳にした。Sからではない、私達は彼女のことを一言も口に出したことはなく、別れたからといって私もSも何も言わない。「何で別れたん？ 他の女ができたん？ 私が彼女になつていいの？」と聞きたかったのに、言えば面倒くさい女とうつとおしがられるのが嫌だった。もう会ってもらえなくなりそうでこわかった。

二年近く経って私は疲れた。当時、仕事や家族の中もゴタゴタしてて安らぎの場が欲しかった。そんな時、プロポーズされた男に逃げたのだ。これで全てから解放される――。

今、思えばなぜ勇気を出して、「私はアンタの何なん？ 私のことどう考

えてんの？ 私、プロポーズされてんねんで」と叫ばなかったのだろう。プライドだろう。結婚すると聞けば引き止めてくれると期待していた。でもSは、相変わらずのポーカーフェイスで結納が終わっても何も変わらなかった。

結婚後も会い続けようと思ってたわけじゃないが、平然と「元氣か？」と電話してきたのには、「Sらしいな」と冷静に受け止めた。

私が結婚して三年後にSは結婚した。あと三年待てばよかったのかと思つたが、あまり嫉妬はしなかった。この頃には、見せかけの割り切りじゃない心から割り切れていた。この人とはこういう運命なのだと――。

今、私はSに對して何でも言える、「会いたい」「好き」はもちろん、昔の事を持ち出して「何であの時結婚してくれへんかったん」と茶化して言う。それに夫や子供、近所の人の話や、昔では考えられないくらい何でも言うしSも一緒だ。外に出た時くらいは所帯



じみた話はしたくなくとも思うが、私はSに何でも知ってもらいたいし、私もSがどんな生活をしてるのか知りたい。たまにいい夫やいい父親の面を知ると、聞かなきやよかったと思う時もあるが、仕事も家庭もやる時はやるSでないと、好きでいられないと納得している。

もちろんお互い家庭を捨てて再婚しようなんてこれっぽっちも願っていない。こういう関係が二人には合っているのか、だから続くのか。ここまで割り切ってるのに、なぜこんなに会えない日が続くとたまらなくせつないのか、これだけはどうしてもない女心

なのだろうか。

この先、どうなるのだろうか。分からない事だらけだが、一つ言い切れるのは、私にとってこれ以上想える男はもう死ぬまで現れないだろう。そんな男に出会えて幸せだと満足している。

## 電話番号

川崎市中原区 和田美代子

ある日、勤め先で私は同室の上司A（男性）、B（女性）の二人から『電話番号』を頼まれた。私がこの課にアルバ

イトとして雇われて、初めての仕事である。『電話番号』なんて家でいつもやっていることで、家族の誰にかかってきても、すべて私は全員のことを一応把握しているつもりだから、大したことはないと思っていた。と、ところがである。

まずAは、この職場の神様の存在で何から何まで知りつくして今日まできた人である。そしてBは、外部から入ってきた人で、Aからいろいろ学びとりたいと思っている様子だ。Bは折にふれ私に、

「Aさんって、何でも自分だけ承知していて勝手にことを運んでしまうのよ。何かにつけこちらから聞かないと教えてくれないところがあるの」と、こぼしている。そんな二人が今日は同時に不在で、それぞれ私に、

A「とにかく僕にきた電話は、すべてメモしておいて下さい」

B「私にかかって来たものだけでなく、Aさんに来たものも全部メモして私の机に貼っておいてね、後で『知ら

なかった』じゃすまないことがあるから……」

と言いついて出かけて行った。

「は、はい」

私は両者に言われたことを忠実に、感情ぬきのロボット感覚で受け止め、

「A、Bそれぞれの人脈も、まだよく分からないから所属と名前、受けた日時をしっかりと聞いておかなければ……」

と、少々緊張して電話のそばに座った。

出番だよ、と言わんばかりに電話が鳴った。大きく深呼吸して、おもむろに受話器をとる。

「〇課の〇〇だが、Aさんいる？」

「今日はお休みですが」

「じゃあ、用件をファックスで送っておくから渡しておいて」

「はい、分かりました」

トーンを下げ、業務用の声で返答する。間もなく次の電話、今度は親しげな明るい声だ。

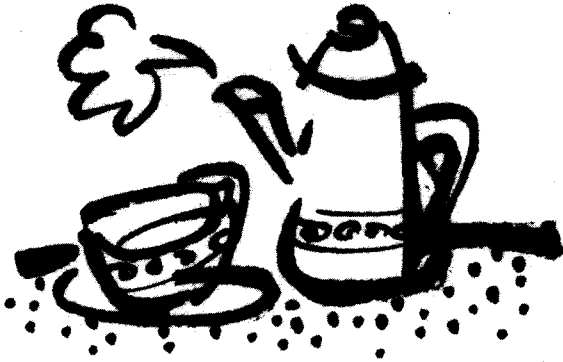
「〇〇だけとBさんに代って」

「ああ、Bは今日は不在ですが」

「そう、じゃあ、たしかにあれ受け取ったこと言っておいて、ありがとってね」

「は、はい、あのーあれと言えはわかるんですけど」

「そーよ」



メモに〇〇さんより『あれ』たしかに受け取った。ありがと、とのことでした。何月何日、何時受けとる。と書いておく。

それにしても、Bさんが出かける時に私に念を押すように言っていた

「Aさんにかかってきたものも、私の机に」

が妙に気にかかる。これから先の仕事は、どちらかと言うとBさんと共にすることが多い。Bさんと仲良くしないと仕事がやりにくい、との自己判断から、Aさんには「〇〇さんと△△さんより電話がありました」とだけ書いてBさんの机に貼っておいたものの、何だか余りいいことではないような気がして胸がどきどきした。

と、こんな調子で、ごく気楽に引き受けたはずの『電話番』は意外に神経が疲れた。

「電話なんかそうかかってこないだろう」

と思って開いた本も、全然ページが進まない。読もうという気分にもならな

い。

いつもよりずっと長く感じた一日の就労時間も、Aに三件、Bに二件の電話でやっと終わり、寒さが加わった夕暮れを帰途についた。

次の日、私はAに呼ばれた。

「ちゃんと言わなかったからいけないんだが、僕のところにかかってきたもの、すべてBに知らせなくてもいいんだよ。知らせる必要があることは僕が言うようにするから」

私は今ここで、Bに頼まれたことをしゃべると、AとBの間で気まずくなると判断して思わず

「ああ、そうだったんですか、これから気をつけます」

と、しおらしくうなだれた。内心、ものを知らないアルバイトのおばさん、と思われるも平穏な時間が流れてくれる方が、私には居心地がいい、と思っていた。

ちなみに数日後にまた、今回のような日がある予定である。少々気が重い、今度はAに忠実に、それぞれに来

ただ分だけ各自の机にメモを貼っておこうと思っている。そしてもしBに注意されたら、また、

「これから気をつけます」

式でクリヤーするしかなさそうな気がする。あまりことをはっきりさせない私のやり方、頼りないと思われて、いい方法とはいえないが……。

仕事での伝達のむずかしさ、家庭では味わえない妙な体験、といえそうだ。

## 着物のリフォーム

神奈川県座間市 青島典子（45歳）

結婚後、毎月のように結婚式に招待されて出かけて行く主人を送り出しながら、私が結婚式に出席すると主人よりお金がかかるなあと考えていました。どこを節約できるかを考えて、親

が持たせてくれた着物を生かそうと、先ず着付けを習いに行きました。

ところが着物を一人で着られるよう

になってみると、着物が着られないということがわかったのです。頑張つてデパートへも着ては出かけてみたものの、今ひとつ楽しめないのです。着続けられないものにはならないのはわかっているのですが。

子供の友達のお母さんに誘われて一緒に洋裁を習った時、だんだん欲が出て生地にもこだわった時、そうそうお金もかけられないので、着物を洋服にするアイディアがひらめいたのです。というのも着物を着られるようになると、つづれの帯や、母親の嫁入り道具の着物を分けてもらったものの、丈が短くておはしりのない夏の着物があることに気がついて、これを生かそうと袂を入れました。長く洋裁を教えていた先生も、こんな生徒は初めてだったとおっしゃったが、一枚の細の着物からワンピースとブラウスができました。

この着物を洋服にして着てからの私の悲喜劇のごもです。

十五年も前だったので珍しかったの



でしよう、「私にも縫って欲しい」と平気で言い出す人が続出で、あつげにとられました。私が敬語をつかわなければならぬようなずつと年上の、しかも初対面の人が言い出すのには、本当にびっくりしました。逆に私より若い人が触発されて、古い着物を洗い張りに出してからワンピースに仕立てて見せてくれたり、着物を持ってないか

ら骨董市へ行って捜して作ったのよと、骨董市なるものを教えてくれたりしました。

この友だちに厚かましい人の話を怒りながらすると、笑いながら「縫ってあげればいいのに」といともたやすく言うのです。そうするにはそれ相当のものがないとできない私は、ぶーとふくれて聞いていたのですが、彼女の言葉に一理あるのを間もなく知ることになりました。

ずいぶん久しぶりに、憧れの人から電話があり、母親が亡くなって着物をもらったので、洋服にしてもらえないかと言われたのです。その時は、怒るところか彼女の為なら一肌脱ぎたいとさえ思ったのです。そして洋裁の腕のまずさを後悔したのです。

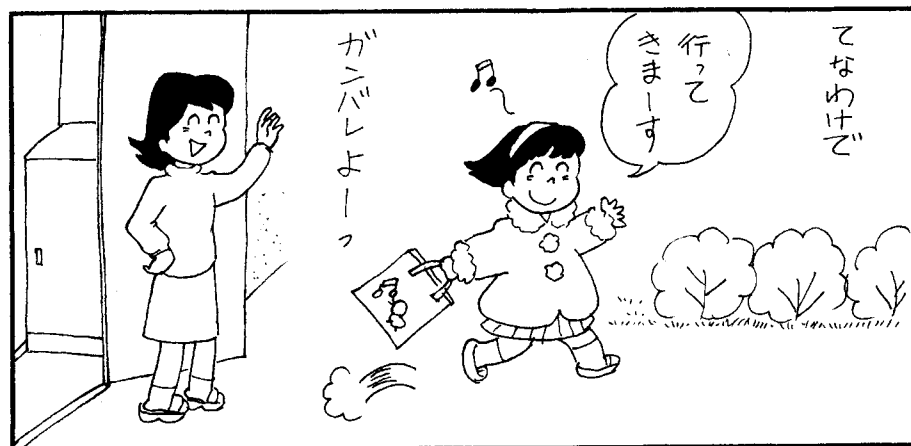
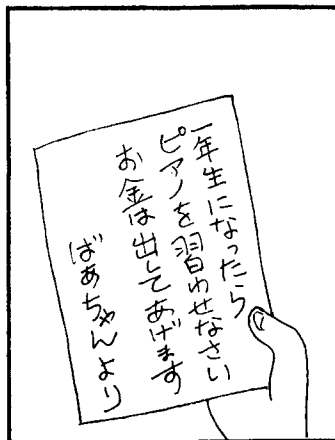
もう一つ思いがけない体験をしました。戦前の母の嫁入り道具の着物を洋服にしていたわけですが、物が語るのが目の当りにしたのです。実家は兵庫県の山奥の農家だったので、空襲にも合わず、戦後の食糧難も経験しなかつ

たのですが、「着物の生地ですね」と声をかけられた時に、「母のお下がりの着物です」と答えると、「私の姑や母は、戦後全部お芋に換えてしまったから、未だに着物を持って通った農家の方へは行きたくないと言ってるのよ」とか、「私の家は農家なので、着物を持って多くの人がやって来たの」とか、「正絹ものは価値がなくて木綿ならと言われたりした」、「私は夫が医者だったので一度も買い出しに行ったことがないの」とか、戦前の着物がきっかけに多くのことが語られたのです。

こういう話をいろいろ聞きたいのなら、くれくれ坊主に腹を立てるばかりの自分の能なしを、克服しなければならず、何かうまい受け答えはないものか、いえいえ、二つ返事で引き受ければ腕も上がって一石二鳥なのに。でもやっぱり好きでもない相手の服なんて縫うのは嫌だと、握りこぶしを作るばかりです。

(え・カステラネンコ)

# これが 子供の生きる道 栗田 光









# ズバリ一言

私がペンネームを使う  
ようになったわけ

永田道子

今から二十年以上前の土曜日の朝だった。警察署から電話があり「あなたは○○新聞に投書をしましたか?」と聞かれたので「はい」と答え、私はまだ朝刊を読んでいなかったので急いで新聞を開いた。

それには「道路にまで商品を並べて



いる商店に巡査が来たら、注意される前に店の奥さんが、商品を袋に入れて渡した」という内容(要旨)の私の投書が掲載されていた。

ほどなく警察署の人が我が家にみえて、テーブルの上の数枚の顔写真を並べ「どの巡査ですか?」と問われた。私は一般論として書いただけで、まさか警察の方がくるなんて夢にも思わなかったもので、事の重大さにビククリしてしまった。

それで「私はウソを書いた訳ではないのですが、どの人か全く分かりません。ご免なさい」とあやまった。

そのあともしつこく問い詰められ困っていたら、週末で主人が在宅だったので「この人、病気になってしまったので「この人、病気になってしまいうから勘弁してあげて下さいよ」と助け舟を出してくれたので、やっと帰ってくれほっとした。

警察の立場からすれば「その巡査は誰なのか」を突き止める役目があると思うので、今後はそのようなことを考慮に入れて書かねばと自分の迂闊さを反省した。

その一方で、私は我が家の電話番号を警察署に教えたのは、○○新聞だと一方的に思い込んでいたのだから……。

それから暫くして別の投書の件について○○新聞より問い合わせがあったので、前記の件について聞いてみたら「新聞社のほうでは一切教えていない」との返事だった。

どうやら私の想像ではコンピュータで私の住んでいる○○区の同姓同名

の人をピックアップして「投書をしたか？」を順番に聞いて私を探しあてたようだ。

という訳でそれ以後、誰かに差しさわりのあると思われる内容の投書は「書かない」または「ペンネーム」にすることにきめたのである。

現在、苦い経験からときにはペンネームを使用している訳だが、今となつては親に付けて貰った名前の他に自分のお気に入りのもう一つの名前を持っているのも楽しきかな！と思えるようになった。

## 義務教育の場は

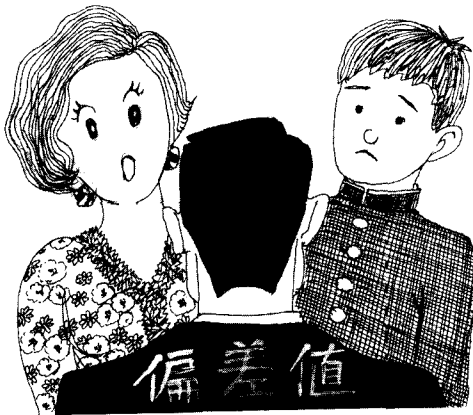
埼玉県蕨市 末摘花（46歳）

自分の育った時代を語ったとしても、単に自分の郷愁を言語化しているのかも知れない。それにしても、義務教育の学ぶ場がこれでいいのだろうか……。はじめての受験で、いかに我が子の教育を学校におまかせしていた

か、痛感しているのです。

二極化と言うのだろうか。これ程に学力の差があるとは、気付かないでいた母親である。

息子が中三の最初の三者面談で、担任から言われた言葉に、その夜眠れなかった。偏差値だけで息子を見たら



「バカな子」なのだ。悲しくて、なさけなくて、みじめだった。

高校受験を考えたら当然向き合わないければいけない学力。私は教育を外部委託しなくとも、義務教育の学校できちんと身に付けさせているものと考えていた。今、私の回りでは母親達が必死で働く。「塾代位は稼がなきゃ」けっして安くはない。二極化ではなく、義務教育の場で学力の標準を考えてほしいと思っている。

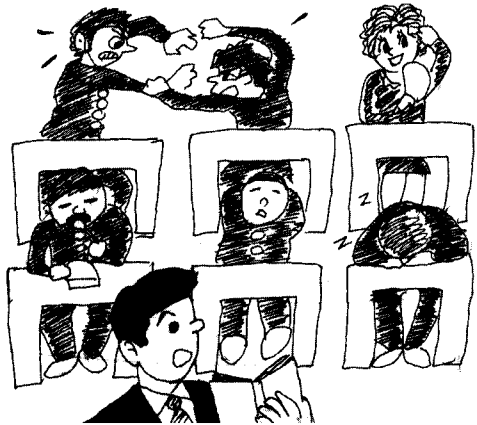
## 書きたいこと、書かなければならないこと

神奈川県藤沢市 木村澄子（52歳）

私としては第一に、不登校の原因・理由として社会的心理的なものにとりざたされているけれども、和田さんが書評で書かれた「化学物質過敏症の家族」の例にみるような、環境因的なもののことを書きたいのです。統計を今調べているのですが、イジメ暴力行為

等も含めて学校がらみの問題の発生状況が、土建行政と相関があると思うのです。なぜこんなに急激に子ども、青少年をとりまく状況が厳しくなっているのか、カウンセラーが常駐する学校でも必ずしも改善がみられるわけではないことは、学校がシックビルであり、家庭がシックハウスである可能性を含めて考え、対策をたてるべきではないか、と思うのです。

第二には小さいお子さん同士のもののやりとりについて。あれはやはり誕生日のプレゼントとか特別に限定して、でないとは危険な面もあると思うのです。イジメの中にも含まれる（含めてはいけないと思うのですが）カツアゲは、はじめは物の貸し借りや、小額の物をこれいいね、ちょうだい、というやりとりの形からです。それがエスカレートして、いやがったり理由をつけて断ったりすると、ウソつきとか友だちじゃないとかいうイイガカリを含めて、他の子をもまきこんだシカトの輪のひろがりになったりするので。



第三には、ひどい教師、児童生徒、学校、保護者の話などは話題になるけど、いい話は事件性がないので話題にならないから、そこを書こうかな、と思うのです。私などは何をいつても生徒に恵まれたから仕事を続けてきていられるので、家庭ではどうか知らないけど、教員をいたわったりしてくれる多くの生徒の支持のありようを伝えたいのです。たとえば十二月十七日の文

化祭のとき、大分前に教えた生徒とエレベーターの前でバッタリ会ったら、前置き抜きでいきなり「ぼくは不登校だったんですけど」と切りだされました。「そうだったの」とか返事をしたら「この学校に入った二年目に先生の古典をとって、それで来られるようになったんです」とか言ってくれるんですね。「そんなことないわよ、水のそばまでつれてくることくらいはできるかもしれないけど、水を飲んだのはあなたの力よ」と言うと、「いい言葉を聞かせてもらいました」とまた感謝してくれるんですね。こんな形じゃなくても、空白の多かったレポートが全部うまってくることや、遠くから目礼を贈ってくれるようになることや、有形無形のコミュニケーションがあるんです。

あー、でも、「わいふ」って、具体的なことをビシツと書いたものじゃないのりませんよね。まあ、いいわ。ちよつとこれを書き、つぎはこの中から具体的なものを書いて、という風に

勢いをつけるというか、何事にも準備や助走はつきものですね。

化学物質過敏症については、北里大学の宮田幹夫先生にお話をうかがってきているので、その報告の形で、ぜひのせてもらいたいと思っています。アメリカの荒れた高校で、空気清浄機をつけたら粗暴な行為が止んだ話とか、興味深いことがたくさんあるのです。

それから今話題の映画「バトル・ロワイヤル」について。中学生同士の殺し合うシーンに対する批判が相次いでいるようですが、あれは政府がそういう法律を作ってやらせる、という前提をもったストーリーなのです。政治家が一映画に対して批判するのは珍しい、ということ、世界的なニュースになっていくようですが、政治が中学生に殺し合いをさせるという設定を、まだマスコミもコメントの対象にしていないうです。原作者は（映画の製作者たちも）凄絶なバトルを描きながら（私はこわくてそういうところは飛ばし読みしてしまったので十分な理解

ではありませんが）、子どもたちにこういう競争（フィクションは極端な形だけど、本質的にちがうという切れない面を持つ）を強いている現在の状況をこそ告発しているのだ、と思います（映画を見にゆくひまも直視するコンジョウもないので、原作が出た数年前に読んだ記憶をほりおこしながら）。

## 公民館保育室に 子供を預けて

東京都国分寺市 吹野あゆ子（27歳）

確か「図書館だより」だったと思うのだが、そこに「母と子の教室」の案内が載っていた。公民館の保育室に三歳未満の子供を預け、母親たちが学習するというスタイルに興味を持ち応募した。今だから言えるが、特に子育てに行き詰まっていたわけでも、学習をしたいわけでもなかった。ただ、軽い気持ちでの応募であった。

子供を預けるのだから当然保育料が

かかるのだらうと思っていたら、保育料金は必要なく、子供たちが食べるおやつ代が実費として徴収された。それも半年で八百円弱である。まずこれに驚いた。民間保育室は一時間最低で八百円はかかるというのに、週に一回二時間、ただで子供を預かってもらえるのに恐縮してしまった。そして「ラッキー」と思いつつ、少しいぶかしんでしまい、再度公民館に問い合わせたが、



「無料です」とはがらかに切り返されてしまった。

子供を預けるのが初めてのお母さんたちもいて、最初の頃は保育室に預けるだけでも一苦勞だった。脱走する子供もいたし、泣いている子供もいた。後ろ髪を引かれる思いで子供と別れる母親たちが、ほとんどだったのではないだろうか。娘も保育室の手前で私と別れるときには、目にいっぱい涙を浮かべて恨めしそうな表情で私を見つめた。娘と別れがたかったのは言うまでもない。

子供と離れていざ学習室へ。どんな話が聞けるのだろうか、どんな母親たちが集まっているのだろうか興味津々であった。本当に単なる興味である。

ところがいざ学習が始まって見ると、「私は何故ここにいるのだろうか」と思えるくらい緊迫した空気が流れていた。育児方法を教えてくれるのかと思いきや、まったくそうではなくて、講師が我々母親の内面にバンバン弾を打ちこんでくる。

「だからどうなの？　ダカラ、コドモニドウシタイノ？　あなたは？」

気軽な気持ちで参加した私は冷や汗ものである。子供を産んでからというもの、ディスカッションとはほど遠い環境にいたし、私自身の確固たる意見を述べる必要性もなかった。「あなたは子供とのやりとりの中で何を見出したの？」

講師は答えを言うてはくれない。勿論絶対的な答えはないのだから、答える言葉が見つからないので苛々していた。

子供が三歳までは側にいて、育児に専念したいと思ってきたけれど、育児だけに埋没した生活の中で、社会人として培ってきたものをなくしてしまっただけではないだろうか？

私個人としての意見や主張、他人の前で喋る姿勢、協調性などなど。核家族の中で懸命に子供に向き合ってきたけれど、社会人としての感覚がいつのまにかズレてしまっていて、それに気づいていないのだとしたら、その母親

の影響を受ける乳幼児はどうしたらよいのだろうか。この学習を通じて悟ったのは、子供を育てる母親だからこそ一人の人間として立っていなければならない、ということだった。

半年間の学習を通じて子供との関係、女性としての私について考えることが山ほどあった。また母親が学習をしている間、子供たちもただ預けっぱなしになっていたわけではない。彼らは保育室で仲間たちとの関係を学んでいたのである。母も子供もそれぞれの場所 で成長しているというわけだ。

今では保育室に入るときに恐れる子供は少なくなった。もし泣いたとしても母親と離れる一瞬だけだ。わが娘などは私の手を振り切って楽しげに中に入っていく。子供たちも保育室という場で何かを得ているのだと思う。

かつては幼い子供がいる母親は仕事はおろか、学習することさえも無駄だと言われてきた。しかし、公民館が無料 で子供を預かり、若い母親たちに学習の場を提供しているのは大きな意

私はこの点にととても共感した。母親は育児に専念しさえすればよいという女性差別の風潮はまだ根強い。その中で窒息しそうになっている母子がなんと多いことだろう。

ジコチューはだれだ？

岩田和子  
(49歳)

しばらくして紳士は灰皿を要求し、タバコを吸おうとしかった。席席ならともかく、おいしい料理に煙がかかるのはイヤなので、私は「申し訳ありません。食事中なのでタバコは遠慮していただけませんか？」と申し出た。紳士は、「でもここは禁煙席じゃないはずですが」という。確かにこの店は分煙にはなっていない。私は「体が悪いので」とウソをついた。だって「煙は迷惑です」などと正直に言つては、相手の立場がないではないか。

私は心を静めて食事を再開したが、隣の紳士は再度タバコを取り出そうと

結局紳士は、「じゃ、我慢しましよ  
う」と折れた。こういう、他人を尊重  
しないバカで図々しい女にかかつて  
は、こちらが犠牲になるしかないな、  
という風情で。

暴力的なんだよ」

実は私自身、ほんの時たまタバコを吸う。だからこそ、吸わない立場の人のことも意識からのけられないのだ。身内の人間には「吸ってもいいですか」と「礼儀正しい自分」をアピールしておいて、まわりにいる赤の他人は存在しないも同然、とふるまうことはできない。これでは、電車内で化粧したり、着替えをしたりする若い女性の方が、物理的に被害がない分、まだましである。

夫がこういう種類の人間であるということは情けないと思つたが、言つてもわからないから、見下すだけでその後は無視していた。

だが二、三日たつて、私の方が遅く帰ってきた夜、いつになく洗い物だの風呂掃除だのを自発的にやつた後、彼がこう言つた。

「この間は言いすぎたよ。俺も悪かつた。でもあんたつてすぐああいふことするじゃない？ 俺心配なんだよね、世の中には変なヤツいっぱいいるか

ら。文句いわれるとすぐナイフで刺したりなんかするから」

内心微笑である。「ああいふこと」というのは、公共の場でウルサイ子どもを叱ったり、人のアタマをはたいた



オヤジをあやまらせたりするという、ごく当たり前のことだ。私は別に好きでしているわけでも、正義感が強いわけでもない。どうにも堪忍できないか

らそうせざるを得なくなっちゃうだけで、当の私は実に穏忍自重の人なのである。当然こつちも命が惜しいから、言つてわかるかわからないヤツか、相手の人柄は十分吟味しながら説得しているつもりなのだ。

実は彼の本心は「心配」なのではなく、私のようなキヤラクターの女へまづカチンと反発しちやつたのだつてことは、本当は分かっている（彼自身は気づいているのかな？）。

でもまあ、許すことにした。彼は、少なくとも公共の場で喫煙を注意されて腹を立てるのは、紳士たるべき態度ではないと、とつおいつ考えた末自ら納得したようだったから。

食堂で遭遇した紳士は、たぶんみんなから尊敬されている人で、他人から行動をうんぬんされたことなど皆無だったのだろう。知性もある、温厚そうな人だったから。あの時は隣の女にムカッただろうが、「やつぱりいいすぎちゃったかな」と、ほんの少し思つてくれていればなあと思う。

## 代理人を定めておこう

東京都板橋区 岡 博之

前号一三〇頁以下の、山田さんの痛切な文章を繰り返し読みました。

患者自身が意思を表明できない場合にも、本人の意思に沿った医療が行われることが、何よりも重要だと思えます。「延命治療はやめてほしい」という自己決定も、「あらゆる手段を用いて一秒でも長く生かしてほしい」という自己決定も、等しく尊重されなければなりません。

そのためには、自分が意思を表明できなくなった場合に、医師の説明を受けて医療に関する決定を下す代理人を、元気なうちに定めておくことが有効であると思われます。

勿論、代理人になつてもらふ人は、本人の生き方（死の迎え方も含みます）を十分に理解している人が望ましく、そのような代理人の役目を引き受ける

ことを承諾している必要があります。

しかし、今日の社会では、私的な文書などで代理人を定めておくだけでは、本人の意思を実現してもらえないかどうか、かなり気がかりな面があります。例えば、親友を代理人と定めていても、家族の介入により代理人としての役割の遂行が妨げられるおそれがあります。また、延命治療を望まないという本人の意思は明確だったと代理人が力説しても、殺人罪としての訴追などを恐れて、医師が延命治療の中止を



拒むことも考えられます。

こう考えてくると、前記のような代理人につき、法律できちんとした制度を作り、代理人を通じて自分の望む医療を選ぶ権利を、公的に保障する必要があります。

ハリー・ポッター、こんなに流行っていいかしら？

東京都武蔵野市 斉藤きよみ

私は、ハリー・ポッターは大好きである。なにしろ、子供はもちろんのこと、私のような、いい年の大人までを魅了してやまなかった。ダ・ヴィンチという本の雑誌による二〇〇〇年のブックランキングにおいて、第一作の『ハリー・ポッターと賢者の石』は、総合ランキング第一位、第二作の『ハリー・ポッターと秘密の部屋』も一位にくいこんでいる。海外文学部門では、一位と四位。この雑誌は、子供を対象読者に行っているものではないの

で、この作品が、大人の鑑賞にも十分耐え得ることがおわかりになるだろう。

海外においても、トータルで四〇〇〇万部に達するベストセラー、まさに魔法！

我が家では、私が最初にハマリ、次は娘（小六）が夢中になり、あの厚い本を一晚で読破。私も、三日で読み終えた。作者J・K・ローリングのお膝元イギリスのロンドンでは、発売日当日、本屋の前に長蛇の列ができたそうである。



確かにおもしろい。次から次へと、いろいろなできごとが起こり、最初から最後までハラハラドキドキ。話の展開もスピーディーで、つりこまれるように読んでいくと、いつのまにか最後のページにたどりついているといった具合。

これって、何かに似てるなあと、ちよつと考えてみて、思い出したのが、かのハリソン・フォード主演の映画、『インディ・ジョーンズ』だった。

シリーズで、何作が続いたが、そのものすごく早い展開に、この映画は、別名ジェットコースタームービーと言われたそうである。ハリー・ポッターは、さしずめジェットコースターノベルとでもいうところだろうか。

これほどに多くの人を引き付けたのは、こんなところに理由がありそうな気がする。何でもスピーディーに処理されることをよしとする今の時代にびったりだからこそ、全世界でこれほどに受け入れられたのではないだろうか。だとしたら、この作品がこんなに

流行ったことって、いいことなのか、悪いことなのか。

私には、功罪相半ばしているように思われてならない。

一気に読めてしまうぶん、じつくり味わうということがない。その必要も感じられない。えらそうなことをいわせていたくなら、深みがない。そんなものが大流行する今の世の中も、同じだからなのか。ゆっくり散歩をするように、時々立ち止まってはふりかえって考えるような読み方では駄目なのだろうか。子供の本って、むしろそんなもののほうが、あとあと心に残るように思えるのは、私の偏見だろうか？ そう考えると、この大流行が、ちよつと恐ろしいもののようにも感じられてくるのだ。

ただ、活字離れが言われるようになって久しい昨今、ヴィジュアルなものから、活字へと子供たちをいざなった功績も、また大きいと言わざるを得ない。

ホスピスでむかえる死



大沢周子著  
文藝春秋  
本体1476円+税

横浜甦生病院ホスピス病棟に入つて心安らかに最期を迎えた七人の生きざま、死にざまが、家族の思いと共に温かい筆致で克明に綴られている。

ここに来るまでは一様に、病苦や抗がん剤治療の副作用などと壮絶な闘いを強いられ、気丈な女性も屈強な男性も心身がボロボロに碎かれていくさまは悲痛の極みだ。が、ホスピスに入れば即座に痛みを取り除いてもらえる。

ホスピス内の濃やかな気配りに比して、一般病院の非情な扱いが、図らずも浮き彫りになっている。我が身の行く末を自分で選び取るために、ぜひとも必要な一冊である。巻末には全国ホスピスリストと実用情報も。(早)

定年、気がつけば二人旅



吉武輝子著  
ミネルヴァ書房  
本体2000円+税

長年 壮年期以降の夫婦關係をテーマとしてきた著者が、「定年後の夫の生き方、妻の生き方」と題した、豪華船での洋上講座を行った。

そこに参加した人々の抱える問題について、著者自身の人生を振り返りつつ、新しい夫婦関係を考えていく。

夫と疎遠な関係だったこと。その夫が去年亡くなったこと。また、両親のこと、父の自殺など、自らの体験を語ることで生きることの意味を問う。

「定年後こそ人生の本番。夫も妻も横並びの關係を紡いでいくこと」と説くその根底には、男女の意識の変革と社会構造の変革を切望する、著者の思いが込められた力作である。

（神）

悟りのおじいさん、きらきらのおばあさん



小川有里 著  
日新報道  
本体1500+税

——おじいさんとおばあさんは年を重ねるに連れ、ますます仲が悪くなってきました。すぐ、けんかになり——

出ました！ 高齢化社会にふさわしい踊るじじはばば童話。雑誌連載十二年分の中から選んだ陽気な毒入りショートショート六十編。「お叫び袋」「二人だけの秘密」「鬼嫁ブルース」「春だから」等々。面白い。むふふ、ぐふふと、ちよっぴり陰にこもって楽しめるのがミソ。気分転換したい人、笑いが欲しい人に特におすすめです。

お人好しで欲のないじじ、トシを忘れて生を謳歌する元氣なばば、という組み合わせが多いのは著者の生活の投影でありましょうか!?

(小)



# あーっ、腹が立つ！

東京都足立区

須賀まり子（49歳）

「何か変なんだよ」。日曜の早朝、庭の犬舎の方から、母に話しかけている兄の声が聞こえてきた。まだベッドの中で半分夢心地の私だったが、なぜかその言葉が耳に入り、反射的に飛び起きた。

この一か月ほど、隣の実家の兄は日覚めが早くなり、朝から散歩に出るようになった。私が世話をしているボクサー犬のリキ（オス九歳）を連れて、三十分ほど歩いてくる。

「変だ」というのは多分リキのことだろうと、ピンときた。着替えをする

手がかすかにふるえ、鼓動が速くなるのが分かる。

ゆうべまで元氣そうにしていたリキだが、母犬を三年前に、そして兄弟のロッキーを今年二月に亡くしている。「変だ」というだけで私はサアーツと胸騒ぎに襲われる。ともかく身支度もそこそこに外へと飛び出した。

犬舎の中で、リキはお座りをしたまま動かなかった。朝一番、いつも犬舎内の掃除をしてくれている八十歳にな

る母が、リキの背中をさすっていた。「リキ、どうしちゃったの」。体を両

手で抱くように触ってみると冷たく、体温が下がっているのが感じ取れた。口の中も白っぽく、血色が薄れている。

とっさに思いつくのは、心臓疾患か？ 掌を心臓部分に当てても、素人の私には心音の乱れなど分かるはずもない。「獣医！」と思ったが、朝の六時ではそれも無理だ。

とにかく冷えた体を温めよう。獣医を呼べる時間まで、どうにかしのがなくてはいけない。バスタオルでリキの体をくるむと、背中、胸、脇腹等を母と二人でさすった。

しばらくすると、リキはお座りをしているのも辛そうに見え、母と抱えるようにしてマットの上に横たわらせた。目の表情に力がなくなり、ますます心配な状態に思える。

「リキ」、「リキ」、母と名前を呼びながら体中をさすり続けた。電気ストーブで室内を温め、背中にはホカロンを当て、体温が上がるのを願った。渴いた口を砂糖水（脱水症状を起こした時に飲ませると良い）で濡らす。体温が上がり、脱水症状を免れれば、多分安全圏に入れる。後は病院が開くのを待

ち、獣医に診てもらうしかない。

八時。どこか連絡がつくのを願って、近くの獣医何軒かに電話をしたが、どこも出る様子はなかった。一軒だけ休日診療をやっている所を知っているが、若くて頼りないので気が進まない。しかしこの際、そう贅沢も言っていられない。「至急往診お願いします」と私は留守電にメッセージを入れた。一度かかったことがあるのでそれが強みだ。

八時半、頼みの電話がかかってきた。往診してくれると言う。前回診てもら

った時から二年近く経っているのに、少しは腕も上がって、それなりに的確な処置をしてくれるだろう、との期待をわずかに持った。

だが……。

S 獣医は大きい犬が怖いのか、聴診器を当てるのもそこそこにすぐリキから離れた。目や口の中や被毛の状態など、チェックすべき箇所がたくさんあるので、ろくろく触りもしない。

体温は三七度五分。「低いですね」と言いながら、「心臓も考えられるけど、歩けないのは腰がやられているのかもしれない」と何ともの外れな診断を下す。腰を診たいから立たせてくれと言うので、私と母は、自力で立てないリキを抱き抱えるようにして、必死に立たせた。S 獣医は腰や後ろ足をあれこれ触りながら、「やっぱ、腰が悪いんだ。ほら、足の返りが悪いでしょ」ともつともな口振りで足元を指す。リキの爪先を内側に折って、パツと返らないからだと言う。

この先生は何馬鹿なことを言ってる



んだらう、私は呆れ顔で見上げた。自力で立てないほど弱っている犬に、そんな反射神経が働くと思うのだからか。人間だって、発作を起こして立つことも出来ない状態であれば、全身の反射神経もかなり鈍っているはずだ。

さらにS獣医は、「入院させて検査をしないと分からない」と急を要するリキの容体がまだ理解できない様子だ。下手に動かせば、逆に命取りになるかもしれない。「入院はさせたくありません」と私はきっぱり言った。素人目にも心臓では？ と思えるのに、恥ずかしげもなく腰が悪いと言ってはばからない医者、とても預けることなど出来ない。

今年二月、リキと兄弟のロッキーを、抗生物質の過剰投与による急性腎不全で死なせてしまったばかりだ。投与が長すぎるのではないかと医師の判断に疑問を持ちながらも、指示に従ってしまった。何故あの時、自分の判断を信じたかったのだから、ロッキーを守ってあげられなかったのだから、と振り

返る度に未だ胸がえぐられる思いがする。

大きな犠牲を払ってしまった経験をも、また医師の言葉に負けて、みすみす無にするわけにはいかない。

「応急処置的に今何か出来ることはありませんか」。強心剤でも打ってくれないだろうかと思いつながら、そう水を向けてみたが、「ありません」と敵はあつさり言い放った。

「とにかく、血液検査だけしときますから」死に瀕している時に、何の処置もせずに、何を悠長なことを言ってるんだらう、と私は苛立ちと同時に呆れ果てていた。

検査、検査、と今の若い医師は検査をしなければ自分の力ではなにも判断が付かない。自分の目で見、手で触れる。自らの感覚を研ぎ澄まし、生命の息づかいにちつとも耳を傾けようとしなさい。機械や数値ばかりに頼って、聴診器が飾りになってしまっている。

結局、体温を計り、採血をしただけで帰っていった。何のアドバイスも処

置もなく、涼しい顔をして帰っていった。

とんでもない往診の結果に、もう頼みの綱は府中のM獣医しかないかと慌てて受話器を取った。リキが子どもの頃から主治医なのだが、片道二時間の通院がシンドくて、近くに信頼出来る獣医を探そうとしていたのだ。

「容体からして、心臓肥大による発作だと思うので、人間用の『救心』を飲ませてごらんなさい。多分それでぐつと良くなると思うから。それと水分を忘れないで」、とてきぱきした指示が返ってきた。（やっぱり、どう見ても心臓だよね）。S獣医に従わなくてよかった、とつくづく胸を撫で下ろした。

M獣医の指示のお陰で、正午過ぎには、リキは自力で歩けるようになった。だが、心臓発作の後には体力の消耗が激しいとのこと、夕方までこんなこと眠り続けるのだった。

一命を取り留め、リキはどうにか回復の兆しにある。翌日、府中まで行き、レントゲンや心電図などの検査を受

け、心臓肥大であることが確認された。この先、心臓の薬は欠かせないのとのだ。

その日の夕方、往診してもらったS獣医の所に診療代の支払いに向いた。昨日、採血して帰った十五分後位に電話があり、こう私は告げられていた。「血液検査の結果は特に異常はありませんでしたが、体温が低いことと、九歳という年齢からして、死が近づいているということですから、かかりつけの医師に見てもらってください」

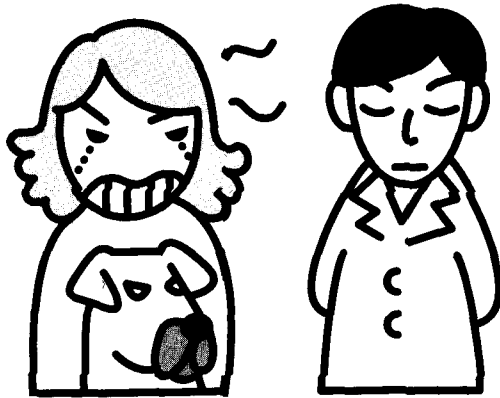
入院を拒否したことで、自分の診療方針に従えないのなら見られない、という意味か。それとも、危険な状態に陥っている犬を見る自信がないからか。

M獣医と連絡が取れた直後だったので、私に動揺はなかったが、そうでなかったら途方に暮れていたかもしれない。

支払いの時、「見てもらいましたか」と聞くので、「はい、やはり心臓肥大でした」と腰が悪いと主張していたS

獣医を直視した。すると彼は臆面もなく、「そうでしょう!」とまるで自分の見立て通りと言わんばかりの口調で、スツと診療室に姿を消した。

傍に患者が二人と二匹いたので、自



分の能力を誇示するためについ嘘をついたという節もあるが、開いた口が塞がらないとはまさにこのことだ。考えられない厚顔ぶりに、ムカッと腹の中は煮えくり返った。厭味の一つも言

いたところを、私はグツとこらえて病院を出た。

「あーっ、腹が立つ!」。何で医者ってこうなんだろう。

人間についてさえ医療事故や医療ミスが後を絶たない今日この頃。原因はいろいろと取りざたされているが、根本的な原因はこういった医師の人間性ではないかと思えてならない。誤った判断にも、涼しい顔で自分を正当化してしまう。

多くが、勉強さえしていればいいと育ってきた人たちだ。求められる倫理感、人間哲学など希薄であつても、それは点数には出て来ない。そんなかれらの価値観によって医療現場では物事が決定されていく。考えてみれば恐ろしいことではないか。

もう二度とS獣医の所に行くことはないと思うが、何故かあの病院、結構繁盛しているのだ。「あーっ、やっぱり腹が立つ!」。

(え・イシノフミ)

# 子育てフォーラム

NMSのページ



## 二人目はいらない？

川崎市多摩区

鈴木貴子

現在、息子は二歳。普通だったら二人目を考える時期かもしれないが、今はあまり考えられない。夫の帰りは遅い、他人には頼れない、たった一人で育児しなければならぬ現在の状況を考えて、もう少し手がかからなくなつてからとつい先延ばしにしたい気持ちが強くなる。

もちろん、同じ状況で二人以上子どもを育てているお母さんはたくさんいる。甘い！と言われれば何も言えない。

い。決して欲しくないわけではない。

でもなかなか踏み切れない。同じくらいの子をもつママをたくさん知っているが、二人目を妊娠中、あるいは欲しい、考えているというママはほとんどいない。今はひとりで手一杯ということのみな口々に言っている。

そして同じ公園に集うママたちの間で蔓延しているのが、「再就職したい」病である。実は公園ママの一人であるY子さんが、この地域では絶対に入れないといわれていた保育園に運よく子どもを入れられ、パートだが仕事も見つけることができた。

それだけなら「よかったね」で終わるところだが、彼女の勤務は毎日では

なく、家が公園のすぐ近くなためその後も一人でよく顔を出す。Y子ママの「保育園つてすごくいいよ。やっぱ子どもには集団生活がいいみたい。あの子も楽しくつてしようがないですよ。栄養バランスのいい食事も作ってもらえるし、おむつはずしもやってもらえるのよね」というような保育園自慢を延々と聞かされ、「やっぱ仕事をして社会と関わりをもたなきゃね」などと言われると、みな密室育児にどっぷりと漬かっているため、「このままでいいのだろうか」と一様に思ってしまうのも無理はない。

しかし再就職となると二人目はまずあきらめなければならない。産休の取

れる正社員になれば問題は無いのだが、この不況下でそれはまず難しい。パートであれば妊娠したらまず辞めなければならぬ。仕事をしていなければ保育園は出なければならぬ。また保育料というのがとても高い。認可保育園に入ればまだいいが、無認可となるとさらに高い。

扶養範囲で働く場合はせいぜい月六、七万稼げればいい方。大抵の人は



収入の半分かそれ以上を保育料に取られることになる。これが二人預けるとなると赤字は覚悟。一人しか預けていないY子ママも実際のところ手元にくらも残らないらしい。それでも「働くのは楽しい、子どもとべったり一緒にいるよりはいい」と彼女は言い、公園ママの中にも職探しを始める人が出始めてきた。

働くことはいいと私も思う。働きたいともんもんとしているようでは、子育てにもいい影響を与えないだろうし、だったら行動に出てしまった方がよっぽどいいと思う。

しかし、「働きたい」ママたちの「子どもと離れたいから預けたい」「おむつはずしも面倒だからやってもらいたい」という声を聞くと、「じゃあなんのために子どもを産んだの？ 子どもなんて作らないですつと働いていればよかったんじゃないの？」ともいいなくなる。

本当は仕事を続けたかったのに、出産で辞めざるを得なかった人がとても

多い。その不平不満が、うまくいかない子育てから心が離れていく原因なのだろうか。

また確かに一日中子どもと一緒にいて、自由な時間がないのはつらい。私自身も離れたいという気持ちも時々芽生える。それは否定できない。楽しいはずの子育てなのに、どうしてそう思えてしまうのだろうか。みんな好きで子どもを産んだはずなのに。

しかし子どもの予防接種も忘れて仕事探しに奔走しているママをみていると「ちょっと違う」とも思えてくる。この「再就職したい病」のおかげで二人目の話題は完全にタブーになってしまった。こんな現象はこの公園だけだと思いたいけれど……。

女性が、もっと仕事をずっと続けられる社会にしないと、子どもは増えないのを身を持って感じることもあった。

しかしその後、誰かが再就職したという話は聞かない。聞いてみると「条件が合わなくて……」（そんな仕事な

いだろうというようなどんでもなくわがままな条件だったりする)。

「だんながいい顔しないし……」

「うちの子は人見知りでしょう。預けるのはかわいそうかなあとと思って」とごちゃごちゃいいわけが出てくる。

やはりそこまで誰も真剣ではなかったということか。ただ育児だけの毎日に鬱屈していて、ちよつとした風穴が欲しかったというだけなのだろうか。

しかし、二人目を妊娠したという話もきかない。

## 最後まで あきらめないこと

埼玉県新座市 野田めぐみ

「最後まであきらめちゃだめだよ」

と子供に声をかけた。でも、心の中で問いかけた。「嘘っぽい。偉そうにそんなこといつているけど、あんたはどうなの」学校恒例、特久走大会はもう明日に迫っていた。

「Yくん速いんだもん。おれが、いつも練習で先に走ってても、最後にばあーっと抜かされるんだ」「Yくんの次でいいよ」弱気なことを言う。

勝てないにしても、頑張ろうという意志がちつとも見えない様子にもものすごく苛立つ。

そんなもんなのか？ 小学一年生の子供に「やる気だ」「気力だ」といったところで、ピンとこないのかもしれない。もともと生まれ持った、あまり負けず嫌いではない、という性格ゆえなのだろうか。まあ、私もあまり人のことは言えない。「なにくそ！」の気持ち足りないし。自分のことは棚に上げ、結果をもとめるのはいつものこと。頭でわかってはいても、気持ちばかり高ぶり、「結果がすべて」と子供を責め続ける自分がいる。

「頑張ってね、力いっぱい走るんだよ」それ意外の言葉をかけないよう自制した。本当は言いたかったのに。「絶対勝つんだ」という言葉を。

「バーン」とスタートの合図。いっせ

いに走りだした。「Yくんの後ろだ。それでいいから、離されないように行けー。あー、何で後ろ見てんの。真っすぐ前を見ろー。真剣に走れ！」大声で叫び続ける母。目の前を通るたびに「行けー、行けー」さっきまでの控えめな親のフリはいずこ。応援も最高潮を迎え、走りも終盤。相変わらずYくんの後ろだ。もうこれじゃ抜けないな。ゴールはすぐだし。

でも、よく走ったよ。「うん、うん、よくやった」と懸命に走る子供の姿を見て満足。すでに私の中でレースは終わっていた。

「わー」歓声が上がった。「頑張れ、走れ」の声も聞こえる。息子だった。声援を受け、後ろから迫ってくる者を振り切るように、前に追いつくように猛然と最後のダッシュ。と、ずっと抜けないでいたYくんのスピードが、少し落ちたと思った瞬間、ほぼ同時にゴール。再び「わー」と歓声が上がった。「二位？ 勝つたの？」にこにこしながらYくんより少し先があるき、一緒

にしゃべっている。満面の笑みを浮かべながらこつちを見た。その笑顔で「そうかー、一位になったんだ」とわかった。よかった、よかった。

会う人、会う人「速かったね」「すごいね」「大逆転。ヒーローだったね」と言ってくれる。わが子を誉められて嬉しくないはずがない。目茶苦茶嬉しくて小躍りしそうだった。私自身が勝ち、ヒロインにでもなったような気持ちでいた。時間がたつにつれ、あまりの嬉しさに忘れていたことを思い出した。頑張ったのは子供。私じゃない。

子供Ⅱ母親という図式にとらわれ、子供の一挙手一投足に神経をつかい、他人に子供も私もどう思われている？どんな母親に見える？ばかりを気にしていた、ついこの間までの子供の幼稚園時代。結果がすべてと責めるのも、結局は、私がい母親に見られたい願望があるから。子供の多少のケンカにも目を光らせ、我が子を必要以上に監視し、叱り、沸き上がるイライラを子供にぶつける。その後ろめたさから、

過食、落ち込み、また、子供にあたるという悪循環を繰り返していた。人と関わらなければ嫌な思いをしなくてすむと、子供を巻き込み家に閉じこもっていたこともあった。

今は、母子密着から脱し、それぞれの時間・世界が増えてきている。どう



見られている？は少しずつ減ってきてはいるものの、子供を持つ母親である限り愚かな葛藤は続く。

でも、頭抱えることばかりの毎日ではない。「最後まであきらめずに頑張れば逆転もある」ということを身を持って教えてくれた。感動もくれた。

今は素直に喜ぼう。私もあきらめないで、めげないで自分のやりたいことを目指そう。子供に恥ずかしくないように。

## 二番目の子どもが やってきた

横浜市戸塚区 杉田みほ

藍は、野歩と対照的です。たいていのものを残さず食べる、眠くなったら自分で蒲団をかけて寝てしまう、子どもたちが遊んでいると喜んで入っていく……といったところは共通していますが、NMSにもとづいて育ててきたおかげもあるかな、と思うのですが、生

まれ持った個性はおもしろいほど違います。身体は小さめ（野歩は大きい）、行動は大胆（野歩は慎重）、気の強そうな顔立ち（野歩はいかにも穏やか）。下の子は、上の子とは違う方法で親の関心を引きつけようとするらしいけれど、そうやってますます対照的な性格になってきているのでしょうか。

おもちゃの取り合いや、母親がよその子をかまっているときのやきもち。歩けるようになった子供を遊ばせに連れていくと、お友達とのトラブルに気が気ではないと言うお母さんたちの多い中、「野歩君はいいねえ。おもちゃをとられても怒ったり泣いたりしないで、他のもので遊び始める。なのに、相手の子が飽きて手放したところを見計らって、ちゃんと手に入れてるの。なんていうか、上手だよね」。野歩が公園で泣いたりお友達を泣かせたりしたことは、ほとんどありません。

三歳になる少し前、お隣のA君を預かったときのこと、野歩はお友達が来たのがうれしくて、次々とおもちゃを

出しては説明してあげていました。A君がおもちゃの線路を独り占めしたり、お母さんと離れた不安から私に甘えていても、仕方ないな、といった素振りで自分は別のおもちゃで遊びながら、楽しさを振りまくサービスぶり。

二日後、今度は野歩がA君の家へ遊びに。いつも迎えに行ってもなかなか帰ろうとしないのに、この日はまもなく泣きながら帰ってきました。「A君がおもちゃを貸してくれない」と。まあ、そんなこともあるよね、どうせすぐにまた一緒に遊びたくなるだろう、と氣にとめずにいたら、その翌日、藍に向かつて「だめっ！ 貸さない！」。野歩の初めてのイジワルです。

別のおもちゃに手を伸ばせば、また「だめっ！」のくり返し。止めに入りたい気持ちを抑え黙って見ていると、じきに藍が泣き出しました。まだ歩き始めたばかりの藍は、その場で座ったまま泣いています。少したって、これじゃつまらない、とさとしたのか、野歩は「はい、藍ちゃん！」とおもちゃ

を一つ手渡しました。

他方、藍は目標に向かつてまっしぐら、家の中では甘えん坊ですぐに泣いて主張します。

たとえば野歩が私の膝の上にいるのを見つけると、力ずくで押し退けて自分乗ろうとする（もう一人生まれたらどうなるのだろうとちよつと心配）。そんなとき、野歩が藍の頭を撫でてやったりするので思わず藍も機嫌よくなくて……という様子に微笑んだものですが、毎度のこと、野歩もうんざりしたのでしょう。次第に争うようになってしまいました。

が、近頃私のお腹が大きくなってきたので、膝の取り合いをされるのもたまりません。「痛いなあ、もうやめて」。立ち上がろうとする私にむりやりよじ上ってくる藍を見かねて、やつぱり野歩が助け船を出してくれるのです。「藍ちゃん、野歩に抱っこしよう」と。野歩の膝に座って頭を撫でられると藍は満足し、二人仲良く遊び出します。時々イジワルするけれど、決して怒ら

ないこのアニキの姿に、「うるさい!」「痛い!」と怒っては頑なにさせるばかりの母親(私)はしばし反省。

先日、買い物に行こうと外に出たら雨が降りだしました。傘をさし、ベビーカーを押し、手をつないで出かけるのは結構大変。しかも妊娠八か月。急ぎの用事はないから今日はやめよう



ね、と引き返すことにしました。野歩は「雨だからしょうがないよね」と歩き出したものの、ベビーカーの上の藍は大騒ぎ。外に行きたい一心で、のけぞって声を張り上げています。

あまりの泣き声に、マンションの管理人さんが出てきました。幼児虐待が社会問題となっているから、様子を見に来たのでしょう。「何かあったんですか、さつきから泣いてますけど」

二人とも(外では特に)めったに泣かず、「いつも機嫌がいいね」と感心される子です。でも、泣くときにはすごい。人一倍大きな声で、一歩も引かないぞともいうように、ひっくり返って泣き続けます。時には十分以上も続く泣き声に、こちらの気持ちも揺れますが、あきらめがつけば二人ともケロッとしたもの。以後、同じ理由で泣くことはなくなり、その結果「いつも機嫌のいい子」と言われているのです。だけど……。子どもが泣けば「あらあら、どうしたの?」とおもちゃやお菓子を差し出す人の多い世の中。泣か

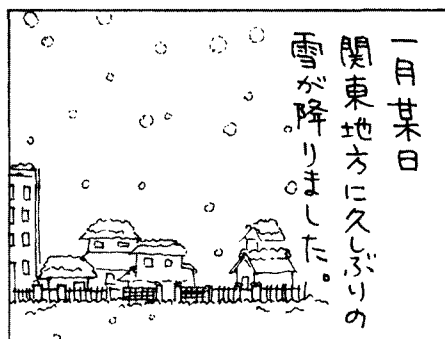
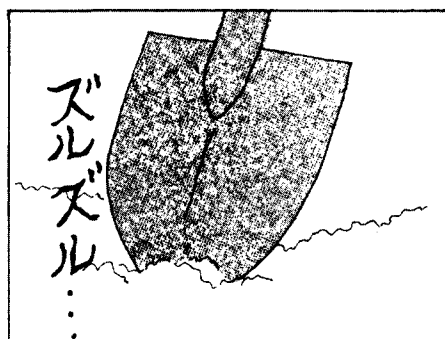
せ続けていると「迷惑かしら」と思うより「虐待?」と見られているのではないかと、人目が気になってしまします。

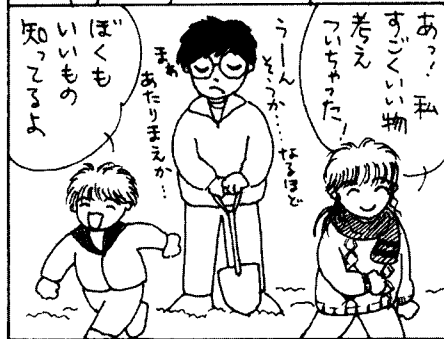
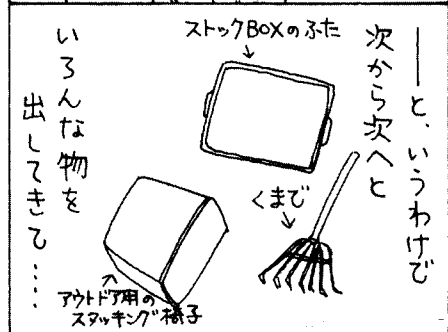
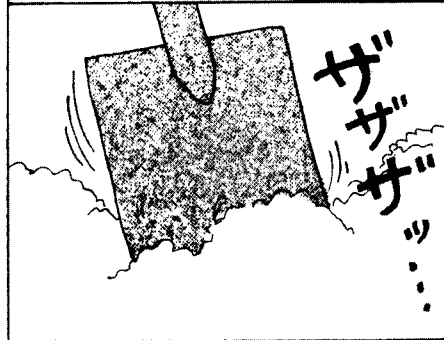
野歩も泣き声の大きさでは並々ならないのですが、コレ、と思ったときの藍の意志の強さといったら……。

まだつかまり立ちの頃、公園でほかの子が乗っているブランコの下に向かって這っていくのを私が止めたとき、十五分くらい砂利の上でひっくり返って泣いていました。周りにいたお母さんたちはびっくり。普段おもちゃをとられても、少々痛い思いをしても泣かないのを見ているので、「いつもおとなしいと思っていたのに、実はすごいのねえ」。

相手の求めていることに敏感でめったに怒らない野歩と違って、こんなに気が強く、抱っこが大好きで、家の中では泣くことも多い藍を、ちやほや育てていたらどんなに大変なことになっていたでしょう。

(え・西宮さき)





# 情報 コーナー

## ホームページに アイディア募集

ライターの森田千恵です。二

〇〇〇年六月にオープンした再就職ママのためのHP「サバイバル☆ママ」で、左記のようなコーナーを作る予定です。どうぞみなさんふるって体験談・情報をお寄せください。また、こんな項目を作って!というアイディアも募集します。

- 「小学生のママのためのページ」
- \*習い事はどうしてる?
- \*熟は何年生から行くの?
- \*読書好きな子に育てるには

\*おこづかいほどのくらいあげればいいの? 他

はがき、メール、FAXにてご連絡いただければ、所定の用紙をお送りします。

〒184-0011 小金井市東町四一

二二二二二二二〇三

TEL/FAX 042-384-0986

E-mail: QZF05610@nifty.ne.jp

[http://homepage2.nifty.com/S](http://homepage2.nifty.com/SURVIVALMAMA/)

URVIVALMAMA/

## 出版しました

東京都新宿区 林 直美

かつて看護婦だった経験をもとに、本を出版しました。

形成外科病棟を舞台にした、患者さんとナースたちの人間模様といった感じの、面白い内容です。タイトルは、

「看護婦さん 出番ですよ!!」

定価 一三〇〇円 (送料、税別)

問い合わせ 明窓出版

電話 03-3380-8303

FAX 03-3380-6424

ホームページ <http://meisou.com>

一般書店でも購入できますので、よろしく。

## 就職率の高さは抜群!

女性のためのビジネススクール

アイムバーソナルカレッジ

本科コース12期生募集開始!

実践を取り入れた現場第一主

義の参加型の授業を展開、毎年多数のプロを輩出。「わいふ」を経てアイムに入校、プロのライターや編集者になった人や、ケ

アマネージャー、スクールカウンセラーなどで活躍中の方も。

▼本科 A/ライター・編集者養成 C/カウンセラー養成

▼期間 四月開講/週一回一年

▼時間 A木曜18時半~21時半

C木曜10時~13時

▼受講料年28万円(入学金含)

▼場所 乃木坂駅より徒歩一分

▼無料体験勉強会・学校説明会

2月21日・3月13日/両日共

A 19時~21時半 C 10時~13時

▼問い合わせアイムバーソナル

カレッジ 港区南青山1-26-5

03-5410-5464

## 母の書いた随筆の本を 差し上げます

「わいふ」編集長 田中喜美子

今から六五年前の昭和十年から三年間、私の母は父の赴任先のロンドンで暮らしていました。

その時の体験を一冊にまとめたのが「倫敦(ロンドン)の家」という随筆集です。今読んでも

実に面白く、このままではもったいないと複製版を作りました。ご希望の方には差し上げますので、二四〇円切手を張った返信封筒(わいふが入るくらいの)を同封の上、編集部までお申し

込みください。

# 私も ひとつと

おかあさんごっこ

千葉市若葉区 小山佳世子

二人の娘たちはおかあさんごっこが大好きだ。携帯電話もメールも出てくる現代のおかあさんごっこ。時には厳しく、時には優しい言葉がとびかう。私は二人のおかあさんごっこを見るのが好きだ。まるで自分を見ているようだから。

二十一世紀に伝えていきたいものの一つだと、私も主人も思っている。

まだいける？

アメリカ リトルロック市 伊藤琴子

つい三か月前までは灼熱の風が吹いていたというのに、最近では雪がちらついたりする。冬の乾燥はお肌に悪いのよね。しわとか白髪とか気になる四十代の私。肥満だし……。

社会学概説の授業中十九歳のトムと十七歳のマイクが裸の女性像を描いていたので「これっ」と叱り取り上げた。「誰？」と聞いたらマイクは一言「先生」。えええー。セクハラじゃなか！でも少し嬉しかったのも事実。

星がきれいだよ!!

東京都世田谷区 太田啓子

「今日、星がすっごくきれいだよ!!」木枯らしの吹く夜、塾から戻った中三の息子が息をはずませながら言った。星空が、受験勉強で少し荒んだ息子の心をいやしてくれたのだろうか。彼の笑顔がうれしかった。二十一世紀まであとわずか。未来を生きる子供達が、いつまでも美しい地球を愛し続けていられるように、今を生きる大人達が、全力で地球を守っていかねばと、切に思う。

着物盗られた

東京都文京区 トト安田

タンスの中を調べながら、「やっぱりあの着物盗られた!」とおばあさん。「エッ! ウッソー」と私。「盗った人はわかってる」「じゃあ、その人に返してもらったら」「言っても返してくれないの。だから警察へ行っちゃ」おばあさんは真顔です。実際、警察へ行ったらしい。以前もこういうことありました。今のところ、ヘルパーの私のせいにされることはないのですが……。

希少価値?

静岡県小笠郡 鴨川典子(46)

血液型がRH(一)ということは、中学生の頃からわかっていて、三度の出産の時もやや苦労したが、半年前に献血した時、A型だと五〇〇人にひとりと言われて驚いた。二〇〇人にひとりと思ひこんでいたのだ。

事故や病気で輸血が必要となったら、「コト」である。が、いつ何とき人様のお世話になるかわからない。機会を捉えて、なるべく献血協力することに決めた。

## 賞金はなし

東京都世田谷区 後藤 晶

三年前、初めて出して一席をもらった「世田谷文学賞・随筆部門」。次の年は気負いすぎて書けず選外。次の年もだめだったが、選評で「最後まで残った作品」だったと知り、思わず「アッ」と声を上げた。(図書館で)。そして今年、「三席」との通知があった。以前の座談会のテーマだった「方言」について徹夜で(一晩で)書いたもの。

『文芸せたがや』四月発売に載ります。

## 残された時

東京都足立区 須賀まり子

八十歳の母が悪性リンパ腫と闘っている。「動けるうちは家にいたい」。母の希望で通院治療している。チーフの取れなくなった髪になっても笑顔を保ち、早朝から犬舎の掃除や落ち葉掃きなどよく働く。

愛犬と母と私との毎朝の散歩は長年の日課。草花を眺め、他愛ないおしゃべりに興じる。進行の速い病魔に、残り少ない母との水入らずの時間、一日一日大切に噛みしめている。

## 夫婦の会話

長野県小県郡 花岡京子

夕食後ねむっている猫を見て、  
夫「おいはいいいなー。仕事もしないで朝からねてばかりで」と言った。

私「猫の仕事って、ねずみを取ることに？」  
夫「うん」

私「いやだー。今の猫の仕事はねずみを取ることにゃないのよ。人間を癒すというもって高貴な仕事をしているのよ」  
夫「……」

## どろろがいの。

神奈川県中郡 石井しのぶ(41歳)

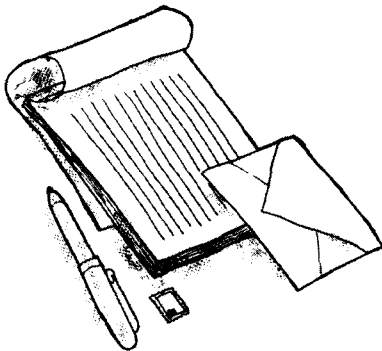
子供が熱を出した時、どこの小児科に連れていこうかいつも迷う。近くの小児科はいつもすいていて待ち時間が少なくすむが、薬の効き目とそっけない先生の態度が気になる。車で三〇分かかる小児科の先生は診察が丁寧で知識も豊富で、とても信頼がおけるのだが、二時間近く待たされる。熱に苦しむ子供の負担にならないようにと、結局近くの医院に行くのだが、これでいいのだろうか。

## 結婚十一年目の真実？

埼玉県新座市 野田めぐみ

「愛だけじゃ、食べていけないよ」亡き母は、結婚まじかの私に言い放った。

今、サイコーに苦しい。日々の暮らしはどうにかなくても、少し先のことは暗闇だ。この現実には「くそー、もー」と何もかも放り出したくなる。怒りは夫へ向かう。何で、私一人悩まないといけないと思うと腹立たしさ倍増。夫の全てにケチをつけたくなる。愛も心とお金に余裕がないと消え去るものだった?!



「母と子」 2月号 (定価500円/送料68円)

# 〈今月の視点〉 土佐の教育改革は今 生徒参加で開かれた学校づくり

山下 正寿  
&平湯 紘一

—教育行政のあり方や子どもの権利条約への理解など課題は多い—

〔私は獣医師〕 オオタカの住む森 渡 真紀

幼児と遊ぶ 5歳児のけんか、それから 有吉 有巳子

子どもの権利条約を考える 山田 雅康&編集部  
コントロールを失った「嫌い」「憎悪」 —正当化する原因とそのプロセス—

〔メディア時代のウロウロ記〕 「捨てる」は関係を絶つこと 柳 史子

〔子どもと学校図書館〕 学校図書館はどこへ行く 有吉 末充

〔コミュニケーションのこころ〕 母親になること、母親でいること 猪股 富美子

〔国際交流シリーズ〕 さんしんカッコーイーネー バイロン・ジョンズさんに聞く

203-0054 東久留米市中央町5-4-8 電話0424-74-9125 母と子社



婦 人 民 主 新 聞  
WOMEN'S DEMOCRATIC JOURNAL

からだのしんぱいはたらくもんだいこころのえいようさべつへのいかりアジアのうごき、あんぜんてなに？きのうまでのみちあしたへのみちわたしのいけんあなたのいけんおんなといふちから。

創立以来、無党派の立場で50年。  
女の視点で創る。もうひとつのメディア。

東京都渋谷区神宮前3-31-18-301 大阪府協 大阪市北区中崎西3-1-5  
TEL 03(3402)3244,3238 TEL 06(371)2429  
FAX 03(3401)3453

見本紙 お届けします。お問い合わせ下さい。

草の根は  
伸びつづける。

世の中に？も  
もち始めた  
男たちにも。

新聞代  
(送料込)  
1ヶ月 750円  
3ヶ月 2,250円  
6ヶ月 4,500円  
1年 9,000円

毎月・5日・15日・25日発行

ふえみん婦人民主新聞  
婦人民主クラブ責任編集

私もひとこと  
わいふネット 質問  
わいふネット 答え

(○で囲んでください)

タイトル・住所・氏名

## 本文

私もひとことは、投稿してみたいけど、長いのはチョットという方のためのコーナーです。わいふネットは相談や質問、掲載された質問への答えをお寄せいただくべー

ジです。あなたの声をお待ちしています。  
投稿には、右の原稿用紙をご利用くださ  
い。

●タイトル、住所、氏名は一行めに。もし、

二〇字を超える場合には枠目にこたわらず、小さい字で、住所、氏名は他のコラムを参照してください。

●二行めから本文、全体で九行一八〇字。

[illegible]

# 深

夜、タクシーで帰宅した時である。あいにく細かいお金がなかったので一万円札で支払った。ところが翌日、おつりで受け取ったはずの五千円札がサイフの中になかった。かわりに久しぶりに見る二千円札があった。なるほど世の人々が二千円札を嫌うわけがわかった。それにしても、三千円も損をしちやうた。くやしい！

(成井)

# 「今

年のお正月のお煮物はおいしーいではないよ？」

「ウーン、今までと変わらないよ」  
 全て国産の野菜でダシも化学調味料は使わず、うす味で丁寧に炊いたのに、おいしさだけなら輸入物でも同じなら……。これからは当面、輸入物野菜、国産物でも無農薬でない野菜が食卓に上がりそうだ。十年後、二十年後の息子の体はどうなっているかを気にしつつ。

# 新

年もカヌーで始まりまして。一月三日が漕ぎ初め。

若い仲間と今年の抱負や、下りたい川の名前をあげたり、わいわいと思ひ話にも盛り上がりました。私のカヌーの技術は全然うまくないのだけれど。若い仲間のアドバイスで目下特訓中。年をとっても努力すれば結構うまくなれるのです。そして漕ぎ楽しみも倍増します。今年も漕ぎます。

(水落)

# 巢

立ち、親離れ・子離れ、断髪式や成人式、自立

(結婚・離婚・リストラ) など。これらのことは、生死に関わる程の崖つぶちに立たされるか、谷へ落とされるなどの最悪な状態になった時にやっと真剣に考えることになる。保護の傘の下に置いたら、いつまでも気づかないものだったことを知る。人を育てる親ライオン役は知恵と

るかを気にしつつ。

(野村)

# 「わ

いふ」にはさすがに老人問題の情報がたくさんあって、母はいい老人病院に入院できた。おむつたみの仕事や好きな手芸もスタッフの方々の温かい介護で続けられ、身体もすっかり元気になって、それまでの沈んだようすが嘘のようにニコニコと手を動かしている。幸いに友達もできて、お互いにかばい合いながらリハビリが楽しいと言っている。(望月)

# 今

年の目標の一つとして、西安を訪ねたいと思う。

今まで、発掘された兵馬俑が一堂に会するのを見たいとは思わなかった。中国国宝展の、軍団としてではなく、一個人としての兵士俑を見て考えが変わった。鎧の代わりに厚手の衣服を身に付けた下級兵士の、すべてを運命と諦めたような哀しい目を見た時、つよく惹かれた。やはり全体も見たいなと。

り全体も見たいなと。

(山本)

# 二

十五日の締切りに、遅れて届いた投稿は次号に

また書きたくなり、すでに前のがあるのに重ねて投稿してくる。近ごろダブリ投稿が増えたのはこんな理由ではないかと思う。うっかり見逃して、最後の校正で発見、一騒動だった。規定でダブってもよいコラムに、一度に軒並み投稿する人もある。違反じゃないけど？

(和田)

# 大

晦日の紅白歌合戦、何年かぶりに見たら余りに下手な歌手が多いので驚きました。

その分を過剰なパフォーマンスと照明で補ってうんざり。たまにかねてチャンネルを変えたら過去の大演奏家の思い出番組をやっていて、P・カザルスの最後の国連での「鳥の歌」。魂の震えるような感動を受けました。聴けてよかった！

(田中)

## 「ファム・ポリテイク」より

●「ファム・ポリテイク」の取材を通じて、マスコミが報道を操作してムードを作り出す事実が見えてきて慄然としています。

例えば「ファム」三〇号では石原東京都知事について取り上げましたが、それまで報道された彼の言動のうちもっとも許せないと感じたのは、障害者の療育センターを視察に行ってもらした「ああいう人たちに人格があるのか」という言葉でした。ところが石原氏の発言全体を報道した東京新聞を読んで、あの言葉は文学者としての彼のナイーブな実感から出た不用意な感想であることがわかったのです。

●事実の一部分だけを報道し、他の部分は伏せておくことで、報道はある事柄や人物についてひとつのムード的解釈をひろめ、世論を操作し、動かすことができます。書かれたほうは、別に間違いいではないので抗議することもできません。

新聞に書かれていることはすべて真実と思う私たち。メディア・リテラシーを身につけるのは何と難しいことでしょうか。

## NMS研究会より

●この間妙なご縁で、岸恵子さんと電話で三十分もおしゃべりしてしまいました。一人っ子の娘さんに赤ちゃんがうまれてほんとうに嬉しそうでしたが、娘さんの子育てがまるでNMS方式なので驚きました。

どうして?と聞いてみると、「娘は『ママは私が子供のとき、何ひとつノンと言ったことがなかったでしょ。あれは子供にとっではすごく不安なことなの。いつもいつもウイとはかり言われていたから、自分の行動の何がよくて何が悪いのか、よりどころがなくてほんとに不安だった。だから私は、子供にしているいけないことは絶対、はつきりノンと言う。それからママは、何でも子供に与えようとするけれど、そうしている子供は、ものをもらいう喜びを知らないヒトになってしまうのよ』っていうんですよ」洋の東西をとわず、正しい子育ての基礎はそんなにさまざまあるものではないということを、岸さんの娘さんの言葉は示しているように思います。それにしても賢い娘さんに恵まれた岸さんは幸せですね!

## 老人ホーム情報センター便り

日本人の平均寿命は世界一となりました。しかし喜んでばかりはいられません。それと同時に寝たきり老人、痴呆老人の数も世界一なのです。

欧米諸国の痴呆老人はアルツハイマー型の痴呆が多いそうですが、日本は脳血管障害による痴呆の方が多いのです。

その大きな原因の一つが高血圧による脳血管障害です。高血圧は塩分の取りすぎによることが多く、主な予防法は減塩対策です。

コンビニエンスストアなどの、既成のお弁当やおかずには塩分濃度の高いものがあるそうです。将来を見越した食生活を考えましょう。

●無料電話相談 毎週木曜日

●面接相談もお受けします(有料)。

電話でご予約下さい。

TEL 〇三三三 五二八五四

# 募集します

## 特集テーマ

二九〇号(二〇〇一年六月一日発送)  
の特集テーマは、「女の泥酔・男の泥酔」です。

酒をのんで酔っぱらうということは、大人にのみ許される特権という感じで、思春期の若者には一種のあこがれ。

## 座談会 私も言いたい

二九〇号のテーマは「老後は子どものせわになりたくない——では老人ホームに入りますか」です。

老人介護に苦勞した人はもとより、それを知る五十代、六十代はとも子どものせわにはなれない、なりたくない

## 私の意見・あなたの意見

二八九号のテーマは、「女性議員に投票しますか?」です。

いよいよ参院選、地方選が迫ってきましたが、かつて「ファム・ポリティック」で調査したとき「何も女性議員にとくに肩入れしなくともいい」という

そのなかで、解禁の年齢に達したとき、若者が泥酔して事件を起こすことが往々にしてあります。思春期でなくとも、男女とも、飲みすぎて起こるまづい事件は身近にあるものですよな。ご自分のことでも、家族の誰かのことでもいい、お酒の飲みすぎで起こ

いと思う人が多いようです。では老人ホームに入りますか?と聞かれたら、これまたいたいためらいます。どうしてでしょう? それ以外に選択肢はありませんか? 今回は老後の生活をどうするかについて、しっかりと詰めた話をしたいと思います。

意見をもっている人がとくに二十代女性に多いので驚いたことがあります。た。そういう方たちは、生活のなかでたぶん男女差別をあまり感じたことのない方たちだと思えます。それはそれで結構なこと。

では選挙となるとどうなのか。

た面白い?あるいは悲惨な?事件についてレポートしてくださいませんか。もちろんあなたご自身が、その事件にいかに対処したかも含めて書いてください。

字数 四千字前後

締切 二〇〇一年四月十日

こうしたい、という意見のある方、どうしてもいいのか迷っている方、ぜひご出席を。

日時 二〇〇一年 三月十四日(水)

午後一時~二時半

場所 「わいふ」編集部

申し込みは二月末日までに電話で。

あなたの選挙区の女性議員に一票を投じるかどうかということではなく、一般論としてあなたのご意見をお寄せください。

字数 千字前後

締切 二〇〇一年二月二十五日

定期購読を申し込まれている方はどなたも投稿できます。

投稿の前に以下を必ずお読みください。

## ◆グラフィア「わが家の歴史写真」

どこの御家庭にもある古い写真とその説明をお寄せください。「父・母を語る」「子育てのころ」などのテーマにそつてでも、ただ古い写真を並べても結構です。

お申し込みは電話で編集部まで。

## ◆特集

毎回テーマを設定しています。一四九ページをこらしてください。

## 一六〇〇字のコラム

(どのコラムも字数は目安で、多少長くても内容がよければ掲載します)

## ◆エッセイスト・クラブ

キマった文章、豊かな内容の随筆をお送りください。

## ◆ズバリ一言

オビニオン、評論を。独自の意見で。

## ◆家族のスケッチ

同居、別居を問わず、あなたの家族のことをお書きください。

## ◆子育てフォーラム

おさない子、思春期の子、どんなときも親にとって子どもの存在は気になるもの。あり

のままの関係を描いてみませんか。

## ◆ワーキングライフ

あなたは、どんな働き方をしていますか。さまざまな仕事の喜びや苦勞話を。

## ◆ラブレッド

人生八十年時代。趣味その他、仕事以外に生きがいを持つ方も多はず。あなたは何に夢中ですか。

## ◆フリートーク

どんなテーマでもどうぞ。どのコラムにも当てはまらないテーマの自由なコーナー。

## 八〇〇字のコラム

## ◆あなたへスマッシュ

本誌の投稿や記事についての感想、意見を載せます。何号のどの投稿に対するものかを明記して。

## ◆ことばでハッピー

言葉の使い方はとても難しいですね。時には人間関係をこわしたり。でも発想を変えて工夫することで、お互いの関係をよくすることも可能。失敗談も含めて面白い話題を。

## ◆パソコンワールド

急速に普及し始めたパソコン。楽しんでい

る人、振り回されている人、体験談を。

## ◆読んでよかった

読書感想文のコラム。どんなジャンルのものでも結構です。著者・出版社・出版年月・定価を書くこと。本文は七六八字。

## 四〇〇字のコラム

## ◆笑える！

嫌な話題の多い世の中。思わず笑ってしまう楽しい話を。

## ◆私の意見・あなたの意見

賛成か、反対か。一四九ページにテーマを載せています。皆さんの率直な意見を求めます。

## その他

## ◆私もひとこと(一四六ページ参照)

どんなことでも気軽に書きください。

## ◆わいふネット(一四六ページ参照)

教えて欲しい。聞きたい！ それに対するお答えも。読者参加のQ&A。

## ◆情報コーナー

お知らせ、募集など。要点を漏れなく整理してお寄せください。(見出し共で一四三・四行にまとめて)

# 投稿の

## ◆特別寄稿

字数自由。どのようなジャンルのものでも結構。本誌に適当と思われるものは掲載します。出版社に紹介することもあります。(ただし詩、短歌、俳句を除く)

## ◆コミック、イラスト、写真

一度作品をお送りください。本誌に合うものであれば依頼したいので。

## 注意

●原稿はお返しできません。

●投稿は一人一篇。ただし、「あなたへスマッシュ」「読んでよかった」「私もひとこと」「わいふネット」「情報コーナー」とはだぶつても可。

●締め切りは原則として偶数月の二十五日。

●郵送で当日必着。(読みにくいので、ファクスではお送りにならないようお願いします)

●他誌との二重投稿はお断りします。

●写真や、イラストを用意できる方は原稿とあわせてお送りください。

●誌上での匿名、ペンネーム使用可。ただし

いくつものペンネームを使い分けるのはご遠慮ください。

●掲載を希望しないお便りは「私信」と断り書きを。

●投稿は多少添削することがあります。

●原稿の最初に必要なように書きください。

原稿用紙は必ず開いたまま右上一カ所を留める  
ペンネーム・匿名希望の方は明記

コラム名	ペンネーム・匿名	年齢
住所	会員番号	本名
電話番号	タイトル	本文……

なくても可

(1)

ページを明記

(場所はどこでもよい)

匿名の方は住所を

載せるかどうか明記

●四〇〇字詰原稿用紙に縦書き。

●ワープロ打ちも二〇字×二〇行を一枚に。

(あて先) 〒162-0062 新宿区市ヶ谷加賀町二一五二六

わいふ編集部

投稿のきまり

# 編集集「だより」

◆暮れには分室と本社が合併し、引越し騒ぎであれがない、これがなくなったという大騒ぎ、ほんとうに大変でした。ものを捨てまくり、二所帯分の雑誌や本、パソコンに電話など、ようやく収まって、現在は結構居心地よくなりました。それでもパソコン四台に電話は四本、零細企業でもやたらと増えていますものですね。

◆さて編集長の田中はいま、「わいふ」二十五五年の歴史について単行本を一冊書いているのですが、巻末に「わいふ」から果立って何らかの意味で「書く」ことを仕事にしていられっしやる方のリストをつけたいと

思っているのです。

フリーライター、新聞記者、翻訳者、単行本の著者、脚本家、随筆家、どんな分野のお仕事でも結構ですので、あなたご自身の「書く仕事」に関する情報を（著作リストも含めて）送ってくださいませんか。

思いがけない分野で活躍中の方がいらっしやるかもと期待しています。

またご自分のことでなくても、「こんな人がいましたよ」と教えてくださっても結構です。締切り三月一日です。

◆座談会の企画が時々出席者不足で流れてしまします。その場合は女性の専門職へのインタビューに切り替えて一種の職業案内を掲載することにいたします。こんな職種について知りたい、と思っていられっしやる

方、ぜひお声をよせてください。

◆「あなたへスマッシュ」欄への投稿は、他のコラムへのものと違ってどんなものでも必ず乗せるべきではないか、という読者からのお声がありました。

残念ながらそれは無理なのです。そうした方針をとれば、「あなたへスマッシュ」はうっかりするとメールのような手紙のやりとりの場になってしまつてしょう。

「わいふ」は「思箱信箋」によって投稿を差別はしませんが、同時に「読者への便宜提供」のための雑誌でもありません。現実をありのままに反映しているという意味で、感動的でもあり、面白くもある文章を掲載すること、それだけが目的なのです。どうか奮ってそうした文章を寄せてください。

## 購読申込は……

ハガキか電話、ファクスでどうぞ。すぐに、本に郵便振替用紙を添えてお送りしますので、折り返しご送金ください。バックナンバーのご注文も同様に。限られた書店にしかおいてありませんので、直接お申し込みください。

## 購読中止は……

必ずお申し出ください。誌代が切れる際には、郵便振替用紙を同封していますが、送金をお忘れになる方があるため、誌代が切れても、引き続き送本してきます。ご連絡がないと、お送りしてしまいますので、ぜひハガキかお電話を。

**わいふ◆288** (隔月刊)  
●発行日 2001年3月1日  
●編集 わいふ編集部  
●定価 620円(本体590円)  
●年間購読料 4224円(送料共)  
●印刷 平河工業社  
●発行所 (株)グループわいふ  
〒162-0062  
東京都新宿区市谷加賀町  
2-5-26  
電話 (03) 3260-4771  
FAX (03) 3260-4773  
●郵便振替 001503-110430  
加入者名 わいふ編集部



ew



othering



ystem

子どもに「生きる力」をつける子育てを！

しっかりしつけるつもりでいても、子どもにのけぞって泣かれたり、ひっくり返られたり、いつまでも泣き続けられてしまうと、やっぱり言うことを聞いてしまう……。そんなとき、頼りになるのがNMSです。

子育ては  
NMS !!



▼「食事の最中にすぐ立ち上がって、少しも落ち着いて食べようとしません。あちこち歩き回るので、おウンとスプーンを持って、あとを追いつながら口のなかにハれてやっています」(一歳三か月)

▼「気に入らないものを出示されると、手で払い落とすので、まいます。コラツと怒るのですが、キャッキヤと笑って少しも耐えた様子がありません。まだ八か月で分からないのだから仕方ないのかも知れませんが、やはり頭には

きてしまっています。最近、食事の度に戦争状態です」

▼「こんなお母さんの悩みをあっという間に解決してしまうのがNMSです。寝かしつけの問題、だっこの問題などに比べれば、食べ物に関するしつけは、ご相談のうちではもっとも解決しやすいもののひとつ。悩んでいるNMSに連絡してください。」

食べ物の「しつけ」はゼロ歳から。子どもが何をどう食べるか、どんなマナーで食べるかが、その後の食生活の明暗を分けるのです。こんな赤ちゃんのだから、こんなことくらい、大丈夫——それが後になって、大きく響いてくるのです。真っ白な脳髓に刷りこまれた潜在意識を、あとで刷り直すのは至難の業。がんばってくださいね。

資料請求は〒162-0062 東京都新宿区市谷加賀町2-5-26(わいふ分室内)  
NMS研究会へ。☎03-33260-5500 FAX同3260-9398

◎朝日新聞をはじめ、各紙にて紹介の書！

# 非情の庭

無実の学徒戦犯

樋口茂子著

戦争裁判の矛盾を自ら起こした死刑囚助命嘆願運動を通して明らかにし、戦犯者のぬぐいがたい心の傷を痛切な思いで書き綴った戦争文学屈指の名著 待望の復刊。二四〇〇円



ひとりである みんなと楽しむ シニア世代のための

## 心も体もすつきり指体操

みんなで楽しむ シニア世代のための

## 心も体もすつきりゲーム

余暇問題研究所／高橋和敏・山崎律子編 だれでも簡単にできる指体操とゲームを各六〇紹介。福祉施設職員の方やレク指導者にもおすすめの二冊。各一八〇〇円

多様な心身症も本質を理解すれば恐くない

## ストレスとうまく付き合うQ&A

福居順二編著 現代にあふれるストレスを理解するための一〇一問。第一線臨床医による書き下ろし。二四〇〇円

家庭崩壊の危機から立ち直るために

## 不登校・家庭内暴力・病弱児のQ&A

中尾安次編著 多くの事例を随所に紹介。二〇〇〇円

## 各国企業の働く女性たち

柴山恵美子・藤井治枝・渡辺峻編著●取り巻く現状と未来展望 働く女性の異なる環境と共通の悩み。三〇〇〇円

## 日本企業の働く女性たち

藤井治枝・渡辺峻編著●取り巻く現状と未来展望 仕事とプライベートを両立させるためのメッセージ。二六〇〇円

## 男女共同参画と女性労働

赤岡功・筒井清子・長坂寛・山岡照子・渡辺峻著●新しい働き方の実現をめざして 労働環境整備の方途を探究。二六〇〇円

## 現代日本の女性労働とジェンダー

木本喜美子・深澤和子編著●新たな視角からの接近 女性とその労働世界を多面的に把握する。三五〇〇円

## 介護保険最前線

日独の介護現場の取材から斎藤義彦著 丹念な取材を通して介護保険の実像に迫る。「そこ」が知りたい公的介護保険」第一弾！ 二二〇〇円

## 新・介護保険総点検

各制度はこう変わった川村匡由著 各立場からみた介護サービスの变化と課題。新情報を満載した待望の新版好評発売中！ 二四〇〇円

## 新・介護福祉学とは何か

一番ヶ瀬康子監修 日本介護福祉学会編 介護福祉をあらためて本質的に問うと同時に実践的に探究することをめざす。二二〇〇円



ミネルヴァ書房

〒607-8494 京都市山科区日ノ岡堤谷町1番地 宅配可・価格は税別  
TEL075-581-0296 FAX075-581-0589 <http://www.minervashobo.co.jp/>